

# 庄内



第6号

庄内の昔を語る会



表紙題字 大河内 浩爾

カット 片ノ坂 登

表紙写真

関之尾の甌穴群おうけつは、滝から上流六百メートル、最大巾八十メートルで、一メートルから三メートルの甌穴が千数百も連なっている。この大きさまざまな深い窪み（甌穴）は、溶結凝灰岩（十一万年前の加久藤火砕流）の河床に削り込まれており、世界的にみてもきわめて珍しいものである。



# 巻頭言

庄内の昔を語る会 会長 野海 正治

この夏は異常な炎天、渇水状態で、今でも給水制限、断水を余儀なくされて、日常生活に思いがけない不便を強いられている地域の方々が多いようです。

何不自由なく生活できる私たちは、潤沢な地下水、豊かな河川の源である豊富な森林資源など自然環境の恵みであることに、慣れ過ぎているような気がします。

会誌「庄内」の発刊も六号を数えました。今回も、たくさんの方から玉稿をいただき、深く感謝申し上げます。萬代久男さん、室屋勝一さんからは、郷土でのご経験から、暖かい人間関係の思い出をよせていただきました。

研究では、横山哲英さんの専門的立場からの古墳時代庄内の説明、坂元庸さんの過去の体験を通しての貴重な庄内川の実情を発表、遺跡、自然環境保護の意を強くしました。坂元徳郎さんの足で探る庄内史跡の数も四十九項目になりました。まだまだ身近な史跡発掘が楽しみです。山元昭平さんは郷土発展のため貢献した先人の業績を探ってくれました。

「子や孫に語り伝えたいこと」もたくさん原稿をいただきうれしく思います。昔の古い写真をお願いしましたところ、家庭の珍しい大事な写真など提供していただきました。往時の郷土の暮らしぶり、行事などなつかしくしのばれ、郷土の歴史を風化させないためにも貴重な資料と有難く思っています。

ご協力いただいた皆様に厚く御礼申しあげ、今後ともご指導、ご支援をお願いします。

平成六年神無月



# 目次

## 巻頭言

平成五年度の歩み	庄内の昔を語る会書記局	1
----------	-------------	---

## 特別寄稿

布衣農相・前田正名	瀬戸山 幽 畝	2
生い立ちと猪野先生と観瀾舎	茅ヶ崎市 萬代 久男	3
私の人生の方向を変えた(その一)	朝霞市 室屋 勝一	7

## 研 究

庄内地方の古墳時代	東 区 横 山 哲 英	10
私たちの庄内川 改修事業のことなど	宮 島 坂 元 庸	18
庄内史跡探訪(その六)	東 区 坂 元 徳 郎	31
史蹟探訪(大隅方面)	西 区 菓子野 美和子	36
殖産に貢献した先達たち(三島通り)	町 区 山 元 昭 平	40
講演のあらまし	編 集 部	44

## 庄内町情報

庄内のお寺の大屋根修理が完成しました	町 区 山 元 一 信	47
J A 都城庄内支所	末 永 悟	49
学校便り	編 集 部	50
庄内小学校		50
菓子野小学校		51



乙房小学校	.....	52
庄内中学校	.....	52
向井さん宇宙を翔ぶ	.....	53
文芸欄		
幼い日の言葉	.....	55
稚児桜の清掃作業	.....	57
短歌		
青竹林	.....	59
俳句		
核弾頭	.....	60
天の川	.....	60
子や孫に語り伝える話		
庄内の乱と高岡郷	.....	62
乙房尋常小学校・校旗制定由来	.....	64
死線を越えて	.....	65
庄内出身の俊英たち	.....	66
ひさば壮丁の会	.....	69
終戦前後の米の供出をめぐる	.....	71
ふるさと「庄内」	.....	75
思い出すままに	.....	76
夏祭り生花会	.....	80
編集部		
鷹尾町	得能哲夫	55
東区	帖佐ミヤ	57
町区	故南崎喜美	59
東区	岩佐巴旦杏	60
庄内俳句会		60
宮崎市	松岡優	62
編集部		64
関之尾	佐土平栄蔵	65
西区	清水省三	66
千草	長友義行	69
宮崎市	高橋辰男	71
三股町	田上順子	75
東区	今村登	76
町区	山元一光	80



私の若い頃	.....	川崎	川崎速雄	82
大正の始めの頃	.....	町区 持永	テル・宇野ユキエ	85
懐古	.....	宮崎市	井上カツ	89
追憶	.....	鷹尾町	岩佐フヂ	90
私の子供のころ	.....	宮崎	宮島忠	93
関之尾の滝の思い出	.....	平塚町	山元正三郎	95
あの頃	.....	祝吉町	宮田安子	96
から芋拾い	.....	宮崎市	牧ノ瀬正雄	98
スポーツ王国、庄内	.....	町区	徳永幸男	99
のぼり太鼓でダルマ行列	.....	西区	有島義武	100
町区甚句踊	.....	町区	重久正子	101
昔の葬式風景	.....	町区	山元昭平	103
懐かしい「箱バス」	.....	西区	田崎ミエ	104
つりん「吊井戸」	.....	平田	和田盛行	106
けごのたね屋	.....	東区	野崎兼次	107
前田どんの「古着行商鑑札」	.....	編集部		109
昔の遊び	.....	東区	黒木ツミ	110
昔の子供の遊び	.....	東区	東幸哉	112
読者よりの便り	.....			115
編集後記	.....			116



# 平成五年度の歩み

## 庄内の昔を語る会書記局

現在宮崎庄内会をはじめ、都城、北諸地区、小林地区、遠くは阪神地方にも協賛者が増加しつつあり、会の発展向上のため喜びにたえません。今年度は庄内地区公民館ライフ、セミナーの共催で高齢者歴史講座に地区廻りをして先輩諸氏に非常に喜んで頂いたことは特筆すべき事業であったと考えます。

なお、郷土を愛する私達の熱意は市当局にも理解して頂き、史跡「稚児桜」の管理を委託されましたが、毎月一回、早朝より草刈り作業に参加下さいました会員に対し、厚くお礼申し上げます。また二年目を迎えた史跡整備事業は太陽造園の献身的努力により、釣璜院も様相を一変し砂利敷に立派に整地できました。会誌「庄内」第五号の「昔の食生活を探る」の特集は多くの関心呼びました。たまたまわが国は、前代未聞の米不足の窮状にあったため読者の反響もまた大きかったようです。

会員各位、協賛の皆さまのこの会への益々の御支援を願いながら、今年度の歩みを終わります。

年	月	日	曜	諸行事等	摘	要
5	5	22	土	平成五年度総会	議長 宮田孝行氏	
				講演会「歴史の重さ大切さ」	講師 宮本昌夫氏	
	6	7	月	「稚児桜」除草	会員有志奉仕作業	
	6	24	木	高齢者歴史講座	関之尾公民館 講師 坂元徳郎氏	
	6	28	土	同 右	庄内、千草公民館 同 右	
	6	28	土	同 右	乙房、平田公民館 同 右	
	7	20	火	一步園撤去の神事	市、前田氏、城山創生会、理事出席	
	7	22	木	「稚児桜」除草	会員有志奉仕作業	
	8	7	土	編集委員会	編集方針打ち合わせ	
	8	21	土	編集委員会	取材集約	
	8	26	木	「稚児桜」除草	会員有志奉仕作業	
	8	30	月	史跡探訪箇所下見	担当理事出張	
	9	6	月	編集委員会	原稿収集	
	9	14	火	史跡探訪 中止	降雨のため	
	9	19	日	編集委員会	原稿校正	
	9	27	金	釣こう院整地起工式	文化課、島津家、理事、太陽造園	
	10	1	月	会誌「庄内」五号印刷発注	文昌堂へ	
	10	7	木	編集委員会	会員有志奉仕作業	
	10	25	月	編集委員会	ゲラ刷り校正	
	11	6	土	「ふるさと祭り」出展	会誌「庄内」棚卸し、会計整理	
	11	7	日	会誌「庄内」五号販売	理事作業	
	11	17	水	講演会「生き生き人生」	ふるさと祭り会場にて 理事	
	11	26	金	史跡整備事業箇所調査	講師 堀 辰一氏	
	12	5	日	「稚児桜」除草	理事、文化課、観光課	
6	1	26	水	編集委員会懇親会	会員有志奉仕作業	
	2	7	月	高齢者会長会議に出席	新委員（江口、山元、大川原、馬寛）	
	2	17	土	研究発表「諏訪、豊幡神社」	語りべを依頼する 理事	
	2	26	土	編集委員会、理事会	坂元徳郎氏	
	3	11	金	史跡探訪 大隅方面	会誌の取材方法協議	
	3	17	木	例会「昔の食生活を探る」	鹿屋、吾平、志布志等	
	4	10	日	「稚児桜」除草 花見	話題提供 木幡敏正氏	
	5	13	金	理事会	会員有志奉仕作業	
	5	17	月	会計監査	総会行事の件	
					監査員 藤村氏、津曲氏	

# 特別寄稿

## 布衣農相・前田正名

瀬戸山 幽 畝

建立開渠紀功勞」建立ス開渠、紀功勞。

前田正名山川産 前田正名ハ山川ノ産

父善庵者病弱医。父ノ善庵ハ病弱ノ医ナリ。

長兄正則為医師 長谷ノ正則ハ医師トナリ

次兄善助戦場死。次兄ノ善助ハ戦場ニ死ス。

三兄正穀貴族員<sup>院議</sup> 三兄ノ正穀ハ貴族ノ員

四兄尊王京洛死 四兄ハ皇ヲ尊ンデ京師ニ死ス。

五兄密航被捕没 五兄ハ密航シテ捕エラレテ没シ

姉嫁慶府慶田家<sup>ゲイフ</sup>」姉ハ鹿兒島ノ慶田家ニ嫁ス。

末子正名助家計 末子ノ正名ハ家計ヲ助ケ

医師宗悦為徒弟 医師宗悦ノ徒弟タリ。

十六藩費學長崎 十六、藩費モテ長崎ニ學ビ

拮抗陸奥共相競 陸奥ニ拮抗シテ共ニ相競ウ。

出版辭書<sup>英和</sup>二千部 辭書ヲ出版スルコト二千部

佛國留學充費經 佛國留學ノ費經ニ充ツ。

七年辭書<sup>問</sup>從和訳 七年辭書、和訳ニ從イ

歡迎歐米派遣使<sup>米倉・大久保</sup>。歡迎ス歐米派遣ノ大使。

正名心中利通諫 正名ノ心中ハ利通ガ諫メヌ

農商務大臣陸奥不相合<sup>次</sup>

大臣ノ陸奥ト相合ワズ

辭官明治廿三秋<sup>重信</sup> 官ヲ辭ス明治廿三ノ秋。

七年之後對大隈<sup>要</sup> 七年之後ニハ大隈ニ對シ

農相更辭松方<sup>要</sup> 農相ヲ更ニ辭ス松方ノ請ヒ。

翌年着手開田業 翌年着手ス開田ノ業

模範農村夢安永<sup>モアル</sup> 模範農村ヲ安永ニ夢ム。

招聘老農理紀助<sup>石川</sup> 招聘ス老農ノ理紀之助

風俗經濟彼指導 風俗ト經濟トハ彼ノ指導ナリ。

事業困難負債大 事業ハ困難ニシテ負債大ナリ

開田面積二百町。 開田ノ面積ハ二百町。

居民頌德祭神社 居民ハ德ヲ頌シテ神社ニ祭リ



西南戦争勃発時。西南戦争、勃発ノ時。

万博事務為官長 万博ノ事務ニハ官長タリ

建言直接貿易策。建言ス直接貿易ノ策。

山梨知事著蓑笠 山梨ノ知事ハ蓑笠ヲ著シ

局長次官益慕進。局長・次官ト益々慕進ス。

陸奥着任追正名 陸奥・着任シテ正名ヲ追イ

議官議員閑職転。議官・議員ノ閑職ニ転ズ。

在野奔走興産業 野ニ在ッテ奔走シ産業ヲ興シ

私設農商務省觀。私設農商務省ノ觀アリ。

敷島の大和小舟に八帆あげて

四方に馳せ行く秋は来にけり。

行脚道中愛児死 行脚ノ道中ニ愛児死スルモ

不帰供養金剛寺 帰ラズシテ供養ス金剛寺。

まだ耳に声は聞えて影はなし

心のままに尋ねてしがな。

欧米視察及八回 欧米ノ視察ハ八回ニ及ビ

開田事業全国至。開田ノ事業ハ全国ニ至ル。

大正八年死病院 大正八年、病院ニ死シ

天子賜爵正三位。天子爵ヲ賜イ正三位タリ。

## 生い立ちと猪野先生と観瀾舎

茅ヶ崎市 萬代 久男

(宮島出身)

### 一、やつせん坊

父末八、母スエケサの五男として大正十年二月宮島区で生れた私は、八人きょうだいの末っ子でもあったので、精一杯甘えて育ったようである。数え年五才まで母に抱かれてオッパイをしゃぶっていたし、母が何処に行くにも何時も離れずについて行くので、尻毛(しりげ)と言われていた事など今でもはつきり覚えている。そして、生まれつき余り丈夫な方ではなかったらしい。そのようなことで、自ずと引ッ込み思案で臆病な子に育ち、およそ喧嘩などしたことのない―すれば負けるに決まっているような弱虫で意気地無し、即ちやつせん坊であった事を今にして自認せざるを得ない私である。

小学校一年生になったのは昭和二年四月である。初めての春の遠足は上川崎から関之尾の滝を遠望する行程であった。前年の洪水で庄内川の橋は殆ど流失して復旧工事が遅れていたのであらう、川崎へ渡る橋も上川崎から関之尾へ渡る橋も板子二枚

の仮橋であった。前者は粗末ながら縄の手すりが設けてあったので問題はなかったが、後者は何もないので怖かった。約半数の生徒は四つ這いになって渡ることになり、私もその一人であったが、橋の中程迄来ると川の流れが早く、相対的に自分が川上に動いているような錯覚を起こして平衡感覚を失い、私の他三、四人が川に転落した。幸い浅かったので皆溺れることなく、先生方に助けられて岸に上がったが勿論ずぶ濡れである。先生が手分けして家迄送って下さることになり、私が一番遠いので池上先生の自転車に御世話になったが、先生は風邪を引かないようにと上着を私に着せて下さった。この一件は、私の運動神経の鈍さと臆病な一面を示していると思われる。

昭和六年、五年生の秋に満州事変が勃発し、皆、軍国少年宜しく遊びは専ら戦争ごっことなった。月刊誌「少年倶楽部」に連載される漫画「のらくろ二等兵」が順調に昇進して一等兵か上等兵になる頃、私達は六年生になった。新進気鋭の校長、岡園助左衛門先生が着任されて、庄内文集の発行や器械体操の奨励等校風の刷新を図られたが、私が一番困ったのは器械体操であった。鉄棒の逆上がりもできず、跳び箱の倒立回転など怖くて足が竦んでしまうのである。校長先生が時々巡回して叱咤激励して下さったが、この二種目は遂に出来ず仕舞いに終わった。

## 二、夏期補修講座

昭和八年に小学六年を終え都城中学校に入った。高等小学校から少年航空兵への道を夢見ていた私は余り乗り気ではなく、父と次兄の強い勧めに従ったまでのことで受験勉強も碌にしなかったが、幸い世界的不況のため受験者が入学定員ぎりぎりであり、極く簡単な口頭試問だけで全員合格となったらしい。英語、代数、幾何、漢文等の新しい科目に容易に馴染めない私は、時間中に欠伸を頻発し居眠りもよくした。結果は推して知るべしで、一年一学期の席次は一五四人中七六番で父を悲しませ、先生からは夏期補修講座の受講を命ぜられた。

庄内町でもその当時中学校、商業学校、農学校の生徒に対し夏期補修講座を設けて頂いたので、私は両方に通うことになったが、鈍い頭には即効効果はなかった。でも、一学年終了時の席次は七三番となっているから、それなりの成果はあったと言うべきであろう。忘れられないのは、町の講座の上がりには豚一頭を屠殺して御馳走して貰ったことである。役場の担当者は兵事係の吉川さんと言う方で、四〇貫（二五〇kg）の身の締まった一脂身の少ない豚を探すのに一苦労し値段は二七円だった、と話されたのを記憶している。小学校教師の初任給が三〇円で私達中等学校生徒は四〇人程度であったことを考えると、町の

人材育成に対する熱意のほどが察せられよう。

### 三、猪野先生の一言

中学二年を迎える春休みに三番目の兄が、稼いだ駄賃の中から教科書代として五円程出してくれた。上級生から使い古しの教科書を安く入手するのが通例であったので、私は余った金で英和辞典を買うことが出来た。そして、我れながら殊勝にも英語の予習をやる気になった。辞書珍しさに惹かれた為であるが、中途半端な成績では父や兄に申し訳ない、と感じたのもあり、また、一年の時怒られてばかりいた英語の先生が転勤されたので、少し気分転換が得られたせいもあった。予習を始めてみると判らないところが沢山出てくる。そこはアンダーラインをして先に進むことにした。

英語の先生は猪野武雄という高知県出身の少し赤ら顔で朴訥ぼくとつそうな人、髪がねじれて茫々なので「雀の巣」というあだ名を付けられていた。さて授業が始まり、アンダーラインのところは先生の講義で大抵は説明するが、なお理解できない点が毎回一、二箇所あるので質問する。三回目位の授業であった。例のとおり質問すると先生は答える前に、「萬代君はなかなか良い質問をするね」とお褒めの言葉を下さった。私は赤面しなが

らもとても嬉しくて、予習に一層励みがつくようになり、英語だけでなく他の科目にも逐次広げて行った。そうすると段々全ての授業が面白くなり、居眠りや欠伸とは殆ど縁がなくなってしまう。その結果は顕著に現れた。即ち二学年の席次が三二番に上がり、三年は足踏み状態だったが四学年には一二番まで躍進した。父兄面接の際大いに褒められたそうで、嬉しそうに晩酌の杯を重ねる父の横顔を見て、私も少しは面目の立つ思いであった。

その頃、都城中学では四半期毎位に四年生、五年生全員参加の共通模擬試験が行われていた。その結果は、職員室前の廊下に掲示されることになっていたが、私は四年の時一〇番前後、五年になると概ね四、五番程度であったように記憶している。「良い質問をするね」と仰った猪野先生のあの一言こそ私にとって何物にも代えがたい金言となったのである。

### 四、観瀾舎（かんらんしゃ）

体力と精神力の面で私が最も恩恵を受けたのは観瀾舎である、と思う。観瀾舎の歴史なり設立の趣旨等について教えられた記憶はない。庄内町出身の中等学校三校生徒全員参加の自治活動の場であり、絶対の権威を持つ最上級生徒集団指導の下に、毎

週土曜日午後は柔道、剣道の稽古に励み、二ヶ月か三ヶ月に一回の試膽会と茶話会が行われた。建物は高い床の洋風剣道場兼更衣室と長屋風柔道場の二棟で、旧小学校運動場の南東隅に在った。試膽会は夜柔道場に集合して、一時間ほど上級生からいろんな怪談を聞かされたあげく、指定の場所まで一人ずつ行かされる。森閑とした神社や墓地、心中事件のあった川原等が選ばれ、其処には上級生が二人一組で先行して物陰に潜み、色んな脅しを仕掛ける。およそ人通りなどのない真つ暗闇なので結構怖いのである。茶話会はこれとは打って変わって和やかな雰囲気、生菓子にありつけるのが楽しみであり、先輩の何気ない話の中に教えられる事もあった。会費は二五銭程度だったと思うが、たまには或るテーマについて賛成と反対の二組に別れての討論会も行われた。

毎学期に一、二回は武道稽古のあとなどに制裁が行われたが、それは決して理不尽なものではなく、非礼、非行、怠惰その他男らしからぬ言動に対し反省を求めるものであった。鉄拳がよく伴ったけれども、「鉄は赤いうちに打て」に通ずる愛の鞭であった、と私は今でもそう思っている。私も二年生の時怠惰を指摘されて相当強くやられたが、正に「魂が入った」のであり二度とやられることはなかった。

年中行事のスポットは赤穂義士の討ち入りに因む「義士会」（この名称に自信はないが）であった。正月休みの厳寒の夜半観瀾舎を出発して母智丘神社に参拝し、神社下の広場で制裁の総決算ともいうべきものが行われたあと、平田、乙房、宮島、今屋を軍歌など合唱しながら一巡するのである。途中二、三回休憩して藁束を燃やし暖をとるけれども、夜明け前の底冷えに手足は凍えて堪えられない程である。

この寒中行軍が終わって観瀾舎に着いた後は、あたかも地獄の後の極楽に会おうようなもので、熱くて美味しいぜんざいの大鍋が待ち受けている。これは主として風邪患者等病人で軽作業に差し支えない人、それが少ない時は模範生を入れて約五人が選ばれて炊事軍曹として居残り、小豆の煮込みから始めて夜通しで作ってくれたもので、勿論餅もふんだんに入っている。

「頬が溶けそう」という表現そのもので、その醍醐味はまた忘れられない青春の想出である。

このように、観瀾舎は誠に寛厳宜しきを得た青少年育成の場であった。この厳しい修練の御陰で、生来やつせん坊であった私も何とか根性ができ、男らしさも及ばずながら身に付き、その後の厳しい海軍の諸訓練にも耐えられたのだ、としみじみと回想し心から感謝する昨今である。



※氏は宮島出身。昭和十七年六月、ミッドウェー海戦で最後まで奮戦した空母「飛龍」に海軍機関少尉として乗組み、奇跡的に艦底から脱出した機関部員三十九名とともに、二週間余に及ぶカッター漂流の果てに米駆逐艦に救出される。そして終戦までの三年余敵国で苦難の生活を強いられ、昭和二十一年一月無事帰還される。

編集部

## 私の人生の方向を

### 変えた（その一）

朝霞市 室屋 勝 一

昭和二〇年八月十五日終戦の玉音放送を聞いたのは、埼玉県豊岡町陸軍航空士官学校の大講堂でした。終戦によって私の運命は変わったのです。軍國主義華やかかりし時代の生まれで、都城中学卒業と同時に陸軍士官学校六〇期生となり、本科航空に進学して在学中に、終戦引揚げとなったのです。

前途を失い帰郷した所、前田町の実家は丸焼け、一面が焼野

ケ原でした。当然進学をあきらめざるを得ない状況にありましたので、勤めを考えねばなりません。小学校の先生になりたいと父に頼み、父が当時の庄内小学校畑中栄藏校長に相談したのです。数ヶ月後、教育委員会より助教の辞令を拝受しました。

新任地は庄内小学校でした。満二〇才の時、担当は当時一〇才の四年生男女混成クラスでした。青春時代の真っ盛り。怖い物知らずの気概で着任しました。当時の校舎ですが、丸太棒と板張りの急造バラック建てでした。床なし、直接地面です。机と云えば、丸太棒二本を地面に打ち込み厚板を渡しただけの固定机。硝子窓はありません。窓に当る部分は一疊程の戸板で、下を押上げて短い支柱で開いて止め、明りを取ります。夏は全部押し上げて全開します。風通し良く快適でした。一年先輩の橋口利光先生が在職されていて唯一の相談相手でした。バラック建校舎とは云え、献身的な町内の総力をあげての立派な善意の建物だと教えられました。環境最悪でもやり方によっては最高の教育の場になると知らされました。戦時中Ｕターンされて居住の父兄の子供さん、疎開してこられた父兄、子供のみの疎開者等々私のクラスにも上野学、朝倉一郎君等々がいて、答えられない質問に出会いました。

教壇に立つ日が続くにつれ、教育専門校出身でない私には、

児童心理学、教育論等々、基礎知識全くない為、自信喪失の時期を迎えました。特に父兄の教育熱心さには、己の無能無知を思い知らされ心中穏やかならぬ苦悩の日もありました。人に教えるより、自己練磨、自己研鑽、自分に知識を注入するほうが先だと考えるようになり、やはり大学進学しないと、自身の進学を希求する衝動にかられる事が多くなりました。木之下政義教頭に呼ばれて叱られた事が数回あります。夕食に呼ばれて自宅にて教えられた事もあります。終戦後、英文字が急に増加し始めました。菓子のパッケージや街頭看板文字、新聞等にです。「教育指導要領」という文部省の指針にそって大項の指導指針が学年毎に決められています。教頭から叱られるのは、いつも私が指針外の指導をしたからなのですが……。四年生にはローマ字教育はありませんが、私はあえて必要と信じ、ローマ字をこっそり教えました。生徒は興味を持って面白がって、熱心に覚えてくれました。ローマ字の教材は街中にあふれていました。キャラメル箱の英字が読めるようになった子供達は大喜びでした。同学生徒の中で噂となり、私の指導が露見し、教頭に呼出され中止指令が出された時にはキャキュキュ迄全部終了した段階でした。

当時川田正子・孝子の童謡がラジオ放送で、全盛期みたいで

した。この姉妹の童謡に興味を持ち、これを教材にすべく、先ずオルガン操法からだと思い、野海サエ先生に教えを乞いました。足踏みオルガンを使い放課後、日の暮れる迄練習を続けました。ピアノ教習の基本であるバイエルも同時に練習する様指導を受けました。気違いみたいに連日夕刻の特訓を受け、川田正子・孝子の歌集を入手し、教えられる程度の演奏ができるようになりましたので、私のクラスは毎日必ず一時間の童謡音楽時間を組入れました。二部合唱もありました。これも行きすぎ指針外で叱られました。「みかんの花咲く丘」「里の秋」等の童謡を耳にすると昔を思い出し、涙する時もあります。当時四年二組の腕白坊主さんやお転婆娘さん達、半世紀を経て、立派な社会人・家庭人となられ、お達者でしょうね。

終戦後物資のない時代、裸足の子も多かった冬期間、直接地面の教室では勉強どころではないと、好天気の日には朝一番に教具を持参し、小学校裏の城山に出掛けました。暖かな陽だまりがあり、大自然の教室で日向ぼっこしながら勉強し、広地の城山で遊びました。子供達は大喜びでした。出張授業の回数多さも教頭先生を悩ませました。期待された事もありました。鮮明な思い出として、年一回の秋の大運動会です。全校生徒を三分割し、最高学年生徒から補助リーダーを出し、若手職員トリ

オ、茨木、橋口、私に応援団長を命ぜられたのです。天高く馬肥ゆる秋の一日。日本晴れの大イベントです。娯楽の少なかった時代でもあります。地域の長年の伝統慣習として、運動会には家族肉身の方々が食事、飲物持参で朝早くから来られます。庄内町のあらゆる部落から、家族総出の観戦です。学校側も前日から総員で準備が大変でした。運動会場の入出場門は杉葉を使って作り、万国旗の飾りを張り、女性先生方も大張り切りでした。帖佐トキ、黒川、乙守、池田、水谷、隈元、野海サチ、サエ、山元ミヨ子、汾陽その他の先生方、若かったあの頃、昭和二十二年の秋だったでしょうか。



## さつま狂句

動つどち 耳ぬ引張つ 腹れ当てつ

横ご爺が ごろいと寝込んだ 境け争け

福島 福助

踊い好つ 白足袋びや懷れ 用意つ来つ

太か尻つ 見込ん娶たて 児が出来じ

馬迫 びつきよ

儲け話し 直き顔出す 狡ね奴

妻ん添寝 一向じや精気の無 病氣亭主

又木 菖福

# 研究

## 庄内地方の古墳時代

東 区 横 山 哲 英

(都城市 文化課)

### 一、はじめに

もう数年前のことになるが、奈良にある藤ノ木古墳の発掘調査の様子が、連日テレビや新聞紙上を賑わせたことがあった。

また、つい先日、佐賀にある久里双水古墳の石室内部を、胃カメラのような細いファイバースコープで覗いた写真が公表され、分厚い石の蓋一枚隔てた石室の中に封じ込められた、約一七〇〇年前の世界に胸を躍らせた諸氏も多かったことと思う。

最近では、あちらこちらで発掘調査が実施されるようになり、身近なところでも数千年前の人々の生活の跡を目にする機会が増えてきた。また、吉野ヶ里遺跡のように昔の生活の様子を体感できる場所も徐々にではあるが増えつつある。しかし、こ

した昔の生活の跡が広く知られるようになる一方で、古墳が持つ魅力の前では、立派に復元されたムラの様子も色あせて見えしてしまうことは、否定の出来ない事実である。確かに、エジプトのピラミッドや中国の皇帝の陵墓とともに、世界でも最大級の墓として評価されている日本の古墳ではあるが、所詮人生終焉の場所ではない墓が、これだけ多くの現代人をひきつけるのはどうしてなのだろうか。もちろん、遺体とともに納められた金の冠や珍しい玉の首飾り、中国から伝わった神秘的な銅鏡などの副葬品にひかれるせいもあるだろう。だが、私にはそうした物の持つ魅力以上に、古墳は何かしら私達の気持ちをひきつけ、心の奥底に訴えかけるものを持っているような気がしてならないのである。

現在私達が暮らすこの都城盆地にも、数々の古墳が作られ、その中のいくつかは現代にまで伝わってきている。ただし、日本各地でよく見られる大きな塚のような古墳（高塚古墳）以外に、この南九州では特殊な墓が作られ、それが現在でも発見され続けている事実はあまり知られていない。地下式横穴墓と呼ばれるこの特殊な墓は、今から約一、五〇〇年ほど前から築かれはじめ、宮崎県と鹿児島県の一部にしか所在していないため、熊襲・隼人族の墓ではないかともいわれている。



そこで今回は、都城の三大地下式横穴墓群の一つである菓子野地下式横穴墓群を取り上げ、約一、四〇〇年ほど前の庄内地方へと皆さんをご案内していきたいと思う。

## 二、古墳時代とは？

一般に、古墳時代というと、今から約一、七〇〇年前から一、三〇〇年前までの約四〇〇年間のことを指している。ちょうど日本にコメ作りが伝わってから七〇〇年ほど経った頃、日本の各地に古墳と呼ばれる巨大な墓が作られるようになってくる。コメ作りを行ううちに登場してきた、ムラを束ねるリーダーの生前の功績を、巨大な塚をムラから見える所に築くことで称えようとする気持ちであったのか、それとももっと強制的な指示のもとで築かされたのか、はつきりとしたことは分からない。ただ、鍵穴形の前方後円墳をはじめとして、円形や方形のかなり画一的な形態の墓が、全国的に一斉に作られるようになったことは、一つの時代の表れであり、それを冠して「古墳時代」と称したのは、実面的を得た表現である。

だが、誤解を受けやすいので付け加えておくが、一般の人々の基本的な生活の仕方、つまり堅穴住居に住み、集団でコメ作りを行うという生活が、弥生時代と古墳時代で変わったわけ

はない。縄文時代と弥生時代では、コメという新しい食材の登場で、かなり生活の仕方は変化した。弥生時代と古墳時代の間にはそうした変化はなかったようである。ただし、古墳時代は一般の人々の暮らし以上のレベルでの変化を遂げている。つまり、弥生時代では小さなムラを一つの単位として生活が成り立っていたのが、古墳時代になると小さなムラを集めた大きなムラ、そして大きなムラを集めたクニというような、かなり大規模な生活圏ができていったのである。これが、いわゆるヤマト政権といった日本を統一する政権への糸口になり、一気に中央集権的な国作りへと進んでいくわけである。そうした意味では、国民の生活は変化していないのに、それをまとめる国の枠組みだけがめまぐるしく変化する、現在の政治の様子に似かよっている気もするが。

いずれにしても、大きなクニという枠組みができるにつれ、ますます巨大な古墳が築かれるようになったわけである。今から約一、五〇〇年ほど前、現在の近畿地方を中心としてヤマト政権が樹立された時、それは絶頂に達する。そして、ちょうど同じ頃、そこから遠く離れた辺境の地、南九州にも壮大な塚を持つ古墳とは対称的な独特の墓の構築が始まっていくのである。

### 三、地下式横穴墓とは？

「昭和五十七年冬。菓子野小学校前の道路改修工事中の重機が、掘削中のボラ（御池を噴火口とする火山から降った火山性軽石）層の中にぽっかりと開いた三つの穴を発見した。現場の作業員がその中を覗くと、折り重なった人骨とともに、鉄鍬（てつせく）

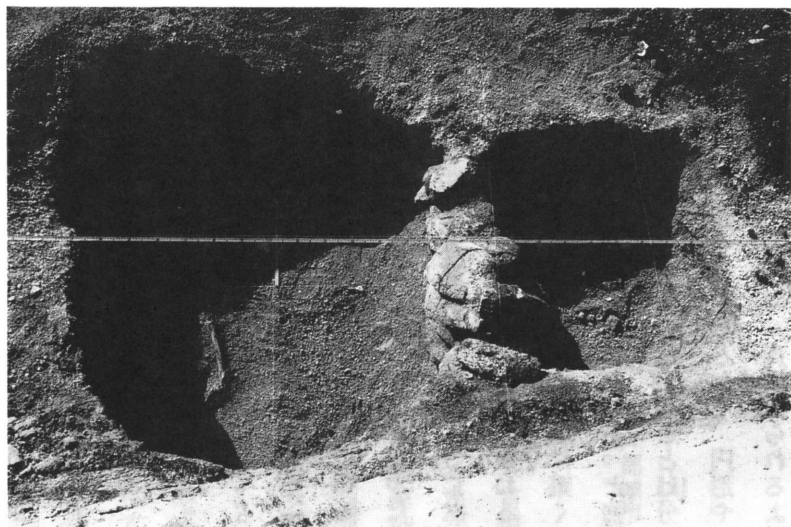


写真1：地下式横穴墓全景（直上から）

（鉄製のやじり）や貝輪（貝製のプレスレット）などが、くずれ落ちたボラの合間に見え隠れしていた……。」

これが、庄内地方初の地下式横穴墓が発見されたときの状況である。今日のように、遺跡の発掘がひんばんに行われ、毎日新聞やテレビで遺跡の話題が取り上げられている時代とは違い、当時は地下式横穴墓はおろか、遺跡すらあまり知られていなかった。そのため、現場監督の指示で、一旦はこの三基の地下式横穴墓はシラスを詰めて埋められてしまったのである。数日後、県教育委員会の手で再度その姿を現した時、シラスの圧力で中の人骨はつぶれ、貝輪などの副葬品もかなり破損していたという。しかしながら、その当時ぽつぽつと発見され始めていた地下式横穴墓が、庄内川に面した菓子野の台地にも存在していたことは、大変貴重な発見となり、その後の調査のきっかけになっていったのは確かである。

ところで、あらためてここで地下式横穴墓について簡単に説明しておきたいと思う。この墓は、地下式というだけあって、作られるのは地表から1m以上掘り下げた地下である。作り方としては、まず地表から真っ直ぐ1m以上の堅穴を掘る。次に、都城の場合、表土から1m前後で黄色のボラ層が出てくるので、今度はそのボラ層を横からえぐるようにして横穴を作る。一旦

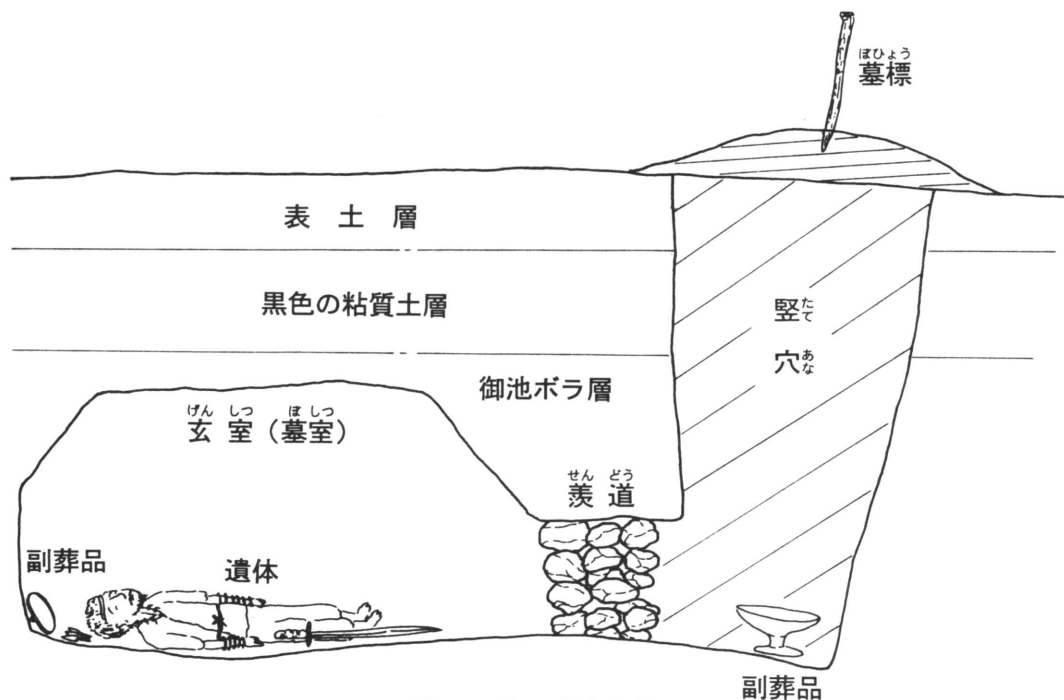


図1 地下式横穴墓

横穴ができると後はボラは自然と崩れるので、簡単な作業でかなり広い墓室がボラ層の中にできるわけである。そこに、遺体や副葬品を納め、竖穴と墓室の間（羨道）に軽石や河原石を積んで、墓室を密閉する。最後に、竖穴を埋めてしまえば、ボラ層の中に密閉された墓室だけが残るわけである。

ただし、近接した場所に幾つも墓が築かれていることが多いので、地表に小さな土饅頭や墓標を立て、墓地としての目印があったと考えられている。（図1参照）

では、こうした地下式横穴墓がなぜ熊襲・隼人族の墓といわれているのか、そして、この菓子野の地下式横穴墓群が築かれた頃の庄内地方はどのような環境だったのか、都城の他の古墳群と比較しながら、もう少し見ていきたいと思う。

#### 四、都城盆地の古墳の位置付け

志和池小学校の北側に築池という地区がある。一昨年、ここを通る県道の拡幅工事に伴って、二十基あまりの地下式横穴墓が発掘された。それらの中には、直径三十cm近い銅鏡が納められていたものや、馬具や馬骨の入ったものなど、これまでの常識を覆すような資料がたくさん含まれていた。この築池地下式横穴墓群では、これまでに三十基近くの調査が行われており、

都城盆地でも代表的な地下式横穴墓群として広く知られている。そして、近くに点在する志和池古墳群との関係という点でも、かなり興味深い遺跡である。

先ほど、古墳というのはいろいろな形の塚を持った墓のことを指し、地下式横穴墓はそれとは一線を画した特殊な墓であると説明した。確かにこの二つの墓では埋葬されている人の立場も、副葬されている品々も異なっている。断定はできないが、古墳（高塚古墳）は、中央のヤマト政権に通じる人々（よそから入ってきた人々）の墓、地下式横穴墓は熊襲・隼人族（古来から住み着いている人々）の墓と考えることもできるようなのである。ところが、熊襲踊りの起源にも語られている通り、もともと熊襲・隼人族は中央政府に弓引く逆賊として伝えられている。それなのに、志和池では敵同士の墓であるはずの古墳（高塚古墳）と地下式横穴墓が密接につながって営まれているのである。では、これは一体どのように解釈すべきなのだろうか。

日向国（現宮崎県）では、宮崎平野部から西都周辺にかけて、巨大な古墳群が点在している。中には西都原古墳群の男狭穂塚（めさほづか）・女狭穂塚（めさほづか）のように、九州最大級のものもある。つまり、日向国ではここを扇の要として、そこから日向灘にそそぐ各河川沿って、内陸部へと浸透していったわけである。ところが、あらゆ

る地域へと浸透していったはずの高塚古墳の勢力であるが、都城盆地以北の小林・えびの地方では、現在までのところ高塚古墳は存在しないと考えられている。つまり、中央政府の意向を受けて進駐してきたこの勢力は、結局都城盆地以北へは浸透できなかったということである。

話はそれるが、熊襲踊りの歌の中に「ヤマトタケルノミコト（日本武尊）がクマソタケル（熊襲武）を討ち滅ぼしたお祝いに……」というくだりがある。ご存じのとおり、日本武尊は神話上の人物であり、天皇の命を受けてあちこちの逆賊を討伐して回った、とされる人である。ここで、私が非常に興味深く感じたのは、わざわざ熊襲討伐の話を神話にまでしてしまっている点である。というのも、神話というものは権力者が自らの存在の正当性を示すためにつくりあげたものであり、その出自の神秘性や被支配者に与える畏怖感（いふかん）を根本的な目的としている。ところが、その中に熊襲は悪者だから討伐したということをつたわなければならないほど、熊襲族というものが彼等にとって脅威であり、まさに目の上の瘤（こぶ）であったと解釈できるからである。そして、こういった神話や、小林・えびの地方には高塚古墳がないといった事実を合わせて考えてみると、次のような仮説が立てられるのである。



「宮崎平野部から西都周辺にかけての地域を制圧した中央政権の勢力は、勢いに乗って大淀川をそ上し、諸県地方の入り口まで達したところで思わぬ抵抗にあう。古くから諸県地方に暮らす熊襲・隼人族の抵抗である。初めは、勢いのあった中央政権の勢力も、長引く戦況に消耗し、ようやく都城盆地を制圧できた頃には、それ以上北上するだけの余力がなくなっていた。その結果として、小林・えびの地方には高塚古墳ができなかった」というものである。

おそらく、中央政府の威信をかけての戦いが、結局不満足な結果に終わった事へのストレスが、神話や日本書紀・古事記の中での熊襲・隼人族批判へと走らせたのかもしれない。いずれにしても、この都城盆地が高塚古墳を造築する勢力の最前線として、その後も不安定な状況であったことは否めず、菓子野地下式横穴墓群の様子もそれを端的に示しているのである。

## 五、菓子野地下式横穴墓群の意味

菓子野地下式横穴墓群では、現在までに十四〜十五基の墓（そのうち調査が行われたのは八基のみ）が発見されている。いずれも菓子野小学校の前面に広がる、庄内川にむかってせり出した台地の縁辺部で発見されており、当時はこの辺り一帯が

墓地として機能していたと思われる。これらの墓からは、人骨が一〜三体分ずつ出土しているが、年齢性別ともばらばらで、特に選ばれた人物（首長）だけを納めたわけではないようである。そういった点では、これらの地下式横穴墓とほぼ同じ時期（今から約一、四〇〇年前）に築かれ始めた高塚古墳でみられ



写真2：人骨出土状況

る、追葬の風習（同じ墓の中に、後から死んだ人も一緒に納める風習で、親子や夫婦などでよくみられる）に似かよっているような気もする。

ただし、一般的に地下式横穴墓ではその長い変遷時期を通して、武器・武具をその副葬品の主要品目しているのに対して、

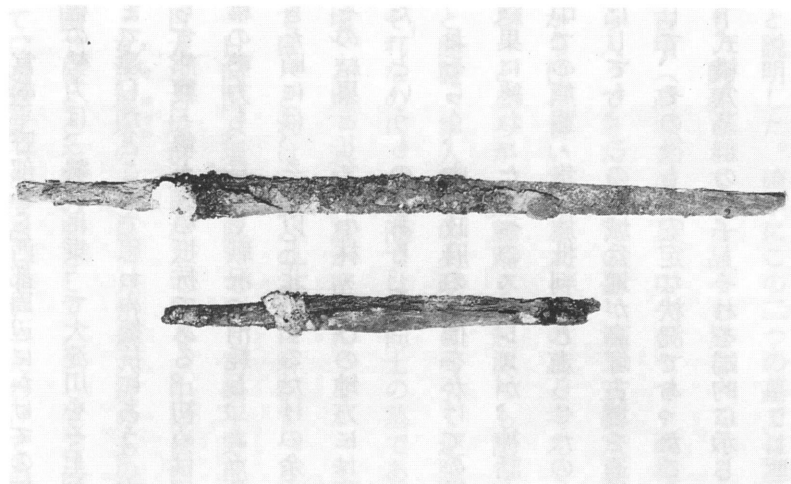


写真3：地下式横穴墓出土蛇行剣（上）・鉄剣（下）

高塚古墳の場合  
は、最初の段階  
だけが武器・武  
具で、徐々に生  
活用品へと変化  
している。これ  
は、高塚古墳へ  
埋葬される人々  
が、次第に戦い  
ばかりの生活か  
ら解放され、安  
定した状況の中  
で生活していた  
ことを示してい  
ると考えられる。

また、先ほどの高塚古墳における追葬<sup>ついそう</sup>の風習にしても、安定の進みだした同じような時期から始まっているのである。

一方、地下式横穴墓では常に武器類と一緒に副葬している反面、最初の段階から追葬の風習がみられるようであり、そういう点では、かなり特異な傾向を示している。これを、部族的な色彩の強さと言い切ることもできるが、果たしてそうなのだろうか。

菓子野第57―5号墓からは、熟年男性二体と熟年女性一体分の人骨が出土している。通常夫婦関係の男女が一つの墓に納められる例は高塚古墳でもみられるが、一妻多夫制ではない時代でこのような埋葬のされ方は、夫婦以外の家族・親戚が納められているとしか考えられない。また、菓子野第57―4号墓では幼児一体分の、菓子野第59―2号墓からは老女一体分の人骨が出土している。これも、この地下式横穴墓に納められる対象が、一家の家長やその配偶者に限られていないことをはっきりと示している。ただ、かといって、当時のこの地域の人々全てがこうした墓を作っていたわけではない。やはり、ある程度限られた人々だけがこの墓に納められていたということは、発見される地下式横穴墓の数の少なさから容易に推測できることである。こうしたことから、私は、地下式横穴墓は一つの集落の中で

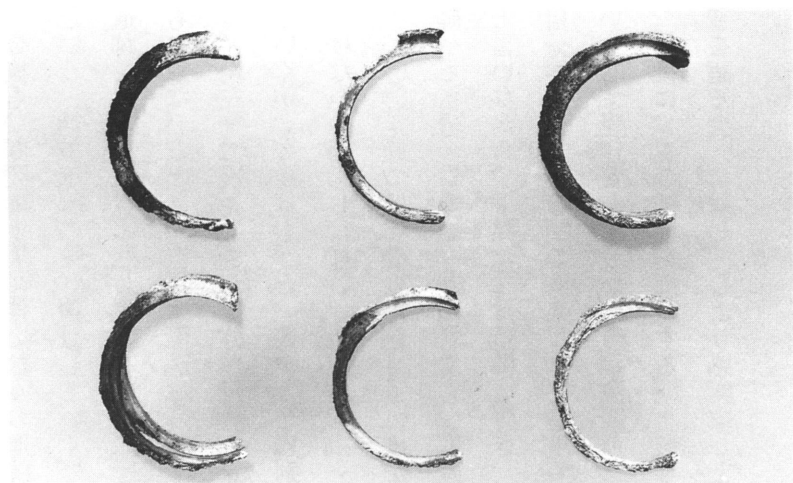


写真4：地下式横穴墓出土貝輪

も、主に戦士階級もしくは指導者階級の「家」

の墓地であり、

それぞれの家か

ら出た死者を随

時追葬していた、

と推測した。こ

れは、古墳＝権

力者というイメー

ジからはかなり

かけ離れた状況

であり、高塚古

墳を築いていた

人々に比べて、

これらの墓を築いていた人々の方が、個人よりも家族・親戚全体を大切に思う気持ちが強かったと考えたい。そして、そうした強い絆が高塚古墳の勢力を容易に寄せつけない結果へとつながったのかもしれない、と。

いずれにしても、菓子野の地に、こうした強い絆で結ばれた

部族の集落があり、都城盆地へと侵入してきた勢力と自らの部族の独立をかけて、激しい戦いを繰り返していたのは確かである。そして、それが、今から約一、四〇〇年前頃のことである。

## 六、おわりに

菓子野小学校の裏と菓子野地下式横穴墓群のある台地の端に、小さな円墳があったのを皆さんはご存知だろうか。庄内古墳と呼ばれた県指定の文化財であった。これらの円墳は、先ほどの激しい戦いが終り、地下式横穴墓派と高塚古墳派の人々が徐々に歩み寄り始めた頃の時期に、志和池や高城あたりと一緒に築かれたものである。つまり、その頃には菓子野でも安定が訪れ、高塚古墳派との融和が進んでいったわけである。これらの高塚古墳を発掘したら、恐らく約一、三〇〇年前頃の遺物が出土したと考えられるが、残念ながら、現在これらの古墳を見る事はできない。

昭和五十九年に庄内古墳の指定は解除された。私が小学校六年生（昭和五十五年）で見学した時も、すでにその姿は消滅寸前であった。子供心に、古墳とはこんなに貧相なものかと思つた記憶がある。その当時も、恐らく現在も畑だと思いが、せつかく二十世紀まで残ったこれらの大切な遺産が、大都会のビル

の谷間ならともかく、広い畑の真ん中ですら残せないのは、大変残念であると同時に、同じ庄内で生まれ育ったものとして大変恥ずかしく感じる。なぜなら、今後この地に生まれた子供達は、自分の故郷にあった古墳のことを知ること、見ることもできないからである。

今後も、開発の増加に伴い数々の遺跡が発見され、発掘調査という「前破壊」の後、消滅していくにちがいない。そうした遺跡を大切に後世に残していくには、行政の力だけではどうにもならないことは、吉野ケ里遺跡の例などを見ても明らかである。現在まで残ってきた遺跡や自然を、いかに後世の者に伝えていくか、今後はもつと一人一人が真剣に考えていかなければいけないのかもしれない。

一〇〇年経てば自分の存在は子孫の記憶から消え、三〇〇年経つと自分の骨壺を「昔ん骨やら、邪魔やつでうつすいが。」と言いながら、子孫たちは重機で碎き、ゴミ捨て場へと捨てる。自分が生きている間の安楽だけを追求しすぎた罰を、死後に報いとして受けるかどうか、今が決断のときなのである。

最後に、この拙稿を掲載する機会を与えて下さった「庄内の昔を語る会」に対し、心より感謝申し上げる。

## 私たちの庄内川

### ◆◆改修事業のことなど◆◆

宮島 坂元 庸

はじめに

私たちの祖先は、大古の昔から灌漑の便を求めて、河川周辺の平地を開発して農耕地を造りだし、集落を形成し、そこに住みついてきました。

私たち庄内の先人たちも、このように庄内川周辺の平地を求めてやってきて、ここに居を構え「庄内」ができたものと思われます。

その昔より庄内川を挟む両面の田圃は、郷内一の肥沃な地といわれてきました。その広さは、乙房の大淀川合流点から関之尾の瀑布まで延長八、七キロ、巾にしておおよそ一キロあり、面積にして約五百ヘクタールあります。このほぼ中央を私たちの母なる「庄内川」が西から東へと貫流しております。

この庄内川のことについては、この「庄内」誌にこれまでにいろいろの方が、それぞれに記述されていますが、私も元県土





庄内俯瞰全図 〈参照〉

1969年10月13日撮影

木技術職員として暫時ではありましたが、庄内川改修事業に携わった一人として、乏しい資料と古い記録を辿りながら、これらのことについて述べてみたいと思います。

#### 一 庄内川の概況

庄内川は乙房の大淀川合流点を起点として、西岳の荒襲の源流点まで二三、四キロほどあります。

庄内川は、以前は、関之尾の滝上流の溝ノ口川との合流点までを安永川といい、それより上流を千足川といっていました。戦後になって間もなく安永川は庄内川と改称され、千足川は昭和四十年の河川法改正の時に庄内川に一括編入されました。

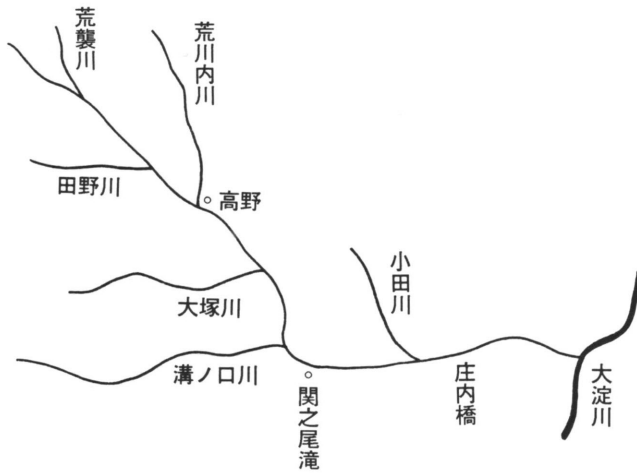
庄内川本流には、上流より荒襲川・田野川、荒川内川・大塚川・溝ノ口川・小田川などの支川が流入しています。そのほかに、滝より下流には二十二ヶ所の排水路が流れ込んでおり、それぞれに鉄製の門扉で構築されています。

庄内川（安永川）が最初に河川法の適用を受けたのは、大正八年九月十八日となっていますが、この時は合流点より上流七キロ、上川崎橋あたりまでのようです。これによりこの区間は県知事が管理に当たることになったわけです。

現在は、大淀川合流点から上流一、二キロ（吉都線鉄橋）ま

では建設省の管理、それより上流二〇、二キロを宮崎県が管理しております。その上流の源流点までの二キロは河川法の適用を受けない普通河川となっています。

なお、昭和四十年三月二十四日の河川法改正によって、大淀川水系の河川はすべてが一級河川の指定を受けて、それまでの準用河川の取り扱いが廃止となりました。



庄内川の支川

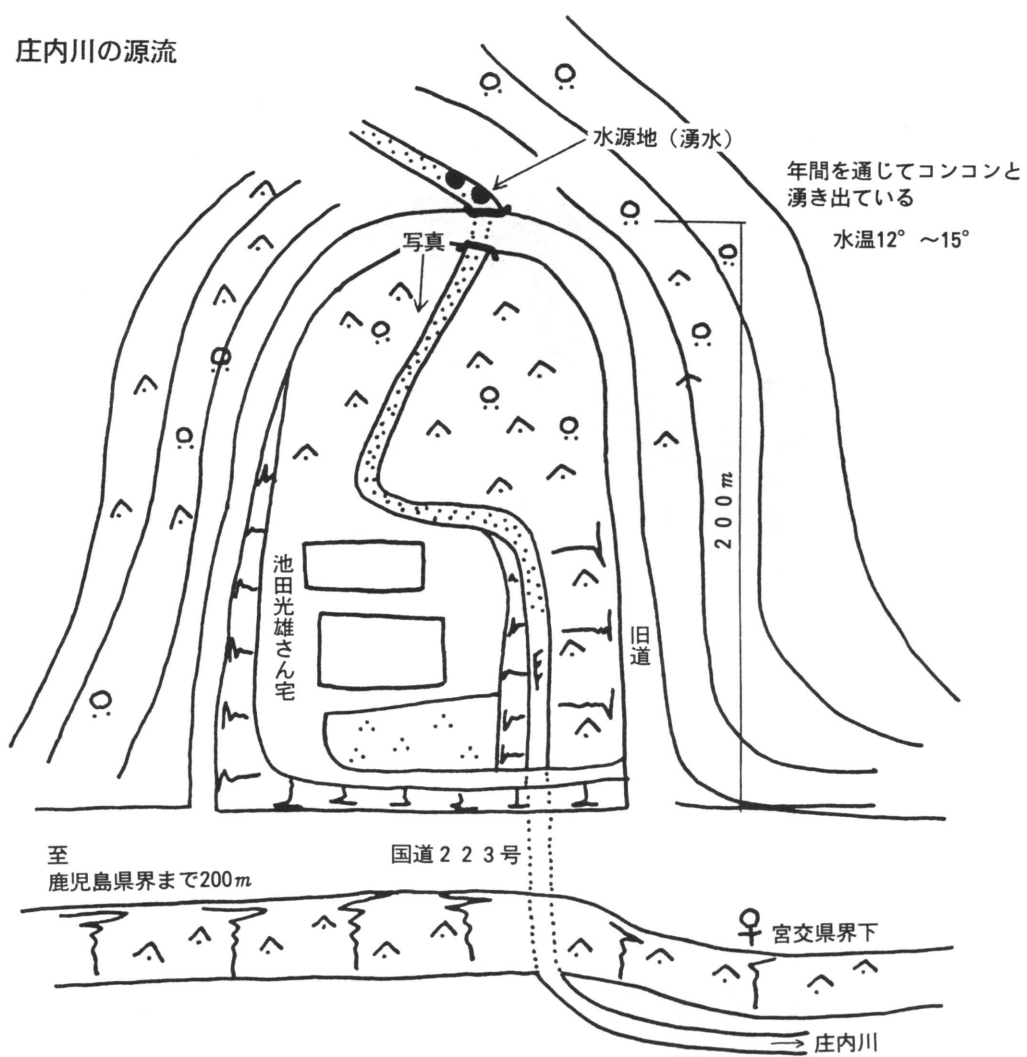
## 二 庄内川の源流

霧島山系を源流とするほとんどの河川が、霧島国有林の奥深い地点をその源としていますが、庄内川の源流は驚くほど近くにあります。

都城から霧島に向って走る県道都城霧島公園線は、西岳の荒襲で国道二二三号となりますが、そのまましばらく神宮に向って進むと鹿児島県との県界になります。その手前二百メートルの右側に荒襲地区で一ばんはずれの家である池田光雄さん宅がみえます。この宅地の入口から旧道に沿って約二百メートル位行くと、小さな溪流が道路の脇下を流れており、その上流にコンコンと湧き水が吹き出しています。ここが庄内川の源流となっています。

このように、人里に近いところで豊かな水量を湧出している水源地は、他にあまりみあたらないところです。この水は年間を通じ枯渇することなく、水温は常に十二度から十五度を保ち、今でも荒襲地区の大切な飲料水として、各戸に給水されています。

庄内川の源流

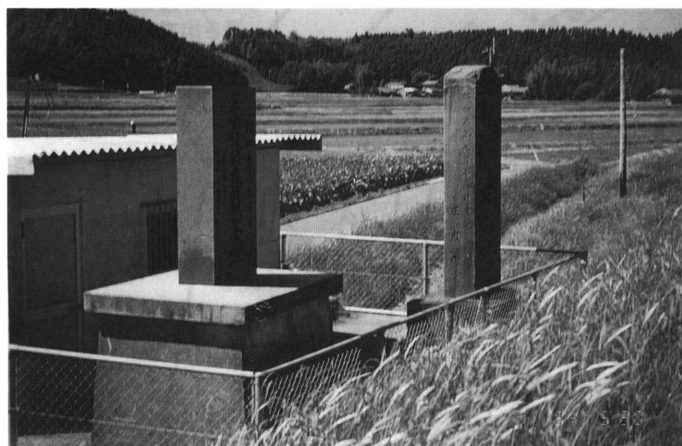


### 三 庄内川の改修事業について

#### (一) 初期の改修事業

昔から人々は、田圃を水害から守るために、いろいろな方策を講じてきましたが、財政的な事情もあって、本格的にこの対策に取り組むようになったのは戦後に入ってからであります。それまではどの河川も今のような堤防はなく、いわゆる自然河岸の状態で、災害を受けた箇所のための補修工事をするのが精一

平田井堰右岸による河川改修記念碑



右側が河川改修記念碑  
手前が堰堤改修記念碑

ぱいだったようです。

庄内川も昔より、洪水の度毎に大きな被害を受けて、その復旧に難儀したようであり、往時の苦難の状況を物語る記録が平田井堰管理室の前にある「河川改修記念碑」の碑文にみることが出来ます。

この「河川改修記念碑」は旧平田堰の左岸堤防上に建っていたものを、改修工事にあたり支障になったので、現在地に移設したものです。

#### 「河川改修記念碑」

庄内町南部美田一望数百頃安永川之カ中央ヲ貫流ス河身字岡元長岡ニ至リ幾湾曲シ此間延長一千二百五十余間ニ及フ此ヲ以テ霖雨至レハ河水奔湍ヲナシテ漲溢シ為ニ堤防決潰シ農民苦心経営ノ稲田一朝ニシテ砂礫ノ荒原ト化シ惨害測ル可ラス之カ改修ハ実ニ多年ノ懸案ナリシカ未タ其ノ解決ヲ見ルニ至ラサリシ所以ノモノ蓋シ南岸部落民河身変更スレハ其所有田地河北ニ移リ往来ノ便ヲ失フヲ恐レ肯ンセサリシニヨル明治四十五年有志池田募清水清次ノ両君連年ノ禍害坐視ス可ラス〇ル遺利放置ス可ラントシ卒先意見ヲ具シテ蒲生村長ニ建策ス村長直ニ準備ヲ整ヘ部署ヲ定メ列記有志ヲ委員ニ擧ケ庄内耕地整理組合ヲ組織

シ宮田孝之助君ヲ組合長ニ推シ事務着々進行中蒲生村長家事ノ都合ニ依リ辞任シ坂元英俊君後ヲ承ケテ村長ニ就任スルヤ進シテ南岸部落民ト折衝熱心勸説シテ之カ諒解ヲ得伊地知新七君工事ヲ請負ヒ大正三年三月起工シ同四年七月竣工ヲ告ク此間坂元村長専ラ各方面ニ幹旋應酬シ組合長宮田君工事監督ヲ兼ネ夙夜

勵精エヲ督シ委員諸君亦君ヲ扶ケテ連日努勉ス此經費參萬五阡餘圓河身ハ直線五百間ニ短縮セラレ此間新ニ橋梁ヲ架シテ交通ニ便ス而シテ舊河敷七百五十間ノ剩餘地ハ秩整シテ田地十三町二反九畝四歩ヲ得町恒久ノ基本財産トナル此工成リテ川流ハ一路直進シ復タ堤防ノ破壊田地ノ流失ヲ見ス積年ノ憂患根絶シ剩ヘ交通ノ利便ハ旧時ニ倍シ町ヘ遺利ヲ収メテ多大ノ歳入ヲ加フ町民ノ幸慶夫レ幾何ノヤ

古聖云フアリ民ヲ治ムルハ水ヲ治ムルニ在ル至言ナル哉抑モ人文ヲ開キ産業ヲ興スハ人カラ以テ自然ヲ制シ以テ民ヲ安ンシ天利ヲ享ケ永ヘニ福祉ヲ後昆ニ胎ス偏ニ先見達識ノ士此ニ着眼首唱シ町民有志此ニ○應翼賛シ當事者克タ和衷戮力多大ノ犠牲ト勞苦ヲ吝マサリシニヨル寔ニ地方啓発ノタメ欣賀ニ勝ヘサル也近者庄内町長池田募君碑ヲ建テ以テ事績ヲ不朽ニ傳ヘントシ文ヲ余ニ囑ス仍チ顛末ヲ録スルコト如斯

昭和五年九月十八日

三州日々新聞社長

川越 実 撰

有徳学院長

藤井 氏 衛書

(注……○は欠落)

県の資料によると、昭和十四年相川知事より長谷川知事への引継書の中に、今後改修の必要な河川として県内十二河川のうちに安永川（庄内川）の名が出ていますが、その後の改修工事のことなどについては、はっきりした資料がみつかりません。しかし現河川の改修前の形状などを考え合わせると、この間、一次的な改修はあったものと思われます。

## (二) 戦後の改修工事

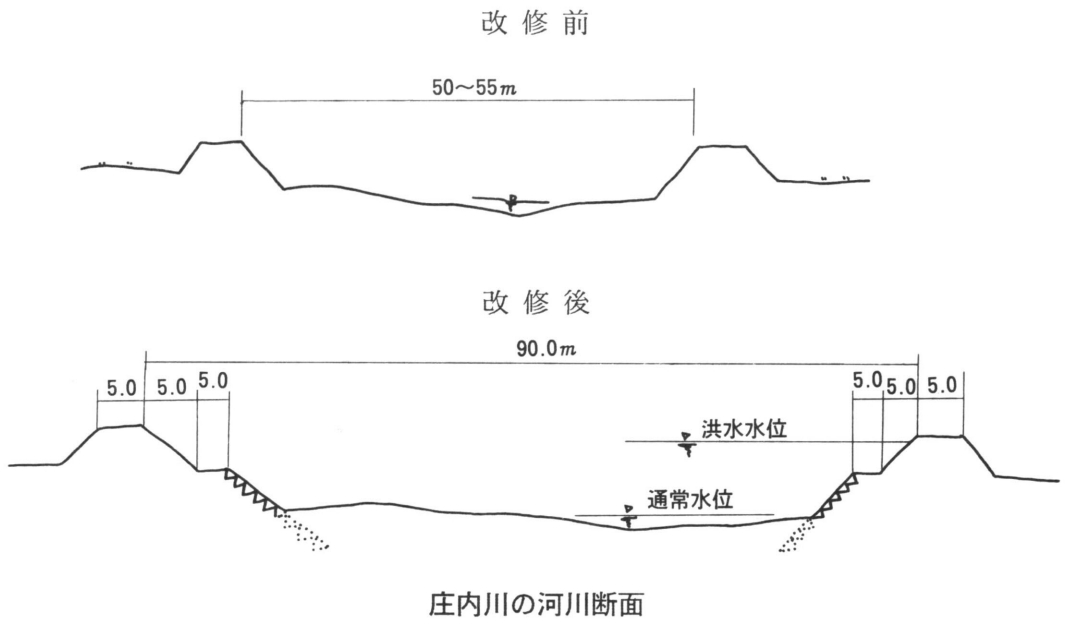
終戦の昭和二十年以降、この地方には毎年のように次から次へと台風が襲来しました。なかでも二十年九月の枕崎台風、二十四年六月のデラ台風、二十五年九月のキジャ台風などの超大型の台風が宮崎県を直撃して、各地に未曾有の被害をもたらしました。特に河川は洪水のため氾濫し、各所に堤防欠壊など大きな災害をひき起し、水稲など農作物に大打撃を与えました。こうした状況のなかで、庄内川の被害は他の河川に比べても相当地に激しいことから、庄内町としても早急の復旧を再々にわたっ

て県当局に陳情したところ、県としても小手先の災害復旧工事では効果がうすいという判断から、抜本的な改修を図る必要があるとして、昭和二十四年県河川課長などが現地調査にあたった結果、庄内川を中小河川改良事業として取り組む事になりました。当時県下で、改修事業が行なわれている河川は、大淀川・一ツ瀬川といった県下でも有数の河川だけでしたが、庄内町あげての要望と、県当局の熱意ある国への働きかけや、特に瀬戸山代議士の尽力などが実を結び、他の河川に先がけて国の認可を得ることができたことは、庄内町民にとってこの上ない喜びでありました。

そして、昭和二十五年より「中小河川庄内川改良工事」として、本格的な工事が着工されることになりました。

中小河川の改修巾は、毎秒一〇〇〇トン以上の水を流下させる河積が必要とされることから、川巾九〇メートルと決定されましたが、これは元の川巾の一・五〜二・〇倍の中となります。用地の買収にあたっては、当時の東町長が陣頭に立ち、町当局が一丸となって地権者の説得にあたり、円滑に同意が得られました。

工事はまず、吉都線鉄橋の上流部の宮島川原より着手することになりましたが、この区間は川の屈曲がいちじるしく、毎年





の被害が最もひどい地域だったからです。

着工当初は地元請負業者によって工事が始められましたが、工事規模、内容等から勘案して、県直営で実施した方が得策であるとの都城土木出張所の判断から、昭和二十七年から五年間を直営工事として引土橋附近まで施工されました。

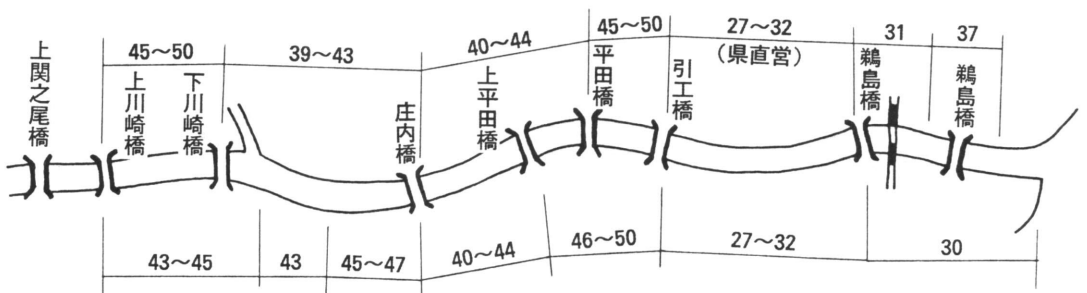
鉄道橋より下流は、昭和三十年より建設省の直轄として工事が進められることになりました。

その後は国の財政的な裏づけも確立され、治水事業五箇年計画等の制度に基づき残りの区間も引き続き順調に改修工事が進められ、昭和六十一年をもって「中小河川庄内川改良工事」は完了しました。

河川改修完了



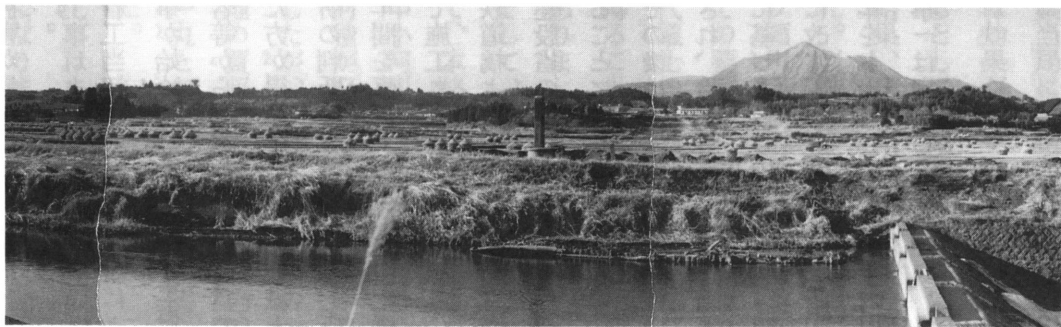
平田橋附近を上流より望む



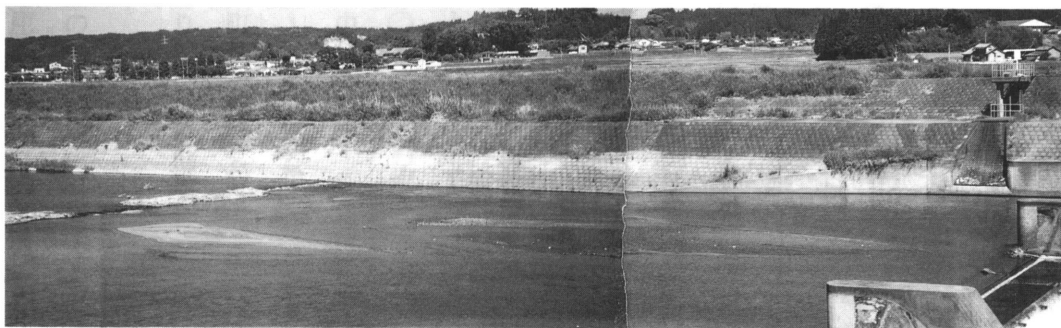
改修築堤施工年次 (昭和)

改 修 前

平田井堰上流左岸側



改 修 後



### (三) 平田井堰のこと

昭和九年に築かれた旧平田井堰は、庄内川の改修工事にともしない取りこわされることになり、固定堰から新しく可動堰として構築されました。

旧井堰からの取水方法は、六ヶ所の水通し部を角材で締め切り水を溜め、堤の両側から取水するようになっていました。このコンクリート固定堰は、河川増水の場合に大きな障害物となつて氾濫・破堤などの原因ともなり、治水管理上きわめて危険な工作物でした。

新設された可動堰は、鋼製の転倒ゲートで、この型式の取水施設としては都城地方最大の農業用水取水堰となっています。

この可動堰は、通常においては機械によって倒したり起したりすることができ又、台風大雨などの増水時に水位ゲートより三〇センチ以上になると自動的に前面に倒れる装置も兼ね備えており、洪水調節のはたらきをするので、治水上きわめて効果的な施設となっております。又、河床が下がるのを防ぐ床止工の役目も果しております。

新しく造られた可動堰の概要は

堰 長 六三・〇メートル(可動部 三連)  
型 式 半固定・転倒ゲート

# 取水樋門

(ボックス)

ゲート高 一・七メートル

左岸 一メートル×一メートル×二八メートル

右岸 一・五メートル×一・五メートル×二八メートル

## 管理室

一ヶ所

## 事業費

三億五千万円

## 施工年度

昭和四八年〜五一年度

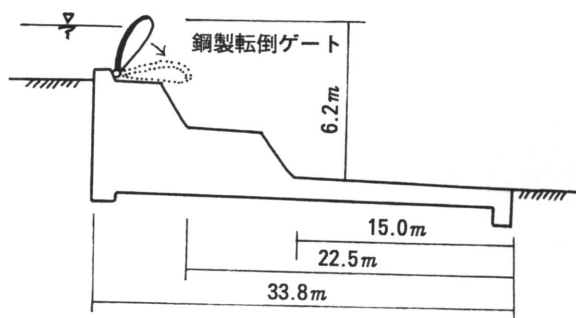
## かんがい面積

左岸地区 約三五ヘクタール

右岸地区 約五〇ヘクタール

水を取る時はゲートを起立させ、水を溜める。

洪水の時は水位が上がるとゲートが自動的に前に倒れる。



平田可動堰

## 「平田堤堰改修記念碑」 碑文

庄内川は平田附近にて大きく湾曲し年々災害による地区農民の受ける損害は甚大なるのがあったが、大正三年三月に河川の流れを現状に変更し、上ノ井堰下ノ井堰を構築せり、その後昭和八年三月町直営による井堰の大改築が計画されその結果、昭和九年五月旧平田堤が完成し農業用水の確保をなせり、而るに轟ダム撤去による河床の沈下と老朽化による災害の続出は、下流下江今屋宮島地区の農業用水確保に支障を来す状況となれりこのため堰堤の改修の必要に迫られ関係当局に接渉せるも進展せず隅々治水対策事業による庄内川河川改修事業を機とし、国県に陳情し漸く昭和四十七年十月関係当局の現地調査の結果、昭和四十八年三月より着工の運びとなり昭和五十二年三月四ヶ年の歳月と四億貳千万円の巨費を投じ近代的な鋼鉄製自動ゲート式堰堤の完成をみたり、これにより下流両岸貳百余町歩の農業用水の水源確保が決定的となり農業経営上裨益する処甚大なり

総事業費 四億貳千六百七拾万五千元

工期 昭和四十八年三月 着工

昭和五十二年三月 完成

設計監督

都城土木事務所

施工業者 丸宮建設株式会社

平島建設株式会社

本事業の完成を記念し碑を建て後世に伝える

庄内土地改良区

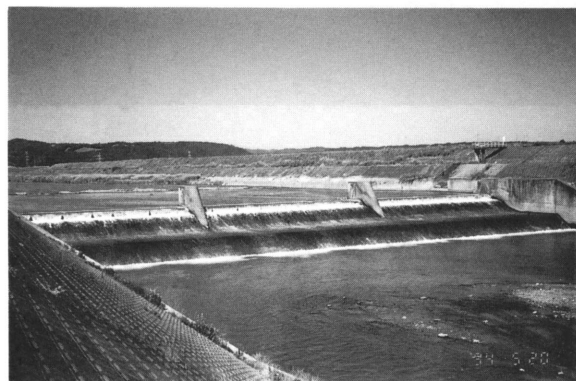
#### (四) 庄内川に架かる橋

関之尾の滝より下流の庄内川には、九つの橋が架かっています。昭和三十四年に庄内橋が鉄筋コンクリートの永久橋に架け換えられる前までは、すべての橋が木橋でした。

旧固定堰



現可動堰



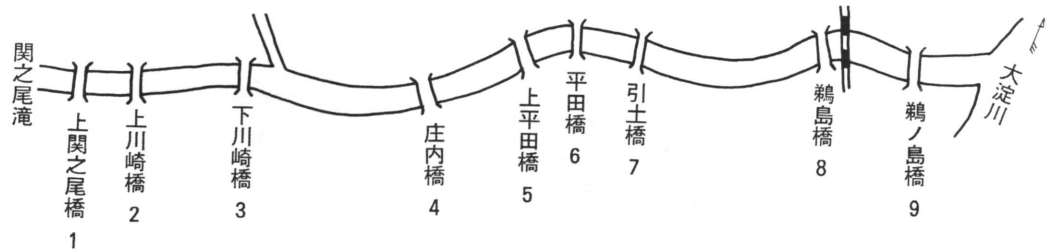
ゲートを倒しているところ



ゲートを起立させているところ

宮崎県は有数の木材産出の県で木材の豊富なことから、木橋が数多くありました。昭和三十年以降の経済の成長にともない、交通量の増加・車輛の大型化などで木橋の維持が困難になってきたので、次々にコンクリートの橋に架け換えられていきました。今では、ほとんどの橋がコンクリートの橋になり木橋を見かけなくなりましたが、私達が子供の頃、川が泳ぎ場であった時代には、木橋は格好の飛び込み台でもありました。なかでも下川崎橋は、西区側が水衝部となって深みができ、よどみとなっていて夏になると泳ぎ場として大変賑わったものでした。

庄内川の橋の位置



庄内川に架かる橋梁一覧表

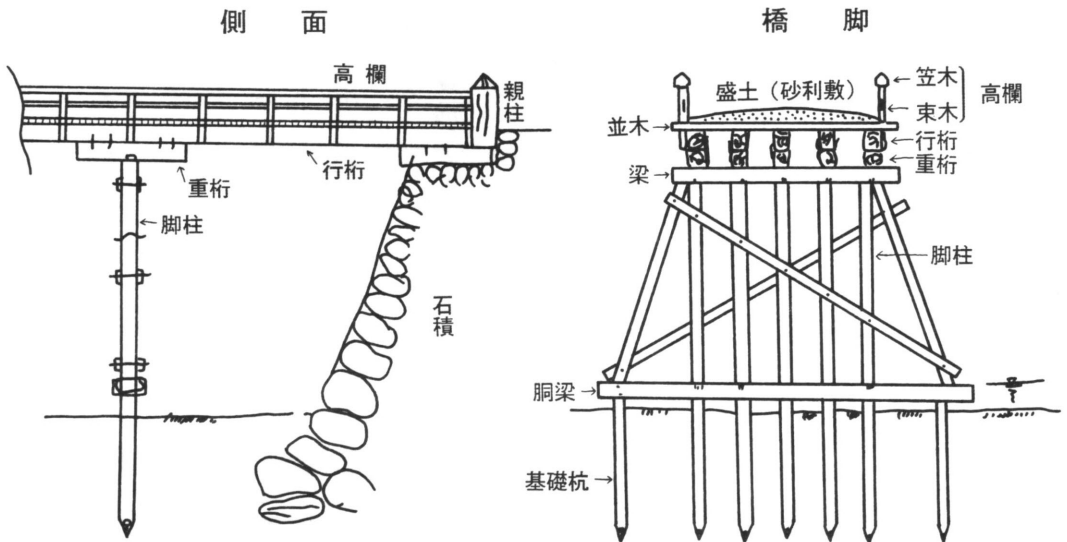
9	8	7	6	5	4	3	2	1	橋名	
									路線名	
鶴ノ島橋	側道橋	鶴島橋	引土橋	平田橋	上平田橋	側道橋	庄内橋	下川崎橋	上川崎橋	上関之尾橋
乙房・谷頭線	〃	御池・都城線	菓子野・下平田橋線	今屋・今房線	庄内・上平田線	〃	都城・霧島公園線	神田・川崎通線	上川崎橋線	上関之尾線
一〇〇・一五	八八・一九	八八・一五	八八・〇〇	九一・九二	八九・七七	九一・九〇	八六・四〇	一一八・五〇	六三・〇〇	五一・九七
五・〇〇	二・五〇	六・〇〇	五・五〇	五・〇〇	三・一三	二・五〇	六・〇〇	四・〇〇	四・〇〇	四・〇二
昭和四十五年度	平成三年度	昭和四十年	昭和四十七年度	昭和四十六年度	昭和四十三年	平成元年度	昭和三十四年度	昭和四十八年度	昭和三十九年度	昭和四十五年度
		鶴島バイパス完成					庄内側一スパン昭和四十年継足			

市道に残る唯一の木橋 五反田橋（梅北）



現在、老朽化のため通行不能になっている。

木橋の構造



おわりに

このように、庄内川の治水対策事業は、幾多の変遷を経て一応の完了をみる事ができました。先人達がこの地に住まいを求めて以来、人と水との闘いの歴史に終止符が打たれたこととなります。人は自然の力を決してあなどるわけにはいきません。いつもは穏やかに流れる清流も、一たび増水し始めると濁水逆巻く激流となり、何もかも呑み込むような姿を呈します。ネズミの穴が堤防の決壊の大きな原因になりうる事もあるのです。二度と過去のような水害が起きることのないように、日頃からみんなで見守りながら大事に守っていききたいものです。



# 庄内史跡探訪（その六）

東区 坂元 徳郎

## はじめに

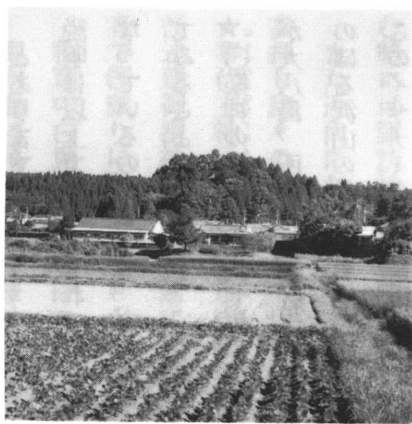
私の拙稿「庄内の史跡探訪」も創刊号以来第五号まで四十八カ所を数えました。探訪を重ねる程に庄内の歴史の古さを実感している次第ですが、何分にも行き当たりばったりの素人調査で全く底の浅い結果に終わっていますことは誠に遺憾の極みです。しかしまあこれが庄内の皆さんのより深い探求のきっかけにでもなれば幸いですので今後とも恥をかきながら続けて行きたいと思います。

前号の四十八は庄内南洲神社の由来に触れましたので引き続き神社の由来を探ってみることに致します。

頭の番号は創刊号からの通し番号です。

## 四十九 諏訪神社

○概要 庄内の人なら一度はお参りしているはずの庄内総鎮守さま、東区諏訪原にあります。諏訪原と言えばその昔内之浦



山 諏 訪

社は長野県の諏訪にありその末社は全国に一万社を数えると言いますが庄内諏訪神社もその中の一つです。

まず境内の案内板を見てみますと

### 諏訪神社御祭神

建御名方神

大国主命の御子、出雲朝廷最後の実力者で五穀豊饒を祈る神

事代主神

商売繁盛福の神 七福神の中の恵比須様とも言われる

天忍穗耳命

天照大神の世子であり天孫降臨の瓊々杵尊の父君

建御雷之神

伊弉諾尊の御子で勇猛な神である。平和外交の神

辺りに漂着した唐人たちを収容して住まわせた土地でもあり近くは明治初年三島通庸の移民政策の中で近郷から士族達が移住した区域としても知られています。さて諏訪神社の本

商売繁盛 厄除 開運 金運 福の神 家内の繁栄 勝運  
心願成就 安産 交通安全 縁結び

創立年 文和四年（一三五五）南北朝時代將軍足利尊氏の頃

第九十七代後村上天皇の文和元年（一三五二）十二月十二日

初代都城領主北郷資忠戦功により北郷三百町を賜り山田町古江に治所を構えた。

これより先、薩州より発する日、島津氏累代尊崇する鹿児島諏訪の社に参詣し、その時一つの鎌飛来し公の着物の袖に入った。公は大いに喜び神意を拝しその鎌を奉持し、文和四年（一三五五）諏訪の聖地に一字を建て、件の鎌を神殿に納め家臣石川氏を祠官として諏訪大明神を勧請、七月二十八日を祭日と定め鎮祭した。



92段の石段

以来各代の領主尊崇深く応安五年（一三七二）六月一日、社を再興の樟板二枚に上諏訪大明神、下諏訪大明神と記されていた。天文年間には八代領主忠相神馬を奉獻、天正十一年（一五八三）七月二十四日、享保三年（一七一八）十二月二十日社を再興、明治二十年十一月二十日神殿改築に当たり島津家久金五円の寄進あり、代々の領主今日に至るも社奉幣変わりなく崇敬されて来た。明治三十五年十二月村社鹿島神社を合祠し大正十三年二月旧社殿朽敗により改築の議を起こし、霧島山官有林樺材の払い下げを受け、なお社殿を現在の山の上に移し大正十四年十一月竣工遷座祭を行う。

神社創立六百三十四年記念

平成元年一月吉日

とあります。

説明は以上ですが、それでは一体この四柱の祭神の系譜はどうなっているのでしょうか。文献に基づきもう少し詳しく神代を辿ってみることに致します。

○祭神の系譜 神代七代の末つ神イザナギ、イザナミの大神が大八島、所謂日本の国土をお生みになり、そして三十五柱にのぼる沢山の神様をお生みになったことは神話で有名ですが、このイザナミの命が最後に火の神を生まれた為亡くなります。

夫イザナギノミコトは先立たれた妻イザナミノミコトを訪ねて夜見（あの世）の国に行かれます。そしてようやく再会を果たしますが腐れとろけてウジのたかった我が妻イザナミノミコトの姿を見て肝を潰して中つ国（この世）に逃げ帰ります。そして「筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐ヶ原」（宮崎の一つ葉海岸に比定）で穢れた身体を洗い清められた時にお生まれになったのが天照大神、月読命、須佐之男命です。

★天忍穗耳命 この天照大神の子供に天忍穗耳命（アメノオシホミニノミコト）がありこの神様が諏訪神社祭り神の一人です。

穂は稲穂、耳は稲魂をさすとありますから五穀豊饒の神様です。案内板にもありますように高千穂の峰に降臨された瓊々杵命の父君に当たります。

★建御雷神 この神様はイザナギノミコトが母を死に至らしめた我が子火の神の首をお切りになった時、刀についた血からお生まれになった八神のうちの一人で天照大神の兄弟筋に当たります。大変勇猛な神様で天孫族が出雲朝廷に国譲りを迫った時、その折衝に当たり成功に導いた神様です。

そのようなことで平和外交の神様と言われている所以でしょう。またいつも戦いの先頭に立って武勲を立てられたので武勇の神様としても崇められ戦国時代の昔から武将たちが戦いに臨

む時には諏訪神社に戦勝を祈願したと言われます。

また近代になってからも軍隊に行くときには必ず諏訪神社に参拝し諸々の祈願をして出掛けたものでした。

★事代主神 この神様は出雲朝廷最後の実力者と言われており前述建御雷神が出雲朝廷に国譲りを迫られた時の出雲方の責任者で国譲りに柔順に応じられた神様です。

稲葉の白兔の説話を持つ大国主命の御子に当たります。

案内板には「この神様は恵比寿さまとも言われている」とありますが私の調べの範囲内では事代主神と恵比須さまとは同一神としてつながりません。

しかし一応恵比須さまについて調べてみますと、この神様は七福神の中で鯛の魚を吊り上げているあの神様です。

元々は漁村等で人々が海の幸を呼び込もうと祈願した対象の神様でしたがそれが市場を通じて商人や船主の信仰の対象ともなり、また都市の町人や職人に普及し、そして農村にまで及んだようだという説があります。招福の神として神社にも祭られ、商売繁盛を願う人達の信仰の対象になっています。

★建御名方神 この神様も大国主命の御子で、前述事代主命の弟に当たりますが国譲りの際最後まで抵抗した神で、建御雷神に力比べを挑み腕を引き抜かれ信濃国の諏訪湖まで追い詰めら

れて降伏、以後この  
諏訪の地から出ない  
と誓って赦され、そ  
の地に鎮座されたと  
言う説話があります。  
案内板にあるように  
この神様がどうして  
五穀豊饒の神になっ  
たのかよく解りませ  
ん。

以上四柱の祭神に

ついて古事記や日本国史辞典から見えました。

○変遷 さて、案内板にありますように都城初代領主北郷資<sup>スゲ</sup>忠が足利尊氏から北郷三百町を貰って山田の古江に館を構えますがその時庄内諏訪の聖地に一字を建立、件の鎌を納めて諏訪大明神を勧請しました。これが現在の諏訪神社の起りです。  
文和元年（一三五二）今から六百四十二年前の事です。

社の場所は現在の階段下と言われておりますが、数回に亘る島津領主家からの修補の事実、代々の領主が規例にのっとった参詣の有り様、そして領主をお迎えする安永郷民の役割り分担



本 殿

など、仰々しいばかりの様子が「庄内地理志」に記録されています。

また明治三十五年鹿島神社を合祀したとありますが、この鹿島神社については本誌第三号の「お軍神」の項で触れましたが、もと庄内小学校正門脇に在った神社で旧藩時代は建御雷神を祭神とし「軍神」と称していたようです。この「軍神」は諏訪神社の末社として各地にあり、明治三年地頭三島通庸が金石城にあった北郷相久<sup>スゲヒサ</sup>を祀る金石大明神をこれに合祀し鹿島神社と称したとあります。また軍神として崇められていた島津歳久の霊も合祀したと言う説（山田町郷土誌）もあります。建御雷神は前述の通り諏訪神社の祭神の一人で勇猛な神様で、古来軍神として崇められており、北郷相久は金石城で憤死した歴戦の武将で都城の兼喜神社の祭神でもあります。また島津歳久は豊臣秀吉の九州征伐の時最後まで抵抗した勇猛な武将でした。庄内小学校のあの場所を今でも「お軍神<sup>グンジン</sup>」と言っているのは旧藩時代からここに軍神社があったからでしょう。

その後諏訪の社は、大正十三年現在の山の上に移され霧島官山から伐り出した総ケヤキ造りの大社殿が新築されました。旧社殿は、たまたま創建された西区の南洲神社の社殿として移されました。

なお件の鎌は一体どうなったのでしょうか。そもそも御神体と  
言うものは尊厳保持の為人目にさらされることはありませんが  
野崎宮司さんの話では、終戦後、時の宮司故岩佐彦二さんの時  
代、神殿を開いた所、件の鎌は存在せず幾振りかの刀剣があっ  
たそうです。なおこの刀剣はその後盗難に遭って現在の御神体  
は御鏡だけと言うことです。

いずれにしても庄内諏訪神社は都城島津家が当地に入部して、  
最初に建てた神社ですから、代々の領主が敬い崇めた事は当然  
で祭礼等も盛大に行われ特にロッカッドには庄内ばかりでなく  
近郷近在からも多くの参拝客で賑わいました。

○現況 なお、参道入り口の鉄筋コンクリート製大鳥居は大  
正十四年十一月二十八日願主伊地知新七と刻んであります。

二番目の赤い鉄製鳥居は「平成三年三月三日還暦記念平成二



正徳4年の石灯籠

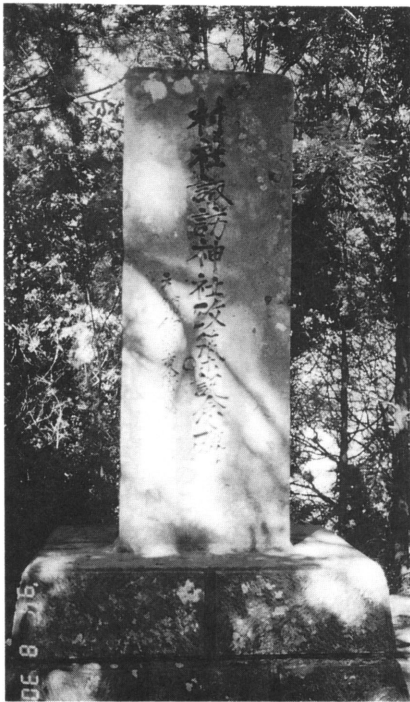
年度」とあり昭和五年生まれの庄内小学校卒業生が還暦記念に  
奉納したものです。

参道東側の社務所は昭和六十年三月十日竣工したもので老朽  
した旧屋を取り壊して新築されたものです。

石段上り口両脇に数個の石灯籠がありますがこの中に正徳四  
年（一七一四）の銘の入った古いものも有ります。

また、九十二段の急な石段を上り詰めた本殿境内には石灯籠  
や記念碑に混じって西側に「村社諏訪神社改築記念碑」の大き  
な石碑がありますがこの刻字は明治の元勲東郷平八郎元帥の筆  
に成るものです。

社殿脇の更衣所は今上天皇御即位大嘗祭奉祝記念事業として  
新築されたものです。



東郷元帥の揮毫

# 史蹟探訪（大隅方面）

西区 菓子野 美和子

平成六年三月十一日、地区公民館（九・〇〇）へ鹿屋航空資料館（一一・〇〇）へ吾平山陵・昼食（一二・三〇）へ横瀬古墳（一四・二〇）志布志工業港（一五・〇〇）へ帰着（一六・三〇）

この計画は、平成六年二月十七日開講された歴史講座（諏訪神社・山久院・豊幡神社・釣こう院についての時）、次の探訪は諏訪神社祭神（天忍穗耳尊）と関連のある吾平山陵にしたらしいということになったのである。大隅方面のことは、わが家の庭のようなものとおっしゃって往来してられる江口高見さん（昔を語る会編集委員）が、お仕事を棚上げにして、手と足となって御案内してくださった。

参加者は、男性十六名、女性十名、総勢二十六名。市役所のバスをお借りする。異口同音に、

「今日は本当によい天気ですね。」

の挨拶が交わされる。地区公民館九時出発。みんな顔見知り

の方々なので、和やかな雰囲気が出中（？）にただよっている。野海会長さんの挨拶はユーモアがあって、庄内辯。

「天気予報と、ふんどしは、はずれるが、今日の天気予報はあたって……。云々。」

今までの雨がうそのよう。皆爆笑する。ふんどしを知っている年令層なのだ。久しぶりに耳にした懐かしいふんどしの言葉。昔を語る会の醍醐味がここにある。

説明役をしてくださるのは、何時もの通りの坂元徳郎副会長さん。一心に耳を傾け、あきることを知らない。わが庄内と関連づけての講釈は絶倫だ。いつの間にか「庄内の乱」と結ばれたり、母智丘神社のきさくさんの話になったり、鹿屋市のトンカツ料理に走ったりで、予定通り鹿屋航空資料館に着いていた。鹿屋航空資料館。

資料館は平成五年七月完成され、二階堂進氏の筆になる記念碑が立っていた。入館すると先ず視聴覚室に案内され、説明をビデオで見る。太平洋戦争で国を守る為に散っていかれた勇士の方々の赤心に、唯々黙々と巡回する。『海行かば水漬く屍。』の懐かしいメロディーが流れていて、五十年前のわが姿がそこにあった。にっこり笑って死での旅の勇姿!! 遺書・遺言等々。涙!! 涙!! 名機零戦に乗って降りてくる会員の顔は複雑だ。



コーナーは、旧海軍航空の興亡の軌跡。特攻作戦開始の経緯。現在を生きる若い海鷲たちの躍動、レーダーの発展、戦後の海上自衛航空隊の歩みなど、国を守る重大さを理解してもらう為に開設されたコーナーがあった。

「僅か一時間の観覧では、ゆっくり見られないね。」

と、あちこちから聞こえてくる。室外にも航空機が十数機展示されていたが、素通りしてしまった。思想の変遷、科学の発達、

国際情勢、移り変わる

歴史に、改めて心を

通わす一時間であり、

英霊に感謝するひと

ときでもあった。平

山郁夫画伯の桜島を

背景にしたステンレ

スの画風は、母国の

空に別れを告げて飛

び立った若鷲の平和

を希求する切なる願

いを象徴したもので

はなかるうか。それ



航空資料館にて

は鎮魂のことばであり、戦争の悲惨さでもある。

#### 吾平山陵

車上の人となり、吾平山陵へ向かう。坂元副会長さんの話は、神代七代から始まる。イザナギの尊は、神主さんの祝詞から聞きなれた詞である。庄内諏訪神社の祭神は、天忍穗耳尊・建御雷神・事代主神・建御名方神であるが、吾平山陵は、神武天皇の御父君、ウガヤフキアエズノ尊と御母君玉依姫の御陵である。なにしろ案内役の江口さんが乗車なので、スムーズに車は走っていく。計画より早目に着き、心よい春の日差しを浴びながら、広場で昼食をとる。江口さんのさし入れのビールとジュースで皆ほろ酔い。

山陵は海拔六十八米、山上には幾星霜を経た大樹が聳えたち、神域は甚だ広大だ。森厳そのもののたたずまいである。伊勢の皇大神宮とにているね。”と誰かが言った。五十鈴川の清流を思い出させる。窟内は大小の御陵が二ヶ所あるらしく、向って右が尊、左が玉依姫だそうだが、神域なので遠くから拝観するにとどまった。山陵とは、帝皇の塚墓のことである。明治七年御治定という案内板を見た。わが宮崎県でも日本書記にのつとり、西都・油津・鵜戸・高千穂など様々の伝説があるが、明治初年頃、その論争に破れ、政治力などで敗退したのではない

だろうかなど、考えることだった。昭和十一年昭和天皇行幸記念碑が建立されていた。



吾平山陵

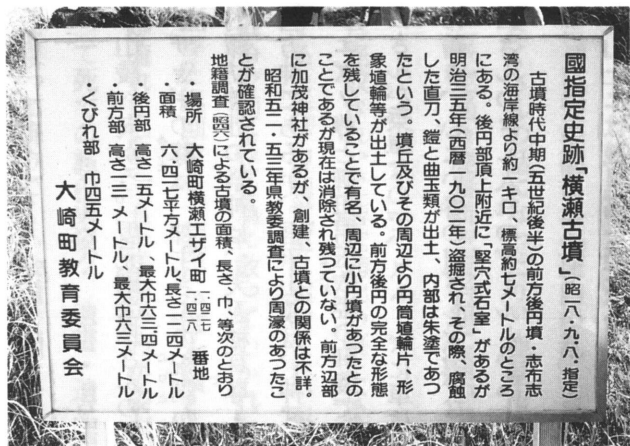
#### 横瀬古墳（曾於郡大崎町）国の指定史跡

莊嚴な吾平山陵を後にして、高山町を通り横瀬古墳へと向う。肝付城を守っていた南北朝時代の肝付兼重と、庄内のかかわりなど説明はつきない。そうかと思って古実にひたっていると、内之浦ロケット基地は、右手山の向うです。痔の専門医は高山。現実にもどったり、古代に席を置いたりで、その忙しいこと。案外何人かの方がお世話になったらしい。二階堂進、現代議士の出身も高山、あれやこれやと話題はつきない。右に左に古墳群らしきものを見ながら十四時頃到着した。

写真のように案内板に記されている。みな「堅穴式石室」を見ようと、高さ十五米の古墳を一步一步のぼって行く。後円部の頂上にのぼり横瀬古墳の全ぼうを眺める事が出来た。資料にこう書かれている。

この辺りは古代日向の国時代の救仁郷くにごうの一部で、古墳群や遺跡が数多く存在し、古代における文化の中心地であったことが伺える。今から千五百年前、鉄器が使用されだし、農耕が進んだ時代に豪族が出現し、力を誇示した。力のある者程大きな墓を築造した。これが

古墳と言われる。と、堅穴式石室の入口と見られる場をみたが、昔の面影を見ることは出来なかった。然し、大和朝廷時代の豪族の権力の威大さを察する事が出来た。



横瀬古墳の案内板

志布志工業港（曾於郡志布志町） 国指定重要港湾

目覚しい発展を遂げている志布志港を車上にて巡回する。東京行きのカーフェリーが埠頭に横づけされていた。農畜産関係物資の流通拠点らしく、飼料会社や、農協関係等の建物が砂丘を埋めて造成されている。

戦時中、志布志湾の砂丘にアメリカ軍が上陸するという噂が流された。竹槍訓練に精出した昔を思い出し、心の静まりを待つのにひとときかかった。今のこの繁栄を誰が想像しただろう。坂元副会長さんは、こう語る。都城は海との関係を四百年前から模索した。北郷時久時代、伊東・肝付と島津との戦いも、志布志争奪の為の攻防でもあったという。現在も共通意識で都城岩橋市長さんの政治政策の重要課題となっている。

庄内諏訪神社前には唐人町があった。それについてどんな生活をしてたのか記録はないが、都城に唐人が住んでいたのは、志布志が明国との貿易港であったし、交流があったからだと言明があった。

野海会長さんも、都城北郷家と伊集院幸侃との関係、都城と、け答院（宮之城）との関係を語られ、また、往時唐人町が今の宮丸町、仲町にあったこと、都城、福山港を米・硫黄の貿易港としていたこと。内之浦が都城北郷家の飛地であったことにも

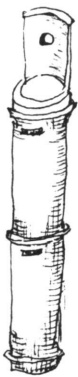
ふれられた。“しょねうつり”の話では、薩摩全体の中での都城の位置づけにも目を向けさせられた。

## 結び

この度の史跡探訪は、半世紀にもどったり、四世紀・紀元前までひきもどされたりで、昔を語る会の本領を遺憾なく発揮できた研修であったと思う。

定刻きつちりと庄内地区公民館に帰着出来たのは、綿密な計画を立てられた役員の方々の御苦労があったからで、感謝申しあげたい。安い海幸をたくさん仕入れて、にこにこ顔で下車していく。

地理に明るい江口さん。お仕事を休んでまでの御盡力。本当に有り難うございました。安い海幸で車がいっぱい。きっと夜のビールのつまみは、新鮮な海の幸と楽しかった話題で、食卓をにぎわしたに違いない。



# 殖産に貢献した先達たち

## (三島通り)

町区 山 元 昭 平

庄内の町は明治初年、当時の地頭三島通庸公の偉大な業績により新興の基盤が確立し、これを基としたその後の発展も他の追随を許さない隆々たるものでありました。改めて公の遺業に感謝し、また公に従ってこの大事業に取り組んだ我々庄内の先人達の労苦に対しても深甚の表敬を忘れないものであります。

今回は故南崎吉三氏の遺稿を参考にしながら今もなつかしさが残っている三島通りについての三島氏と表裏一体となって町造りに専念された偉大な先達の方々に焦点を当ててみたいと思います。

三島公の町造りの成功は、思い切った移民政策の遂行と迅速な土木事業の実施にあったと思われますが、確かに士分三百二十家族を一挙に入植させることは大変なことだったと推測されます。

町造りは、この大量の移民に生活物資を円滑に供給するため

最初に商人を呼び入れて商店街を造ることから始まりました。まず商店街となる道路の整備と住宅地の造成を行いました。そして商人の方々に呼びかけ都城や鹿児島方面から約六十家族の人達が移住して来ました。これらの人々には家・屋敷・店舗それに畑を給せられ生活の基盤を確立させ大量移住に備えたと言います。

これが即ち庄内の商店街としての初めての街造りでした。公が去られて後、その業績と偉業を偲んで通りの方々が相談しあつてこの通りを「三島通り」と呼ぶ様になったと聞いています。

三島通りに軒を並べた商店は染物・大工・指物大工・車大工・茶・木賃宿・鍛冶・蹄鉄・豆腐・下駄・米・たばこ・呉服・肥料・こうじ・博労・等々の生活必需品の店でした。

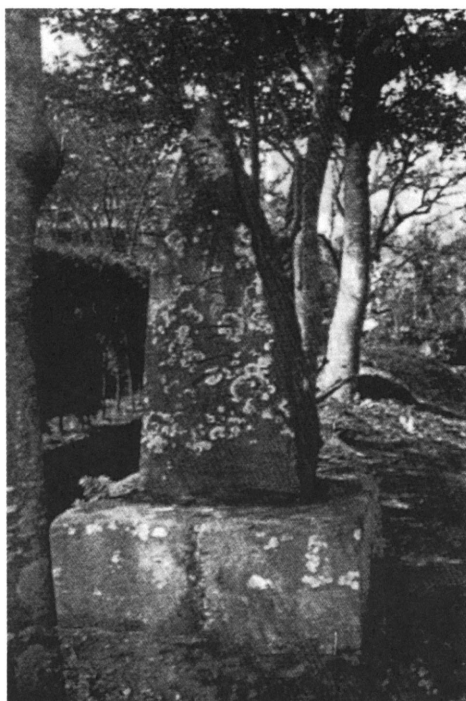
誰が何処に何の店をと言う細かな資料が殆ど無く今我々の手で当時を探るより方法はありませんが、この地方の中心街となつた三島通りには庄内は勿論西岳・山田・志和池・横市方面、遠くは財部・末吉方面からも千客万来の毎日であったと言えます。この様な中で私達の祖先三島通りの商人もそれぞれナエザシを担いで鶏鳴に起き夕べに星を戴くまで行商に励み農村集落とも信頼関係を確立して商いの輪を広げていきました。

三島公は在任わずか二年でしたが、この間私達の先人達は公

の指導の中で殖産に対する認識を深め、あらゆる職業の繁栄の基礎を築いていきました。

乏しい資料の中から、これら殖産に貢献された先人たちのごく一部を列記し、その労苦を偲びたいと思います。

## 一、高橋家



初代・吉五郎氏はいち早く鹿児島から移住、三島通りの初代

世話人として三島公の信任厚く新郷立の顧問役となり、三島通りの建設は勿論、公の道路開削等開発事業の先頭に立ち衆望を集め、また殖産事業にも持ち前の進取の気性を発揮され多大の貢献をされました。なお、西南戦争にも従軍され、また願心寺開基に尽力されました。没後、町民は氏の徳を慕い報恩彰徳の



山田芳郎氏近影

石碑を八坂神社の境内に建立し、その功績を讃えました。

なお氏の孫にあたる山田芳郎氏は戦後都城市の復興に尽力され、ナショナル電器㈱を設立、初代社長に就任、そ

の他市の商工関係の役職を歴任活躍しております。

## 二、持永家

初代・善吉、太平次兄弟、両氏は都城より移住、米穀・肥料・製油・木材等を扱い業界の振興に貢献されました。また東京に庄内米を紹介され郷土発展の基礎を打ち立てられました。

二代・善市氏は村会議員、郡会議員、



持永善市氏

県会議員等公事に労する外、都城電灯㈱の監査役、都城貯金㈱取締役、北諸県郡倉庫㈱社長等事業界で手腕を発揮されました。

持永義夫氏



三代・義夫氏は愛媛、兵庫、三重県知事、北海道長官を歴任、後、国会議員に選出され官界政界で活躍されました。

四代・和見氏は現役の国会議員とし

て活躍中です。

### 三、熊原家

初代・曾兵衛氏は、「三島通り」の開発には常に中心的活動家でした。

二代・理平氏は植林に力を注がれ、田畑を合わせて広大な山林の造成に成功され多額納税者として町の発展に寄与されました。

### 四、東家（宮竹家）

初代・乙吉、二代・常次郎両氏に亘り手広く日用雜貨商を経営され人々の生活安定に寄与されると共に、常に三島通りの発展と繁栄のために中心的役割を果たされました。



宮竹常吉氏

三代・宮竹常吉氏は家業の傍ら庄内消防団長、丸宮建設(株)初代社長、県議会議員、庄内商工会会長、全国中央商工副会長の重職を歴任、商工業の発展と、地方自治の振興にその敏腕を振わ

れました。

四代・繁美氏は父君の跡を継ぎ丸宮建設(株)社長、庄内交通安全協会会長として活躍中です。

### 五、大浦家

初代・六兵衛、三島通りの建設に精力的に取り組み、その発展に寄与されました。

二代・作太郎氏は行商など行いながら、三島通りの民生の安定に貢献されました。

三代・福一氏は都城に進出、大丸デパートを創設、初代社長、そして都城商工会議所会頭として地域振興に奮励されました。

### 六、大浦家

初代・利吉氏は都城から移住。荒物雜貨商精米業を営みながら地域の世話役として奔走されました。

二代・清蔵氏は父君の後を受け家業に専念され現代の基盤を確立されました。

三代・秀光氏はスーパー大浦七店舗の経営者として寧日なき活動をされています。

### 七、南崎家

初代・常右衛門氏は三島公の要請にいち早く応え、三島公の信頼特に厚く、よき相談役として町造りに協力されました。給された畑には早速茶を栽培、これが後の製茶業創設に繋がりに都城茶の祖とも崇められています。

また農具の販売、綿糸の販売や染め物業を営み、傍ら神戸、





南崎常右衛門

長崎等と往来し郷土

物産の紹介や販売に

も力を注がれました。

なお、後年前田正

名の用水路事業では

正名の右腕として積

極的に活躍され、あ

の難工事を完成に導きました。

二代・常太郎氏は家業の製糸・製茶の傍ら植林に努力され南崎家を始め地域の経済的基盤を確立されました。

三代・福一氏は家業の製茶を不動のものとし、宮崎県茶業組合長、全国茶業中央会議員を歴任、また長年に亘り庄内商工会長を務められました。

四代・吉二氏は家業に専念の傍ら庄内町助役、農地委員、町会議員も歴任、後年は地区の敬老会長を長年勤められました。

また夫人喜美氏は、民生委員、保護司を長年勤められ、社会教育、社会福祉、文化向上に大きな功績を残され、文化勲章も授与されました。

又歌の道にも精進され、宮日歌壇賞も受賞され歌道一筋の快よき余韻に浸るものであり、そのまとめとして歌集「青竹林」

を出版されました。

「透きとほる青竹林の竹にからむ楓の紅葉散りはじめたり。」惜しくも平成六年六月三日御永眠されました。語る会の全員でもあり、惜しみてもあまりある人でした。御冥福をお祈ります。

五代・洋史氏は家業に専念しながら庄内商工会長その他各種役員を重任、地域発展の推進役として活躍しておられます。

おわりに

三島通りの殖産に貢献された方々は外にも数多くおられますが、今回は極く一部の人に限られました事をご了承ください。なお生存の方については大きく割愛させて戴きましたので、併せて御了承ください。



# 講演のあらまし

平成五年五月二十二日

## 演題 歴史の重さ たいせつに

読売新聞都城通信部長 宮 本 昌 夫

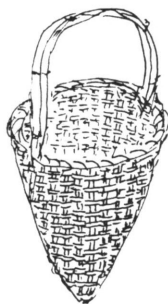
都城に赴任して十八年、自分でも都城人になった積りで第二の故郷として愛着を覚え、何処に行っても都城弁で応ずるのが普通になってきた。

都城は、自然が豊かで特に水がきれい。人情も実に細やかである。そして歴史的環境にも恵まれている。住民はその恵まれた生活環境にどっぷりつき過ぎていような気がする。河水汚染の問題にしても、この地域が、県民の水がめである大淀川の源流に位置するという自覚をもっと促すこと。歴史的遺産として、島津さんに対する誇りと、同時に郷土の先賢に対する市民の関心はどうか。個人が学習するためのくわしい遺跡地図も欲しい。折角、りっぱな資料館もできたので、古文書などの整

理、古い街らしい内容の充実が望まれる。

世界の遺跡アンコールワットの保存計画の例をあげるまでもなく、世界を牛耳る位、経済力が豊かになった日本は、もっと文化の面の世界的貢献があつてよい。昨年の世界地図は今年はまだもう使われぬ位、世界の流動化は激しい。この現状認識が先ず必要である。

普通、郷土誌のようなものは永続性がなく、せいぜい三号位まで続けられたら良い方である。これは編集など一部の人にも負担がかかりすぎることも一因であるが、「庄内」の場合よくそれらを克服してみんなで積極的に取り組む姿勢が伺われる。そのあたりのディチャン、バアチャンがペンをとり、郷土の色合いが濃く、書体型もソフトで親しめるし、分り易い。更にかくれた民話の採集とか、石塔など年代順に比較するなど期待したい。



平成五年十一月十七日

## 演題 生き生き人生

県老連講師団 塘 辰 二

十二月の安息日は、アメリカにとってハワイ空襲という思いがけない悪夢の一日となりました。五十年経った今でも真珠湾に半ば浮いて保存されたアリゾナは、彼等の痛恨の深さを知らしています。考えてみますと、その時、攻撃の対象になったのは軍艦、飛行機、飛行場などの軍事施設だけであり、一般の施設、人員に対する被害は殆ど見られなかったという事実。当時の軍人の心意気、一服のさわやかさを覚えます。

昔の国定教科書の中身をもう一度思い出してみましようか。小学二年、かしのみ。椎の大木見上げて今に見ているぼくだつて。臆せずくじけずの気概。小学三年、からまつ。記念の木、恩を忘れず。小学四年、町の辻。さとするべき親が小僧にさとされる。高一の教科書初冬二題「新づけの白菜」に昔のよき家庭生活が浮かんできます。明治末の教科書の「うめぼしの詩」二月三日の花盛り、実がなり梅ぼしとなるのも世のため人のため、しわはよっても若い気で、運動会にもついていく、なくはなら

ぬこのわたし。

高城有水の若木そめさん、八十六才。はた、たこの教科書から「花ごよみ」の記憶も確かに、流暢に最後まで歌いあげてくれました。長生きのみなさんの一致する信条は、腹かかないこと、何でも良い方に考えること。長生きとぼけ防止の秘訣です。

平成六年二月十七日

## 歴史講座 庄内の史跡

坂元 徳郎

日本神話の由来する記紀について。古事記は、和銅五年（七一一）語部、稗田阿礼の誦習するのを太安麻呂筆記する。万葉がなを用い、上巻は天地創造神話、英雄神話伝説の叙述で神代七代目の伊邪那岐命、伊邪那美命の大八島の国生み、神代史の主役である三神、天照大神、月読命、須佐之男命の誕生となる。中、下巻は人代で、国土経営の行なわれる過程を述べている。神武天皇の大和経略と即位、崇神、景行天皇のくまそ征伐などの国土平定関連の歴史伝説である。日本書紀は奈良時代、養老

四年（七二〇）にできた歴史書、漢文で書かれた全三〇巻の編集。古事記が伝承を残そうとするのに対し、日本書紀は多くの資料を集成して内容を充実させている。巻一・二が神話、あと三〇巻までは神武天皇から持統天皇までの歴史伝説といえよう。この記紀の神話伝承は私たちに祖先の思想や習慣を教えてくれる。

諏訪神社。初代資忠の創建。祭神は事代主神ほか。明治三年三島地頭、金石大明神をお軍神に移し鹿島神社と称したが、明治三十五年村社諏訪神社に合祀する。

山久院。都城島津氏初代北郷資忠夫妻の菩提寺。山田町古江の薩摩迫から現在地に移された。夫妻の墓二基が豊幡神社境内の一角に石垣に囲まれて残っている。この豊幡神社は七代数久（一五二一没）が志和池城内から城内八幡（祭神応仁天皇）を移したという。

釣環院。都城島津家第七代領主北郷数久の菩提寺。現、庄内農協支所の附近が寺院跡である。ここには、数久の墓のほか、第二代義久、第四代知久、第五代持久や、金石城で憤死した相久の墓もある。

## さつま狂句

酔くれ坊<sup>ぼ</sup>ん 折詰<sup>お</sup>ゆ惜<sup>あつ</sup>たれか 犬が盗<sup>と</sup>つ  
此<sup>こ</sup>ん暑<sup>ぬく</sup>さ 品<sup>ひん</sup>どま無用<sup>いらん</sup> 禪<sup>ぜん</sup>ひとつ

又 木 菖 福

味噌搗<sup>つ</sup>こち 病床<sup>だれ</sup>ちよい婆<sup>ば</sup>も 起き<sup>き</sup>つ下知<sup>げ</sup>つ  
世帯<sup>しよて</sup>ん操<sup>く</sup>い 親<sup>おや</sup>ん真似<sup>まね</sup>しつ 固<sup>か</sup>と生活<sup>くわく</sup>つ

福 島 福 助

たら言<sup>ち</sup>つ 大騒動<sup>うそど</sup>した米 出来<sup>で</sup>すぎつ  
境争<sup>さけい</sup>け 糞喰<sup>くそく</sup>犬<sup>いん</sup>ずい 吠<sup>ほえ</sup>かかつ

馬 迫 びつきよ

# 庄内町情報

## 庄内のお寺の大屋根 修理が完成しました

町区 山 元 一 信

心のよりどころ、庄内のお寺「清涼山願心寺」の平成大修復が完成しました。

都城市・北諸郡地区の文化財でもあります庄内のお寺「願心寺」の創立は、薩摩三百余年の永きに渡る厳しい念仏弾圧に耐えぬき、信仰に燃えた庄内地区の先祖の皆様方の厚い念力と、薩摩開教によせられた浄土真宗本願寺及び、開基住職大河内彰然師の熱意が実り、明治十七年七月二十四日、本山及び宮崎県令の認可により、願心寺の寺号を公称した事に始まります。

先祖の方々は、素晴らしい人生を生き、有意義に過ごすための念仏聞法の間として、現在では想像も付かないような苦勞を

重ね、本堂建立のための用材を霧島山麓に求めました。一本の樫を数十日も費やして運搬し、平面積二百三十九坪・軒面積三百十坪の日本にも誇れる九州屈指の総樫造りという大伽藍（本堂）を、設計に二年を費やし、明治三十三年四月に着工し、老若男女をとわず門徒総出で、実に六年という永い歳月をかけて明治三十三年十二月に完成したのであります。

また、先祖の方々の努力により、山門（お寺の本門）は、大河内超然師第二代住職継承を記念して大正八年十二月に着工し、大正十年四月に完成、次いで鐘楼も大正十二年八月に着工し、大正十三年二月に完成して寺院としての形を整え、浄土真宗ご法義伝道の拠点として、門徒地域住民の精神修養と念仏聞法の根本道場と、先祖を敬慕し、亡き父母や兄弟姉妹、友人知人を偲ぶ心のよりどころとして多くの人たちに利用されてきました。太平洋戦争のころ、本堂・書院等が軍隊の兵舎として使用されていたため、米軍機の機銃掃射を受けました。はからずも焼失はまぬがれましたが、老朽化の上に、雨漏り等により戦後は、本堂をはじめとする諸建物は、荒廃の極にありました。大河内浩爾師が復員され、第三代住職を継職されあらゆる苦難を乗り越えて、地域住民の力添えを戴きながら、門信徒一同心を合わせて、復興に力を注がれました。昭和二十八年には、いち速く

戦時中に供出されていた梵鐘を再鋳し鐘楼に取付け、朝夕に、心の安らぎを与える鐘の音に平和のありがたさを感じ、今日一日の幸せを仏様に感謝しつつ、明日に生きる力としてきました。特に、大晦日の夜の除夜の鐘は、感無量なるものがあります。

昭和三十七年に本堂屋根の一部修理を行い、色々と門徒の方々が努力に努力を重ねて護寺にりましたが、創建より百年近くも経過すると、傷みがひどくなり、昭和五十九年十月に大河内隆之師第四代住職継職記念事業として、山門・鐘楼の改修、本堂屋根雨漏り箇所緊急修理、開基碑改修、また、宗教的意義のみならず、民俗文化財としての価値を有する平田の隠れ念仏洞の整備も行いました。このようにして、補修に補修を重ねて



修理の完成した本堂

持ちこたえて来ましたが、近年特に雨漏りの傷みがひどく危険箇所が増えたため、京都の文化財保護課に相談して、同課の紹介により、京都伝統建築技術協会に調査を依頼したところ、今すぐ屋根修理をしなければ、木材が腐朽して、莫大な経費が必要となってきますとのことでありました。総代をはじめ役員の方々が協議を重ねた結果「信仰に燃えた、我々の先祖の熱意により、お念仏のみ教えと、地域住民の精神道場として創建して頂いた九州でも珍しい、郷土の文化遺産を子や孫、曾孫と後世に残してやるのが我々の務めである」と認識して「寺号公称百十年・本堂起工百年慶讃法要記念願心寺平成大修復」と銘打って実行委員会を結成して、平成三年三月よりこの大事業に取り組みました。門徒の方々は勿論のこと、県内外の心有る方々の尊いご懇志により、約二億七千万円をかけて、平成六年九月三十日に完成し、十月三十日に慶讃法要並びに祝賀会、稚児行列等がとり行われることとなりました。誠に慶賀にたえません。

我が愛する郷土、庄内の歴史を語り継ぐために百十年の歴史を持つ「清涼山願心寺」の大修復完成の機会に、創立の経緯を書きましたが、書き足りない部分がたくさんありますので願心寺に直接話を聞いて、文化財保護のためにも、より一層のご協力をお願いいたします。

# J A 都城庄内支所

末 永 悟

昭和五十年二月一日に、都城・北諸の九農協と畜連とが合併して都城農協が設立され、平成七年で二十年目を迎えます。

合併時の組合員は正組合員一七、〇九九名、准組合員七七一名の合計一七、八七〇名、庄内支所は、正組合員一、二八三名、准組合員四四名の一、三二七名の組合員でした。

当時は、オイルショックによる抑制の為の経済対策から、赤字国債の発行、公定歩合の引き下げ等の不況対策が講じられましたが、その効果が充分発揮されない状況の中で、農業をとりまく環境は、米価・畜産価格・園芸物の市況も当時としては好調に推移しました。

本年度は、第四次地域営農振興計画の最終年度にあたり、私共は積極的な事業展開に努めております。

## J A 事業のあらまし

### 営農指導関係（営農指導課）

指導体制は、組合員の営農形態に合わせ指導員も、和牛生産・

肥育牛・酪農・養豚（肉豚・生産豚・契約）・馬・農産（稲作・甘藷・雑穀）園芸（施設園芸と露地園芸）といった作目別専任指導体制で、組合員の所得向上のため生産指導にあたっております。

### 購買関係（経済課）

生産に必要な、肥料・農薬・飼料・資材・生活資材・燃料・農機具・自動車等の供給を行っており、特に農繁期は、年に二回土曜日、日曜日の営業も行っております。

又、A コープ店では新鮮な野菜・肉・魚介類等食生活に必要な全ての品が揃えてあります。

### 金融共済関係

地域の金融機関として、窓口では普通貯金・定期貯金をはじめ年金・給振・公共料金・キャッシュカード等の各種取引又、各種ローンの相談と貸付も行っております。又、共済事業では組合員をはじめ、地域住民の生命と財産を守る充実した保障を図るため渉外専任職員が相談に応じています。

自動車・バイクの自賠責共済、任意共済に加入されますと、セット割引きで、損害賠償保障が充実されます。

部会組織は、農事振興会をはじめとし、十八部会の組織で活発な部会活動がなされております。

以上J A 事業を簡単に紹介させて頂きました。



# 学校便り

編集 部

## 庄内小学校

従来から夏休み中に「一人一研究」として身のまわりの中にあるいろいろな課題に挑戦してまとめたものを、創意工夫展に出品し多くの入選・入賞をおさめてきている。昭和六十三年に引き続き、「青少年の創意工夫の育成につとめることによって科学技術の振興につくされ、その功績は極めて顕著であること」を認めます。よって第三十六回創意工夫育成功労学校表彰を行うにあたり本賞をおくり表彰します。」と科学技術庁長官賞を受賞した。さらに、この受賞により、倉田記念科学技術振興会より副賞金十万円の贈呈を受けた。

### 全国保健体育優良校

平成四・五年度の保健体育研究校として、都城市教育委員会・宮崎県教育委員会の指定研究を受け、「運動の楽しさ喜びを味わわせ一人ひとりを伸ばす体育科学学習指導法の研究」に取り組んできた。新指導要領をふまえた実践研究が認められ、平成六

年十月二十日石川県で開催される大会で日本学校体育研究連合会より表彰された。

### バスケット部本年も活躍

スポーツ少年団女子バスケット部は宮崎県大会、九州大会でもパート優勝し、全国大会（東京代々木運動公園）に出場した。岡田新一教諭の指導によるバスケット部は、技術的にもレベルが高く、特に女子バスケット部は県大会でも大差をつけて勝ち進んでいる。男子バスケット部も県大会でベストエイトに残りチームワークのよさを発揮した。

一九九三年度宮崎県健康推進学校として宮崎県教育委員会、朝日新聞社より表彰される。



庄内小学校のバスケット部

## 菓子野小学校

平成六年三月、プール脱衣場、屋外トイレ完成。

先人の遺徳を偲ぶ。

三原叢吾先生の命日にあたる六月十八日、児童によびかけて希望者で墓前祭に参加した。

菓子野小学校の沿革史のとびらには、「菓子野小学校創設者（明治十一年）三原叢吾先生に対し、菓子野校区教育振興会は遺徳を顕彰するため、昭和四十四年に六月十八日の先生の命日に墓前祭を行ない、年々これを命日の前後適当な日に行うこととする。」とある。さらに「①明治五年教育令発布にともない三島通庸が鹿児島より先生を招へいして庄内に塾を開く。②明治十年の役起るや先生は西郷隆盛のもとに馳せ帰る。③役後再び（十一年）庄内に帰り菓子野（現菓子野公民館）に学校を開き子弟教育に当る。明治三十八年没す。六十八才。」と付記されている。

### スポーツ少年団剣道部

#### 菓子野小剣道部後援会

子供達からの熱心な要望もあり、昭和五十九年十二月に創設された菓子野小学校剣道部は今年で十年目を迎えました。現在部員数十三名で楽しくやっています。



菓子野小の豆剣士たち

近年子供達の遊びも変わって来ましたが、このような中で外に出て体を動かして汗を流させることができたなら、また剣道を通じて礼節を学びながら元気に育ってくれるならこの思いで設立されたのがこの剣道部です。

監督は菓子野清弘

さんに引き受けてもらいました。

練習日は毎週月木土（第二土曜日は除く）に菓子野小体育館で五時三十分より七時まで元気一杯励んでいます。

この十年間で五十五名の豆剣士を送り出しましたが、中には有段者も何人かできました。

年三回の昇級審査、レクリエーション、栄養会、お別れ会等後援会としても積極的に取り組んでいるところです。

また父母の結束も良く力強い限りです。

なお菓子野監督は公民館の仕事もしておられ、大変ご多忙の中に子供達とのコミュニケーションを大切にしておられ、子供達から大変慕われておられます。

「勝敗にこだわらず、何時までも続けることが大切」これが監督の指導方針です。監督には終始ボランティア精神でご指導賜り後援会としては誠に頭の下がる思いがしています。

最後に、この剣道を通して子供達がより健全に成長して呉れることを期待しながら今後も頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

## 乙房小学校

### 体育館改築はじまる

老朽化した体育館を平成六年八月二十九日取りこわし、来春の卒業式は新装なった体育館でできるよう、大豊建設がうけおって進めている。床面積九十九・四平方メートルで地域住民の喜びは大なるものがある。（運動会は五月二十二日実施した。）

### 高齢者宅を訪問

昭和五十五年度から社会福祉普及協力校として創意工夫をこらしながら推進してきた。本年度は、二・四・六年と一・三・五年とパートを組み、地区の民生委員の協力を得ながら、独居

老人宅、ねたきり老人宅を訪問し、心のふれあいを深めてきた。また、地区によっては、公民館に集まっていたき、よりそった中でのふれあいを深める機会を設け、みなさんからよろこばれた。

## 庄内中学校

### 研究委嘱校

平成六年度租税教育校として宮崎県租税教育推進中央協議会より委嘱され、その研究推進に努めてきた。

また、平成五・六年度北諸県教育事務所、都城市教育委員会の研究委嘱校として「自主的・意欲的に学習に取り組む生徒の育成」を研究テーマとし、「心のふれあいこそ教育の原点である」と熱心に教師が取り組んでいる。（研究公開 平成六年十一月二十二日）

### 社会福祉普及校として

体育大会も生徒会が自主的に進め、高齢者席も特別に設けるなどの心くばりがみられる。学級対抗合唱コンクールで第一位となった学級と吹奏楽部が合同して福祉施設を訪問、吹奏楽部は県大会での銅賞の腕前を発揮しよろこばれた。

惜しくも県体出場ならず

二年 上柳 隆行 一、五〇〇 m 三位  
三年 松下 孝一 一、五〇〇 m 三位

県大会出場おめでとう

三年 徳留 健太 砲丸九 m 六十七 cm 二位

三年 新町かずみ 一〇〇 m H 二位

三年 坂元ゆかり 一〇〇 m H 一位

一年 持永 哲一 一〇〇 m H 二位

一年 福野 和美 一、五〇〇 m 二位

二年 前畑光一郎 一、五〇〇 m 一位

県大会では、各選手がそれぞれの種目でベストをつくしたが、

一、五〇〇 m に出場した前畑光一郎はトップをキープし、日頃の練習成果を発揮した。しかし、ゴール寸前の勝負で三位となったのは惜しまれてならない。このラスト十 m の躍動はスポーツの美でもある。

## 向井さん宇宙を翔ぶ

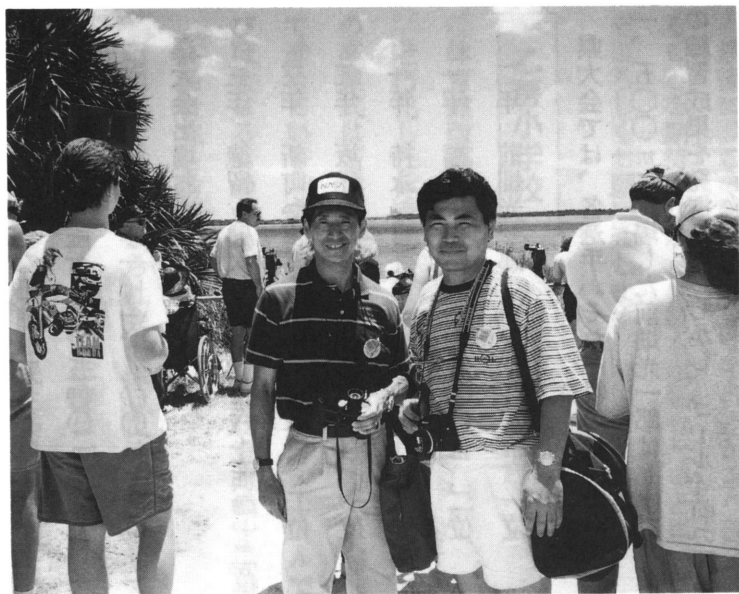
——東区出身の前田さん、向井さんをモデルに  
宇宙開発事業団のポスターを制作——

編 集 部

東京在住のアートディレクター、前田光政さんが、日本人初の女性宇宙飛行士、向井千秋さんをモデルに制作したポスターが宇宙開発事業団のポスターとして採用されたことは、去る七月二十三日付宮日新聞にも紹介され話題を集めている。

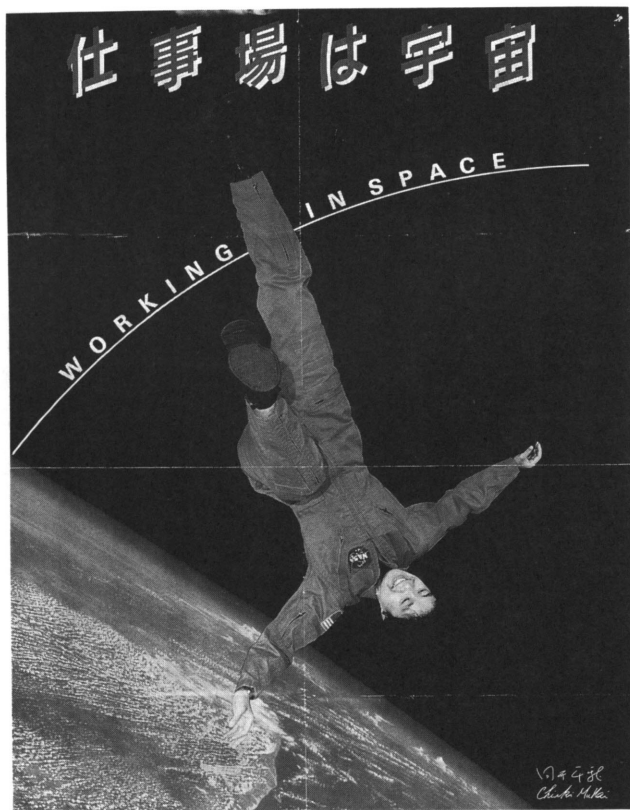
前田さんは、東区の前田政男氏（故人）とタミさんの三男で、都城西高校三回卒、桑澤デザイン研究所で学んだ後、百人に一人という難関を越えて、米資系のトンブソン広告代理店に就職、そこで向井さんの妹さんが同僚として働いていた縁で、「プライベートに使うポスターを」と依頼を受け制作したものが、事業団の公式ポスターとして採用された。

ポスターが採用されたことから、NASAは前田さんを打ち上げ当日、ケネディー・スペースセンターに招待。向井さんの御家族（御両親と妹さん）や先輩宇宙飛行士の毛利衛さん等と



ケネディー・スペースセンターで  
向井さんの出発を見送る毛利衛さ  
んと前田光政さん。2人の中央後  
方に発射台が小さく見える。

共に、向井さんの出発を見送った。写真はその時、毛利衛さん  
と一緒に前田さんとポスター。ポスター本体と左下に二個並ん  
だマークのうち右側のものが前田さんの制作によるものである。  
前田さんはこれまで、全国カタログポスター展奨励賞、全日  
本CMフェスティバル優秀賞、日本広告写真家協会賞など受賞。  
現在は独立して新進アートディレクターとして活躍中である。



## 幼い日の言葉

鷹尾町 得能哲夫  
(東区出身)

丁度延岡の友人が遊びに来ていた。若い日の、霧島登山の思い出等を話していると、電話が鳴った。

「得能ですけど」

「徳郎ですが」

「トクロウチャン……」

「ですが」

彼は私より四才年下である。

「トクロウチャン。珍しいですが、元気ですか。」

「おかげ様で元気ですよ。用があるときばかり電話しますが、

今日は『庄内の昔を語る会』の原稿を頼もうと思って……」

電話は、庄内の昔を語る会のこと、原稿のこと、長い話の後、

梶井馬場<sup>かさいばば</sup>(庄内町東区)で一緒に生活した小さい頃の友だちの話と続いて終った。

私たちの電話のやりとりを、黙って聞いていた友人が、

「君は、今保育園の子供に話していたのか。」

と聞いた。

「トクロウチャン。トクロウチャンと言うので、保育園の子供だろうと思ったよ。」

「……」

「しかしネー。話の内容が、昔を語る会とか、原稿を頼むとかの話なので、保育園の親かなあー、とも思った。」

「違うよ。私の幼い頃の友だちだよ。」

「そうすると、そのトクロウチャンは何才ぐらいだ。」

「そうだなあー、停年になったのだから、六十才は過ぎていると思うよ。」

友人は私の顔を見ていたが、同窓会等で酒を飲み、昔の幼・少年時代に返ってチャン呼びすることはあっても、それも停年過ぎの人を生活の中でチャン呼びするのは変である。と言うのである。

私は今まで幼い頃の友だちに、チャン言葉で話すのを変だと思ったことはなかったが、友人に言われて気になって来た。

普通は幼児語のチャン言葉で始まって、小・中学校、高等学校、青年と成長して行く間に、君、サン、またドン（殿<sup>ど</sup>）言葉に変化して行くのであるが、どうして私たちの場合は変化しなかったのだろう。不思議になって来た。

たしか小学校の三年生の頃であったと思う。学校で言葉の指導があり、男子は「君」女子は「サン」と呼ぶようにしなさいと指導された。

学校では、久玉君、原口君と、君言葉を使ったが、先生のいない所、また家に帰るとチャン言葉であったと思う。

今机について、私はボケかかった頭を使って、トクロウチャンから頼まれた、この原稿を書いているが、書きながら私たちが使っているチャン言葉には、梶井馬場を生活の場としての共有の古い歴史があることに気づいた。

トクロウチャンとえば、私の頭の中にはグミの木が浮んで来るのである。

トクロウチャンの、昔の家の裏に、大きなグミの木が五本あったと思う。学校が終わると、みんなグミの木に登って、目白の鳴きまねをしながらグミを食べた。そのグミのおいしかったことは忘れることは出来ない。

マサチャンとえば、水あび（水泳）を思い出すのである。

泳げない私たちを、オミケンの前田用水路に連れて行き、先ずメダカを生きたまま飲みこむと泳げるようになるというて、タオルでメダカをすくって、かまないで飲みこませてくれた。それから、手をとって少しずつ泳ぐように練習させ、泳げるようにしてくれた人である。

ヨシカネチャン、ミノルチャン、カズヤチャン……。みんな目白カゴづくり、木登り等、学校や親が教えてくれなかった、この世に生きていく、いろいろなことを教えてくれた人たちである。

もし、トクロウチャンが、チャン言葉を使わずに共通語で「大変お忙しいことと思いますが、庄内の昔を語る会からです。原稿を書いてくださいませんか。お願いします。」

と言ったら、私は齢をとり、文章を書くのがいやなので、いろいろな理由をつけて、ていよく断っていたと思うのである。

トクロウチャンが「テツチャンノ書いてくれんなあー」の言葉によって、六十年前の梶井馬場のチャン言葉の生活が、私の体の中によみがえって来たのだと思うのである。

友人が変だというチャン言葉は、私たち梶井馬場に育った者にとっては、これからも心の財産として、忘れられることなく、生き続けるのではないかと思うのである。



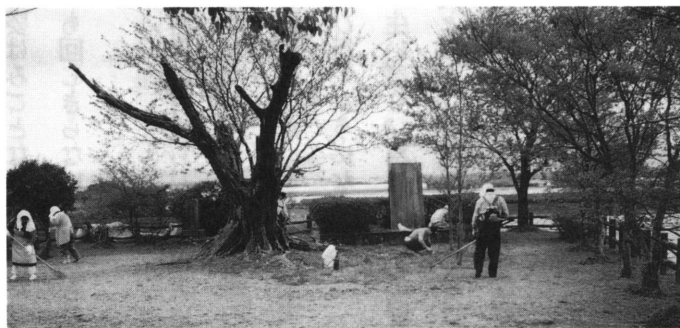
# 稚児桜の清掃作業

東区 帖佐ミヤ

都城の史跡として残る稚児桜は、庄内の諏訪神社の背面にある丘陵地「戦場原」といわれる一角にあります。

その由来については本誌で、すでに紹介されていますが、庄内に生まれ育った私など小さい頃のかしい思い出の地でもあり、みごとに咲き誇った桜の太木は頭に焼きついて離れません。小学校一年生の時、西原先生に連れられ遠足に行ったことも忘れられない思い出です。

「庄内の昔を語る会」でこの清掃をするようになったのは、平成四年頃からで、私もその仲間に入って手伝わせてもらっています。



かねてより一、二時間の早起きで、ひんやりした朝の空気をうけて稚児桜へ駆けつけます。すでに数人の方々の草刈機の音が戦場原の静けさを破って響きわたっています。早速、刈草の始末や石碑の回りの草取りにかかります。

今から約四百年前、庄内の乱の安永城攻防戦でここ戦場原が激戦の地であつたらしい。（この戦にちなみ戦場原と名付けられたのでしょう）当時十六才の少年武士「富山次郎」他幾百人の若武者が激しい攻防戦の後、空しく散っていった悲しい姿を想い浮べながら、ただ、もくもくと清掃に励みます。この戦に関つた多くの親類縁者のお取り計らいで、亡き方々の供養の為に、一樹の桜を植えられたのであろうなど、あれこれ昔に想いを走らせるうちにきれいに草も刈られ、清掃作業は終わります。

私もここ三、四十年は自分の仕事に追われ、稚児桜を訪ねることなどありませんでした。最近我が家でこの稚児桜の清掃のことが話題にのぼった時、姉が、それ以前は鍋倉利美さん（東区在住）が清掃しておられたと教えてくれました。

早速、鍋倉さんを訪ねましたところ、次の様に話されました。『私の家は稚児桜のすぐ近くに四反歩位の畑があり、お茶時にはいつも桜の木の下で休ませてもらっていた。桜の花の時期

は、どこから見てもその咲き匂う麗姿はみごとなものだった。幹の回りは大人二、三人でかかえても回しきらないほどのものだった。

小さい頃（昭和の初め）、都城の聯隊の将校らしい人が馬に乗ってお参りに来られる姿をよく見かけていた。きっと由緒ある方のなくなられた地であろうとは思っていた。そして、戦中、戦後を経て世の中も落ち着き畑へ再び行くようになった。

稚児桜は昔の面影はなく、カヤが生い茂り、草ぼうぼうの野原になっていた。小さい頃から、何となくここは粗末にしてはならない所だという気持ちや稚児桜という地への愛着から草刈りを始めた。

まず、カヤを根つぶししないとだめだろうと、二、三日かけてカヤの根を掘った。丁度その作業をしている時、東区の人來薬店の人來クミ子さんが友達を連れて墓参りに来られた。話を聞くと、その友達の家に災いが絶えず、ウラカタ師に聞いたところ、「昔、庄内の稚児桜という所で討死した人がいます。その人の霊をお祭りしなさい」と言われ、お墓参りに来ましたとのこと。お二人に丁寧なお礼を言われ、家に帰ったら飲み物など届けてあったのが思い出に残っています。』……と

また、現在建てられている石碑は、昭和四十五年当時諏訪原

に住んでおられた茶道の「紫藤ヒロ先生」の御努力で建立されたものです。週一回お茶習いに行くと先生の話はいつもこの話でもちきりでした。

このように稚児桜は、その時々いろいろな人の手で守られてきているようです。

今では、往時みごとに咲きほこったあの桜の大木も幹のみ残し朽ち果て、新しく昭和四十九年に植えられた二代目稚児桜がすくすく成長しています。

快い汗を流す事二時間、きれいになった草原にシートを敷き、それぞれ持ち寄ったおやつを頬張り、お茶を飲み、四方山話に花が咲きます。一朝の清掃作業は、どの人の顔にもよろこびと満足感が感じられます。勿論私もその中の一人です。

ふと目をやると、青葉の茂った桜の木の間に今を盛りに真白い花が咲きこぼれています。サルスベリの花です。誰いうとなく、

「サルスベリの白はよかなあ。春は桜、夏はサルスベリの名所んせんないかな。」

真白い清楚な花に若武者との出会いにも似たよろこびを感じ家路につきました。

# 短歌

## 青竹林

町区 故南崎 喜美

透きとほる青竹林の竹にからむ

楓の紅葉散りはじめたり

研修会吾終へて来てバスにあり

今日の入日のおだやかなるも

朝より好める読書に日をつぶす

夫の安けき老年を思ふ

年長く逢ひ得ぬ師の君想ひつつ

受話器をとりぬメモを持ちて

諏訪の森木の香ゆかしき家に住む

わが古き友充ち足りし日々

ひそやかに咲きて散りゆく寒椿  
残り少なき年を思ふも

古き友老のわびしさもつ仲間

心通じて別れ難しも

ひと日晴れし梅雨の空の色透きて

さやぎしづけき竹の夕暮



南崎喜美さんは、平成六年六月

三日八十六才で永眠されました。

永年地域社会福祉のため貢献され、  
数々の賞を受けられました。若い  
頃から短歌に親しみ、「アララギ」  
に入会。数多くの作品を発表され、  
昭和六十三年、歌集「青竹林」を  
出版されました。その抒情的で知  
的な作品は高い評価を受けていま  
す。

ご冥福をお祈りします。

# 俳句

## 核弾頭

東区 岩佐 巴旦杏

## 天の川

庄内俳句会

白は白黄は黄同志や蝶の恋  
梅雨鳥黝き居住ひ正しけり  
石楠花や節つけてなむあみだぶつ  
胸張って鯢の抵抗釣られけり  
行きあたりばったり蝶の無疵なる  
核心に入らんとせしが熱帯夜  
日盛のブラックホールに陥ちにけり  
夏の蝶籠の股間すりぬけて  
かぶせては居ても水着の乳房かな  
とんぼうの雌雄の時間流れをり  
夏瘦や手の届く辺に万十あり  
台風七号ベロンベロンに迂廻せり  
白粉花の胸ひきしめて眠りけり  
昼寝なとよき昼寝せよ厨妻  
核弾頭ならぬ冷房のボタン押す

妻と娘に違ふ道あり天の川  
白粥の膜つややかに秋立てり  
跳んで来し蛙こんなに冷たかり  
転職や今日は隼人の揚花火  
終りかと思へば揚る遠花火  
ヘリコプター腹にひびきて田水沸く  
南山の歴史を偲ぶ夕日かな  
朝涼の呉汁おおかた噴きこぼれ  
源兵衛五兵衛とあり夜の秋  
逝くのならこんな明るい櫓散る日  
大夕立あとの一竿濡らしけり  
小さきは子が乗りて来し茄子の馬  
造り蟬音をたてずをり世阿弥の忌  
地虫穴を出るやいきなり日曜日  
車井戸立秋の水汲みあげり

和 田 思 峰  
竹 下 さつき  
平 田 ミチ子  
や ぎ しげし  
蒲 生 敏子  
福 島 多 峰  
又 木 菖 福  
川 畑 かつみ  
宮 田 安子  
轟 木 掃 星  
せ お ふくの  
堂 前 道子  
柿 並 その子  
岩 佐 巴旦杏  
馬 迫 吐 雲

# 子や孫に語り伝える話

# 庄内の乱と高岡郷

宮崎市 松岡 優

(元東区在住)

私の家に保存している古文書の中に、庄内の乱、関ヶ原の戦いに戦死した人名が記された文書が見つかりましたので庄内の昔を語る会へその写しをお送りしました。文末に弘化四年末十二月写、薩領高岡之士、松岡昌雄まさちかとあります。この昌雄は私の祖先にあたり幕末の頃、高岡藩の祐筆を勤めていた関係で、数々の貴重な文書が残されているということです。

慶長四年三月九日(一五九九)、伊集院忠棟は京都伏見で島津忠恒の手により、陰謀の故をもって手打ちにされます。都城に居た嫡子伊集院忠真は、都城と周辺の十二砦に八千有余の兵を配置して、島津宗家三万の大軍と戦うことになり、両軍ゆずらず、翌五年三月忠真降伏まで十ヶ月余り、都城盆地を中心に死闘がくり広げられます。これが庄内の乱です。

忠恒は忠真討伐のため京都から急ぎ薩摩に下り、兵を整えて六月上旬東霧島を本陣とします。忠恒の従弟佐土原城主島津忠豊(のちの豊久)も同時に京から西下し、佐土原の兵を率い

(高岡の郷士も数多く従軍)本陣の忠恒の軍と合流しました。

山田城攻めは六月二十三日早朝に始まります。寄せ手の大将は島津忠豊、軍をすすめて大手口に攻め入りますが、城兵は忠豊の旗差物を奪い城頭高く掲げたので、これを見た寄せ手の将兵は、すわ大将が城中に攻め入った、我れ後れじと一せいに城内に突入、城主長崎久兵衛はじめ三百余討死、二百名は逃げて城は半日で陥落、忠豊に従った高岡の入田、長山某の二人は鉄砲にうたれて戦死しています。

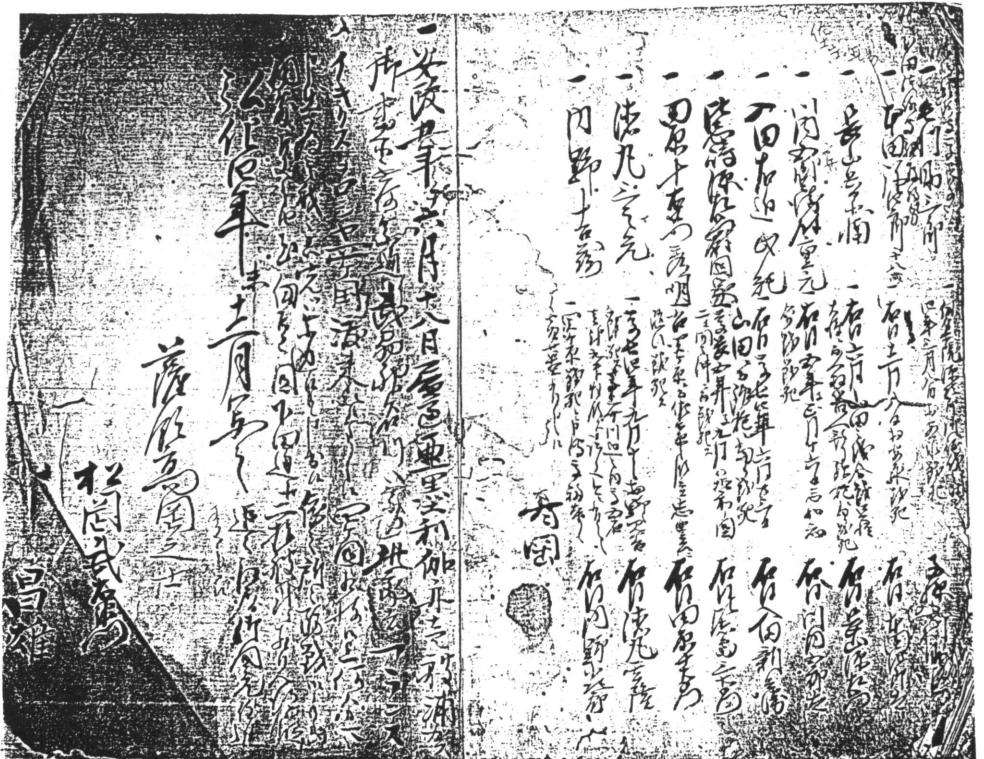
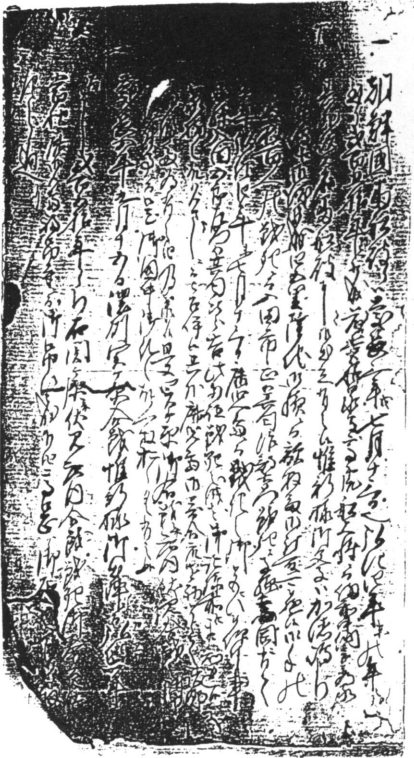
小松尾(乙房)の戦いで敗れた忠恒は九月十日、野々美谷城に猛攻を加えます。北郷三久勢が正面から当り、忠豊は、野々美谷救援のため安永城から打って出た兵と戦い、徳丸三之允戦死、その名は「庄内軍記」にもあります。

激戦の末、野々美谷落城、忠恒は森田に本陣を構えます。十月二日八日、安永城を守る智将白石永仙の謀によって、忠恒自身が危機に陥る苦戦が続きましたが、大守旗本として本田弥四郎壮烈な戦死、毛利助三郎も乱戦の中で戦死しています。

長い間の籠城に兵糧之しく餓死寸前の志和池城に、忠実は食糧を送るため様々な計を用いますが、忠恒軍によって尽く失敗。慶長五年一月十六日、城中から打ってでた兵との合戦に川内重之戦死。

古文書に残された庄内の乱における戦死者の氏名、日時、場所をもとに庄内の乱をふりかえり、その戦いの跡をたどってみました。島津忠豊は関ヶ原の戦（一六〇〇）で戦死しますが、高岡郷の田原秀明、内野某も忠豊に従って戦死しています。

関ヶ原の戦いの後島津勢力維持のため、島津義弘は高岡郷に薩摩、大隅、日向三州から郷士七百三十余人を移住させましたが、その親子三代の戸籍名簿も当家に保存されています。





# 乙房尋常小学校・

## 校旗制定由来

### 編 集 部



この写真は乙房小学校に校旗が制定されたときの記念写真で、台紙の部分に覚書がある。

「内山氏ハ校旗（代百円）ヲ乙房校ニ寄贈シタリ、其ノ制定式ヲ昭和九年十月十六日挙行、記念撮影ナリ」

内山妻君

乙房小学校長市蘭、谷

頭駅踏切内山、乙房区長高橋正義、町長清水清次、校旗

過日、乙房小学校を訪ね、当時の校長は、第十二代市蘭清右エ門先生で、以前庄内小教頭として勤務されていた。市蘭辰夫先生の御父君でした。校旗制定については沿革史にも記載はなく、他の資料にも記録されているものは見当たりませんでした。現在の校旗は「昭和四十八年、創立一〇〇周年記念」の記録があり、二代目の校旗であります。図柄・色など初代のものと同じに製作されたようですが、頭の部分が、初代のものは矛盾（まじ）であるのに対し、現在のものは火消の纏（まと）によくある三方円形になっています。

内山さんは、名をアサキチと言い、谷頭駅の踏切番をしておられ、駅前の鉄道官舎に住んでおられたそうです。当時官舎に住んでいた人たちの子弟は、宮島あたりの知人宅に寄留した形で、乙房小に通学していたそうです。内山さんの御子息・優さんも、昭和九年三月卒業されていますが保護者は宮島の原口厚さん（故人）になっています。息子さんの卒業を記念し、御世話になった学校への御礼との気持で、校旗の寄贈を思い立たれたものでしょう。内山さんがごこの人で、国鉄を退職された後どうされたかは判りませんでしたが、内山さんの教育に対する熱意と、学校に対する感謝の心は校旗の中に秘められて、乙房

小に学ぶ幾多の子供達の心の中に、学校を愛する心、ひいては郷土を愛する心を育てる糧となるでしょう。

取材に当って、現乙房小学校長・甲斐鹿男先生、乙房の小久保利美さん、谷頭保線区で内山さんの下で働いておられたことのある宮島の原口進さん（厚さんの甥）に御協力をいただきました。ありがとうございました。

## 死線を越えて

関之尾 佐土平 栄 蔵

それは平成五年十一月三日、四半的大会が都城市宮陸上競技場で行なわれた日のことでした。同じように競技に来ていた年輩の人から

「あなたは佐土平栄蔵さんではないでしょうか。」と不意に声をかけられ、

「ハイあなたは」と申しますと、

「私は野戦で第三大隊本部軍医付看護兵の黒木です。あなた

を介護しました。」とのこと。戦場で重傷を負い無意識の私を救助してくれた恩人との五十年ぶりの再会に、よく私のことを覚えていただいたと感激。昔の話に時も忘れえました。

昭和十二年八月一日、都城歩兵第二十三聯隊へ入隊、八月五日大雨の降りしきる都城市街地を行進、市民の力強い万才の声に送られ都城駅を出発しました。八月八日門司港出発、朝鮮へ上陸。北支の山海関から河北省三家点の第三大隊本部のある最前線に配属され、警備にあたりました。敵の偵察に行き銃撃戦となり敵陣にまぎれこんで支那兵と共に一夜を明かしたこともありました。

八月十三日、千軍台總攻撃開始、同郷の坂元浅夫分隊長が負傷され、私は敵弾の下をくぐりぬけて持っていた三角巾で顔面の手当をしました。丁度その時に川野小隊長戦死の報告あり。



いよいよ私たちの分隊一個分隊だけになりました。敵陣に三百米位まで接近した時、雨のような敵弾の中、身に激しい衝撃を受けて気を失い

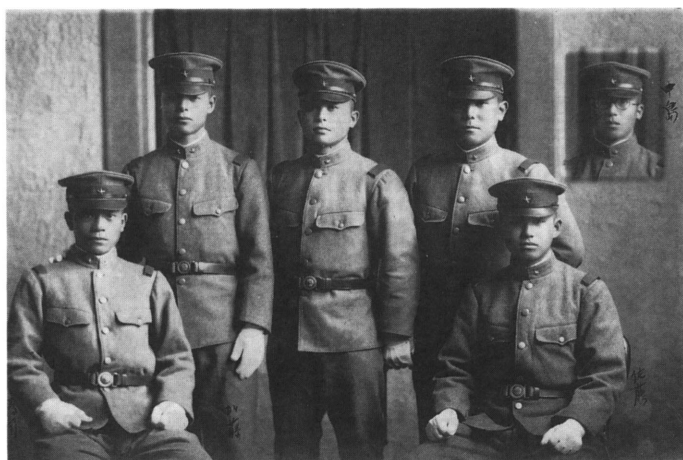
ました。

気がついた時は、民家の土かべの床に敷いてあるとうもろこしのござの上に寝かされていました。頭部全体が包帯で動きません。片目をパチパチしている時、大隊本部付の田中栄三さんが「やられたや」と言っておにぎりを一個食べさせてくれました。その時間いたところによると、今屋の田村寅男さんと畑中武雄さん（二人とも故人）が召集され、看護兵として負傷兵を集める任務についていましたが、私が頭部から顔面を巻脚絆で巻いて倒れているのを見つけ、「これはたしかまだ息がある。なんでん佐土平栄蔵ではないか。」と担架で野戦病院に運んでくれたのだそうです。

重傷のため、すぐ野戦病院から小倉、東京と衛戍病院に転送され白衣の生活を送ることになりました。片目は失ったものの、正に死地を脱してこうして今は平和な日々を送っていますが、これも五十年ぶりお会できた黒木寅男さん（新富町）はじめ軍医さんや看護兵の皆様の手厚い看護のおかげと感謝申しあげている今日です。

## 庄内出身の俊英たち

西 区 清 水 省 三



私たちが中学生の頃（昭和十二年入学）は、軍国主義華やかな時代で、陸士・海兵というと、ほとんどの人が一度は憧れたところでしたが、入学試験がなかなかの難関で、優秀な学力と、強健な身体がともなわなければ入学できるところではありませんでした。この写真は、その難関を突破して、陸軍予科士官学校に在学中の年齢十七〜十八才の庄内出身の俊英達の記念写真で、昭和十三年春頃撮影のものです。

後列三人は、右から山口元美、東條四郎、加藤静男さん。前列右は佐藤司、左は渡司勇さん。右上枠内は中島俊彰さんです。この人達の其の後について調べ得たことを記します。

#### ○故山口元美 航空兵少佐

町区出身、故山口徳太郎氏六男、陸士53期

航空士官学校卒業（昭和十五年六月二十四日）後、満洲白城子に駐留、重爆撃機に搭乗、大陸各地に出撃奪戦、後、浜松陸軍飛行学校に、航法訓練教官として赴任、若鷺たちの指導に当り、終戦時は、宇都宮教導飛行師団に転属になっていた。復員後、宮崎県庁厚生課で復員業務に就かれたが、公職追放のため、東京で実業家として活躍中、病に冒され、昭和五十七年八月二十七日逝去された、時に六十二才であった。東京に房子未亡人と二男一女が健在。

#### ○故東條四郎 砲兵大尉

西区出身、昭和初期庄内町収入役を勤められた故東條正左衛門氏の四男、陸士五十三期、北支戦線で活躍中、昭和十七年六月四日、壮烈な戦死を遂げられた。遺族は次兄国之助さん、甥恭久さんが家を守っておられる。

#### ○故加藤静男 航空兵少佐

千草区出身 故加藤静馬氏三男 陸士53期

航空士官学校卒業（昭和十五年六月二十四日）は司令偵察機に搭乗、大陸や南方の各戦域を翔け巡り、作戦指導の重任に当られた。戦局の急迫にともない、本土防衛に備えて、九州に進出の日、昭和二十年三月十八日福岡上空で壮絶な死を遂げられた。実妹大重シゲさん（故大重敏雄先生夫人）が志比田町に健在。民生委員をされるなど活躍しておられる。

#### ○故佐藤 司 歩兵大尉

西区出身 故佐藤吉雄氏長男 陸士54期

都中四年修了で陸士進学、卒業（昭和十五年九月四日）と同時に、漢口付近に展開中の歩兵第六十一聯隊第一線小隊長として、漢水、予南、大洪山、江北、長沙の各作戦に参加、昭和十七年二月、フィリピンに転進、第二次バターン半島攻略戦に第六中隊、小隊長として奮戦、同半島制圧後、コレヒドール島攻略戦準備中に連戦の疲労が重なったためか、病に冒され、内地送還、大阪陸軍病院にて、手厚い看護の甲斐もなく、昭和十八年六月五日、不帰の人となった。筆者の従兄に当る。姉と妹は他家に嫁し、それぞれ東京と山口県に居住している。

○渡司 勇 航空兵大尉

東区出身、天神馬場の医師、故渡司栄氏の三男、陸士54期

都中四年修了で陸士進学、航空士官学校卒業（昭和十六年三月二十八日）飛行十六戦隊（軽爆撃機）に配属、鉾田、浜松、台中等で技を磨き、昭和十七年一月マレー作戦中の第二十七戦隊（襲撃機）に転属、襲撃機を駆使してマレー作戦、北部スマトラ作戦に参加、続いて戦隊はビルマ作戦参加を命ぜられ、トングー南飛行場を基地として、マンダレー攻略戦に進撃する地上部隊に協力し奮戦中、昭和十七年四月二十九日、ビルマ中部の要衝ラシオに対する空挺部隊降下作戦の降下直前の敵陣地攻撃のため、九九式襲撃機三機編隊の編隊長として勇躍出撃されたが、壮烈な戦死を遂げられた。元庄内病院院長故山元寅男氏の末弟である。

○中島 俊彰 歩兵大尉、後に自衛隊一等空佐

乙房区出身、故中島進氏長男、陸士54期

陸士卒業（昭和十五年九月四日）と同時に久留米第十二師団第四十八聯隊本部付に配属、後に第五十六師団（龍）第一四八聯隊に転属、部隊は昭和十七年三月ビルマに進攻、東部山岳地を北進、東北部の要衝ミートキーナや雲南省怒江西岸地区を制

圧、この作戦に聯隊本部副官として参加したが、敵機の空襲を受け、下半身貫通銃創を負い、ラングーン、シンガポールの各野戦病院を経て、小倉陸軍病院で療養、恢復後、朝鮮方面軍○部隊に転属、京城で終戦、復員、その後自衛隊に入隊、航空自衛隊に配属になり幹部学校教官などを歴任。一等空佐で退官、現在病に倒れ自宅療養中である。

城山の大東亜戦争戦没者碑に名を刻まれた人は、この写真の中の四名を含めて、五五〇名の多きに達している。国に殉ずることを本望とした時代ではあったが、かくも多数の有能な人材を失ったことは、惜しみて余りあるものがある。あらためて、ご冥福を祈ります。

※文中、渡司・佐藤両氏の分は、陸士五十四期同期会で編集発行された。追悼記念誌「留魂」（山元真枝様所蔵）に詳しく記載されているものを要約させていただきました。他の方の分は、御遺族や家族の方に問い合わせて作成しました。

※同じ五十四期生でも士官学校に進んだ人は昭和十五年九月四日卒業ですが、航空士官学校に進んだ人は約六ヶ月遅れて、昭和十六年三月二十八日の卒業になっています。

（写真提供 清水経民氏）

# ひさば壮丁そうていの会

千草 長 友 義 行

古老の話によると、明治六年（一八七三）一月、わが国に徴兵令が出され、ひさば（千草）の満二十歳に達した男児の壮行のために発足したもののらしい。

その頃、壮丁となって徴兵検査を受けることは、本人は言うまでもなく家族、親戚、地区民の誇りと喜びであり、「鎮会ちんかい祝ゆゑ」  
といって盛大な酒盛りをしたものです。

壮丁は、この責任を痛感して日頃心身を鍛え、悪い病気に感染しないように注意しました。

血気盛んなことですから、平田ひらた（当時の都城遊郭）にも行きたかったでしょうが、じっと我慢して身を清めていたのです。

この古い写真は、私の父義徳と臼杵武盛さんが除隊記念に母智丘神社（今の公園）で大正十二年に撮影したものです。私の父と武盛さんは大正十年徴集兵で六師団管下歩兵二十三聯隊（今の都城陸上自衛隊）で初年兵教育を受けています。

当時、岳下橋（西町）を渡ると急坂になっており、日曜外出

した兵隊さん達が、門限（午後十時）を気にしながら駆け登った地獄坂があります。

その頃の話ですが、自分の中隊（隊の組織）に門限に遅れそうな兵隊がいる時は、「門限ラッパ」のテンポをおそくしてゆっくり吹いたそうです。

もし、門限に遅れるようなことになると営倉入りと言って、二、三日の懲罰（禁錮刑）が待っていたそうです。

この程度のことだと思われる方もあると思いますが、この厳しさが軍紀（規律）を守っていたのでしよう。

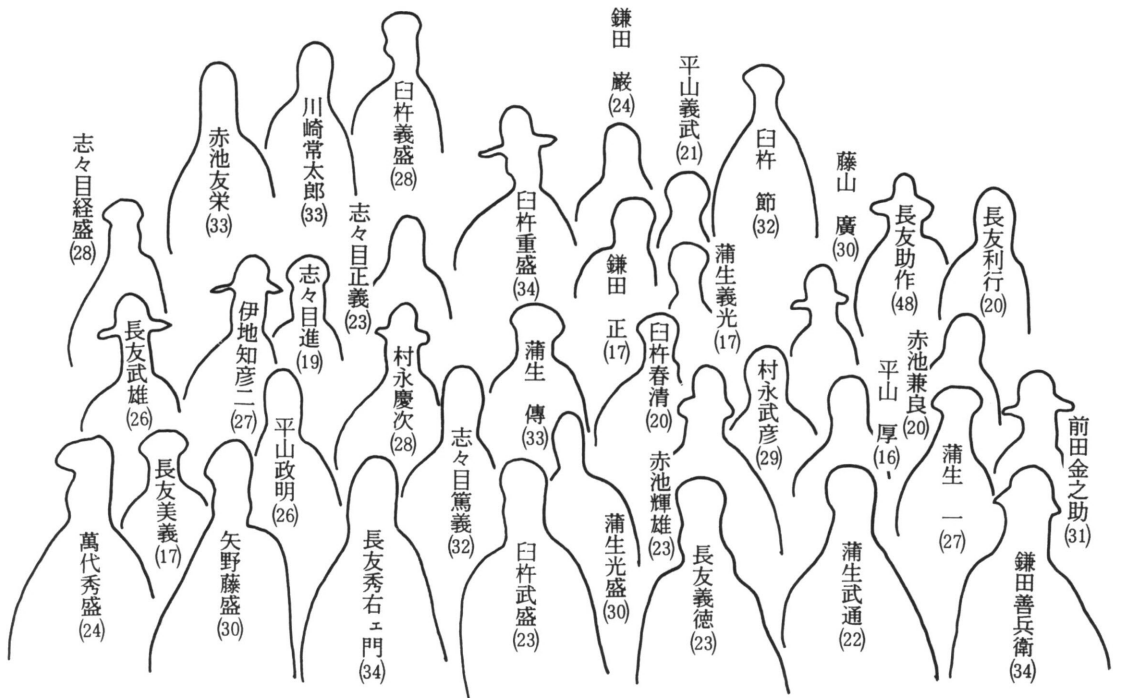
坂を登りきると、樹齢百年以上の松の並木が続き、練兵場では兵隊さん達の訓練を見ることができました。

写真にもどりますが、背景の拝殿や石碑、樹木等、現在とはだいぶ様変わりしていますね。

それにしても珍しい服装やいかめしい容姿を見ると、当時のひさば壮丁の盛んな意気込みが身にせまる様です。

最高齢は長友助作（義行の祖父）四十八歳、最も若い平山厚（国治さんの父）十八歳ですから、戦死とか病死によって現在は生存者は一人もありません。

終りに、このような貴重な写真をだいに保管された長友久二さんに厚くお礼を申しあげます。





# 終戦前後の米の供出をめぐる

宮崎市 高橋 辰男

(乙房出身)

## ◎ 学徒動員で強権発動の供出米の脱穀作業

戦況は熾烈を極め、国内は戦時総動員態勢の中で、食糧の生産供給は、老人や婦人の肩にかかっていた。

私達学生は、勉強どころではなく学徒動員で援農作業に従事することが多かった。昭和十九年十一月の頃は、毎朝の様に動員で庄内町役場に集っていた。農学校を初め中学校、商業学校、女学校の学生達である。

当時農業会の農業技手の方からその日の作業計画が示されて、学生達は援農作業の割当てを受け、各集落の指定された農家に向いて、農作業を手伝ったのである。

ある日のこと、農業技手の方が、「農学校の三年生は、特別の作業配当がある。」という話であった。待っていると「T集落のC農家が供出を渋っている。」「再三催促するが供出に応じない。」「米は田圃に稲小積のままである。」ということまでC農家の稲の脱穀作業が割当てられた。

農業技手の方の案内で現場に行ったが、C農家の人は不在だった。留守の家の作業小屋から足踏脱穀機を担ぎ出し、莖を敷いて脱穀作業の段取りが出来あがると、私達は、代わる代わる足踏脱穀機を全力で踏み、脱穀作業を一日中続けた。夕方には稲の山が出来たが、その籾を刈に入れて、農業会のトラックが運んで行くのを見送り、疲れ果てた体で家路に着いたのである。

今思うと、私達の動員作業で落した籾は、強権で発動された農家の供出米であったのであろう。

「戦争に勝つために」食糧増産は至上命題、供出米の割当を完遂することは農家の義務とされた。割当を達成しない農家は国賊とまでいわれ、強権発動によって、自家保有米も削られて供出をさせられたのである。

戦争末期の昭和十九年の頃は、食糧の危機的不足に直面して、国は食糧を一括して集め、国民に安定して公平に行き渡るように、食糧管理法の下、国家権力を行使せざるを得なかったのであろうと思うこの頃である。

## ◎ 戦後の「ジープ供出」と供出制度の変化

混乱した終戦の翌年、昭和二十一年一月から庄内町農業会に勤めることになった。

米の供出業務は、町、町農業会の最も重要な仕事であった。

農家に供出米割当量の出荷を済ませるように督促して巡回したり、区長会や農事実行組合長会を開いては、目標達成が厳しいので一層の努力をするように働きかける等、町の関係者は一体となって供出推進に取組んだのである。

この様に、供出の目標達成に懸命の努力がされても、頑固に供出を拒む農家、保有米不足を理由に供出をしない農家、割当方法の不公平を盾にとり供出を渋る農家等、様々な理由で一部の農家の協力が得られなかった。しかし、町の割当量が未達成になると、国や県は厳しく目標達成を要請してきた。補助奨励金の減額や停止、配給物資の減量や停止等の条件措置が取られることを私達は恐れた。一部の非協力農家の行為が、町民の生活に多大の影響を及ぼすことを憂慮して、あらゆる手段、方法を尽しての対策がとられたのである。

米の供出割当量を達成できない事態になると、県庁に常駐している「アメリカ民政部が、占領軍の強力な権力をバックに、強制供出」、いわゆる「ジープ供出」を実行する心配がされた。

占領軍が直接町役場に乗り込んで、供出督促をするという占領下の異様な農業行政を、大変恐れていた。米の供出割当量の達成は、占領下における最大の行政課題であったといえる。

そこで供出制度を円滑にすすめるために、公平と均衡のとれた個人別割当量を決める必要から、米の生産量を予測して、「文部省—厚生省—逓信省—海軍省」として算定することになった。予想収穫高を決める方法としては、一枚、一枚の田圃の地力を調べる必要があった。

町は、町一円の水田を対象に、水稻の収穫期に検見調査をすることにした。関之尾、川崎の奥から乙房、宮島の果てまで、一枚残らず反当基準の収量見積りがされたのである。

調査員は、集落から選ばれた代表で、見識、人望のある方々であった。公平を期する調査員の選出がもめたり、検見現場でのトラブルや、結果に対する異議の申し立ての処理等、事態が起った場合は、最終的に占領軍の命令で片付けられる例もあり、大変難しい仕事であった。

しかし今迄になかった地力の調査で、個人別に一筆毎の等級格付けがされ、以後の供出割当をする貴重な基礎資料ができたのである。

供出制度では、戦前、戦後一貫して農家の保有米が認められて、農家は喰い外れがないよう保障されていた。

自家保有量は、国の定めがあり、昭和二十一年産米の基準量は、年令別に「一歳〜七歳が二合」「八歳〜十五歳が三・五合」

「十六歳以上が四・六合」で一人平均は四合となっていた。一人一日四合は、年間に換算すると一石四斗六升（二一九kg）である。今日の国民一人当りの米の消費量六〇kg〜七〇kgに比べると誠に驚くような数字である。

これは、米と、米に換算した麦、いも、大豆、そば等雑穀の総合保有量で、みそ、しょうゆ等の加工原料も総て含まれていたのである。したがって、米の代替として、麦やいも、雑穀類の供出も認められていたのである。

主食になる米は三合足らずになるが、当時は、米、麦半半からいも等を混ぜた御飯に、みそ汁、漬物で腹を満たす主食偏重の食生活であったことを思い起すのである。

この様な状況の中で、農業者の意欲向上をねらった報奨物資の特別配給が行なわれた。供出を済ませた農家には、一般配給の外に、農機具、肥料、衣料、地下足袋、酒類、たばこ、雑貨類等の配給が行なわれたり、供出を割当以上に余分に出すと、超過供出奨励金が交付された。いわゆる「ムチ」と「アメ」を使った硬軟両様の手段がとられ、戦後、年の経過と共に、供出に対する考え方も変化した様であった。

#### ◎「ウンカ」の大発生で占領軍に駆虫油を嘆願

終戦後は、戦地からの復員、海外からの引揚者、都会から食糧不足を逃れて帰ってきた人等、町内は人口が激増した。

人々は腹を満たすために、食糧の自給を目指して、少しの土地でも耕して、食糧の確保に汗を流したのである。

戦時中から有機質肥料はろくに施さずに、作物を作り続け、土地は痩せ衰えていた。その地力を再生させるために、堆肥増産運動が展開され、田の畦、道路、川の堤防等の野草が刈り取られ、水草迄も堆肥材料に利用された。草刈りが競って行なわれたので、いつも町内は一斉清掃がされた後のような常態で、きれいな生産、生活環境であった。

食糧の増産を目指して、農事研究会、松田農友会等の研究グループが誕生し、学修会、実地研修、先進地視察等の活動が盛んに行なわれ、町内は農業生産に対する意欲が盛り上がりをみせていた。

昭和二十二年の米作は、農業者の熱心な生産活動の結果、順調な生育をしていたが、七月頃になって、稲の害虫「ウンカ」の大発生の兆しが現れた。「ウンカ」の駆除を怠ると、米の収穫が減収することは避けられないのである。

「ウンカ」の駆除は、水田に水を張り、石油を竹筒で作った

「油さし」に入れて、少しずつ水面に流し、油の張った水面に「ウンカ」を払い落して殺虫する方法が唯一の方法であった。この作業は朝の早い内に行うことが、効果をあげるのである。今の様に農薬で駆除する方法はなかったからである。

農家は、配給の手持ちの駆虫用の油を使い果し、自家用のなたね油、椿油等の効きそうな油迄も全部使って、精一杯の駆除に務めたが、「ウンカ」の発生は増大するばかり。一部の田圃には白く葉枯れが生ずる坪枯れ状態のところも出てきた。このままでは、米の収穫皆無の田圃も出そうな気配であった。

町では、米の供出は愚か、町民の保有米も確保することができない事態が起る心配がされる様になった。

そのため、「ウンカ」の駆除緊急対策について、検討、協議が再三重ねられた結果、最後の手段として、駆虫用石油の特別配給を県庁の中に設置されていた「アメリカ民政部」ハッチンソン長官に直訴することになったのである。

農業者を代表して、大村愛吉農業調整委員会長と、技術面の説明担当者として私の二人が宮崎市へ出向き、県農務課を經由してアメリカ民政部に行った。そして、庄内町内の「ウンカ」の異状発生、被害状況と防除の必要性、供出への影響等を説明し、駆除に必要な量の石油を、特別に配給されるように嘆願を

したのである。

民政部から「オーケー」のサインが出され、これでひと安心ということになったのである。

特別配給の駆除用石油は、ドラム缶数十本が油津港で引渡された。農業会の木炭トラックで何回かに分けて運ばれ、町内は、一斉に油流しの駆除作業が早朝に行なわれたのである。

その甲斐あって、「ウンカ」の被害は最少減に喰い止められ、昭和二十二年産米の供出も無事に、目標を達成することができたのである。



## ふるさと「庄内」

三股町 田上 順子

(東区出身 旧姓亀沢)

平田からの道を曲り、真直ぐに庄内の街へ向うコースに入りますと、いつも私はほっとしてその眺めに見入ります。眼前の景色の何と素晴らしいことか。豊かに田圃が拡がり、次第に高く展がる家並みは明るくみえ、その後には濃い緑の森、更に左手背景には、最も姿のよい角度で望まれる霧島連山が、町を抱くように連らなっています。昔は右手前方に、確か、熊原どんと、持永どんの白壁の土蔵が四つ、くっきりと並んでいるのが印象的で、それがまた何ともいえない趣きを醸し出していました。今は前の方に病院などが建って、この土蔵は見えなくなっていました。まいりましたが、それでも、これ等全体の眺めは、泰然と豊かで、いつも私を穏やかな気持ちに包んでくれました。私はこの入口から見る庄内の眺めがたまらなく好きです。というのも、庄内が私のふるさとだからでしょうか。

庄内にずっと住むようになったのは、昭和十九年からです。父のふる里、庄内には、その前も夏休みや、何かある都度帰省

していましたので、私にとっても馴染み深い土地でありました。その頃は、第二次世界大戦の戦況が大分深刻で、都会では食糧が不足し、東京空襲が囁かれるようになっていましたので、妹と私は一先ず、親から離れてこの庄内で生活することになりました。家には祖母と叔母が住んでいました。祖母も、当時は随分年寄のように感じていましたが、六十才代半ばだったようで、まだまだ元気でよく働いて、私共の面倒もよくみてくれました。当時は未だ殆どの家に囲炉裏があり、朝は、灰に埋めていた大きな火のトギをとり出し、これにベラ（小枝）を足して、背を丸めてふうふう吹きながら火を起こしていた祖母の姿が目につかびます。天井からは自在鍵が下り、いつもは鉄瓶を掛けていました。朝はつるのついた鍋をかけて、味噌汁を作っていました。また、用事のある人が来て、上り口に腰かけたりされますと、囲炉裏に小さなお鍋をかけて何か煮て、これに卵を入れた器に盛って出していました。お茶菓子の乏しい時代のさやかな祖母流のおもてなしだったのでしょう。大抵の家で鶏をかっていましたので、卵は勿論自家生産、行事の時は鶏をつぶして、これがあらゆる料理になりました。吸物・刺身・煮付け・すしの具等と、これで豪華な気分になったのです。

我家にも割に大きい鶏小屋がありました。時々戸を開けて出

してやると、鶏は庭といわず、土間といわず、悠々と闊歩して  
いました。或時、目の前を大きな雄鶏が、一羽めがけて突進し、  
けたたましく鳴いて逃げる鶏の首を羽毛を嘔み散らして押さえ  
てしまいました。あつという間の出来事に私は驚き、何とかし  
なければと焦りましたが怖くて何も出来ず、祖母の所に飛んで  
行きました。「早く離してやって、可哀そうよ」と言ったと思  
います。その時祖母は落着いて言ったものでした。

「よかつじゃつど、よか卵がとるいごつなつとじゃかいナ」

そのあと、私がどう思ったのか等ということは全く覚えていま  
せんが、その鶏のすさまじい光景と、この祖母の言葉は今もはっ  
きり覚えています。動物の習性は衝撃的でもあり、その言葉で、  
きつと全てを了解したのだろうと思います。女学校一年生とし  
ては未熟で、今思えばおかしい話です。そんな事もありました。

やはりその頃だったでしょう。鹿児島島の祖母が赤ん坊を連  
れて帰って来ました。私は赤ん坊をおぶってねんねを着て外  
に出ますと、近所の人達が中をのぞき込んで、「むじね」とか  
それぞれが、そんなことを言っただけでした。私も嬉しくて  
帰りますと、それらをまとめたつもりで、みんなが「よかおご  
ね」って言やったと言いました。すると祖母が「よかおごっ  
て言やったね。稚児じゃつとにね」と言いました。なあんだ、

こんな小さい子にも、やはり男女では違う称び方があったのか  
と、その時知りました。考えてみれば、男の子は、よかちごと  
いわれ、よかにせどんになり、とのじょ、おんじょ、という独  
特の表現があります。女の方は、よかおごじょからよめじょ、  
よかお方とか言います。それぞれどんな語源があるのだろうか  
興味を抱き調べてみますと、これらは全て、古語からの転訛で  
あることがわかりました。

#### 方言考

にせ（新背）、新しく兄となつた者

こにせ、少年、おせ、大人の意

## 思い出すままに

東区 今村 登

（八十九歳）

私の家は東区のホンゴ（※北郷）馬場にあります。明治の中  
頃私が生まれる前、父が山田のフイエ（※古江）から移住して  
来たそうです。フイエの本家は絶えて今はありません。

庄内小学校を卒業した私は殆どずっと農業をしていましたので、地元のことは詳しいつもりでしたが近頃は記憶も薄くなつて来ました。今日は主に大正から昭和の始めごろの事を思い出してみました。

私は大正六年に小学校を卒業しましたが、その頃の学校は現在の学校の所を上为学校、農協の所を下の学校と言っていました。一学年は一組四十人位で四組からなっていました。一組と二組は男子生徒、三組は女子生徒、四組は男女混合でした。その頃の庄内は人口が多く大変賑やかで学校も北諸県郡内で一番大きく生徒数も一番多かったと思います。

学校から帰ると暗くなるまでよく遊んだものでした。ハマ受け、ぎゅちゅ、タコ、竹トンボ、打ッゴマ、道具は全部自分で作って遊びました。正月などは道路を占領してハマ受けに興じたものでした。

私の男の同級生は東区だけで二十人もいましたが今は殆ど亡くなりました。

その頃の東区は東と西に分かれており、東を諏訪区、西を北郷区と言っていました。北郷馬場の入江商店の所から天神馬場に抜ける道は明治の終わり頃造られた道で、時の区長さん是有田武右衛門さんだったと記憶しています。東区公民館辺りま

では戸島どんの桑畑、その先は有田どんの桑畑だったと思います。この道が出来てカクン馬場から天神馬場まで真っすぐ通り抜けられるようになりました。

北郷馬場にはオサ

ンキン（※山久院）

の前に長峰製材所がありました。長峰ど

んには大きな棕の木が樹っていました。角の田中どんはオカベ

（※豆腐）と飴、それにオコシゴメを売っていました。オコシ

ゴメは一銭に二つ、飴は十でした。川崎どんは反物屋でした。

今の小学校の運動場に入る小さな道の角には満行どんがありござこざしたものを売っていました。この辺で大きな店は大浦ど

んで、精米所もしていましたが味噌、醤油、米、麦、塩、焼酎、

肥料等日用雑貨一通りは売っていました。

私の家の東側は金くそがたくさん出るところでしたが多分昔



現在のホンゴ馬場



鍛冶場があったのでしよう。

古くからあった家は地名を添えて呼ぶものでした。フゾボン（※宝蔵坊の）東条どん、ボノシタン（※坊の下）の）伝九郎さん、シュッ（※小路の）の山元どん坂元どん、下ンタン（※下の谷）の長峰どん、スワン（※諏訪の）秋永どん、カクン（※梶の）亀沢どん、坂元どん、ミヤッノ（※宮路の）阿久井どん、イケンカシタン（※池の頭の）ちよばがえ（※ちよばあさんが家）と言ったようなものでした。

天神馬場の菅原神社は明治の初め頃三島通庸公が志和池から学問の神様としてもって来られた神社ですが、この辺も大変賑やかなところで、大正の終わり頃は製糸工場が五軒もあったでしょう。か。長倉どん、長田どん、南崎どん、安藤どん、小さいところでは瀧山どん等がありました。女工さんたちが何十人もおり朝夕は大変な人通りでした。昼になるとそれぞれの工場から昼を告げる汽笛が鳴りたくさんの女工さんたちが一斉に出て来て食事に帰りました。山田や志和池方面からもたくさん働きに来ていたようです。

オサンキンの境内には西郷ユッサ（※戦）の記念碑などが建っていました。庄内からも多くの人がユッサに参加しましたが北郷馬場の戸島直蔵さんは十六歳で行かれたそうです。

今ゲートボール場になっている広場には相撲の土俵があり隅の方には招魂碑が立ってありました。土俵はそれ以前は参道の真ん中にありましたが人が死んだこともあって左のほうに移動したのですが今はもうありません。

招魂祭は大変賑やかでした。出席者には、竹の皮で包んだ煮しめが渡りました。奉納相撲もあり屋台も並ぶ程の人出で賑わいました。屋台には飴、オコシゴメ、キシシ、ニッキ玉、シンコダゴ、等売っていました。私達の祭りの小使いは一銭か二銭位のもので二銭ガネは一回り大きくてこれを貰うと嬉しいものでした。

納骨堂の所はオサンキンの墓と言ってたくさん古い墓石が立ち並んでいました。豊幡神社の後ろのほうには古い井戸がありました。これは昔ここに在った山久院と言うお寺の井戸だったと聞いています。

毎年三月十八日は馬頭観音のお祭りはテコシャンセンで盛大にやったものでした。農家には大体馬を二頭位ずつは養っていました。牛を養っている家もありましたが、百姓は牛馬と一体でした。苦勞をかけた牛馬の霊を供養すると共に、冬の間休んでいた牛馬が春と共に又元気で一生懸命働いてくれるように祈念するお祭りでもあるので春の祭りを「馬祈念」とも言っている。

ました。

東区の馬頭観音さまはミケン坂（※妙見坂）の上にあります  
が昔はトボイ（※外堀）の先のほうにありました。

どこのバトカンも高いところにありそこには大きな松ノ木が  
立っておりクヨンマツ（※供養の松）と言っていました。これ  
は死んだ牛馬を供養する為に植えられたものですが、何処から  
でも見えるので土地の目印になり、また通行人の道しるべとも  
なる重要な役割を果たしていました。古江のクヨも大きいもの  
でしたが是位川内のクヨは有名な所でした。

九月二十日の秋の彼岸は祖先の霊を供養する意味とこれから  
冬に入り火を焚くことが多くなるので火の用心をするため「火  
祈念」とも言っていました。

昔の百姓は日曜日にも祭日ありませんでしたが、彼岸の休み  
と盆と正月と四月二十三日の母智丘祭りの日だけは骨を休める  
ことができて楽しみなものでした。

今では皆よく温泉に遊びに出掛けますが、昔は温泉は病人だ  
けが行く所でした。病人を馬の背に乗せて家族が手綱を取り米、  
味噌等荷物を担いで歩いて行きました。霧島温泉に行く時は荒  
襲の茶屋で休んで行きました。現在の三叉路から少し御池寄り  
の所に道路を挟んで両側に茶屋がありました。あの辺には人家

も相当あり賑やかな所でした。高原の方からくる人達は御池の  
上のオケサの茶屋で休みました。牛の脛から御池に突き当たっ  
た所にありました。マツノハイ（※牧の原）の三叉路にも茶屋  
があり吉原さんが住んでいました。一尺方位のガラス蓋の箱が  
二、三置いてあり飴、下駄菓子、オコシゴメ等売っていまし  
た。マツノハイから連隊の所までは松並木でした。片側だけの  
並木で通行人の日よけの為に植えられたものです。

昔の道はザットしたものでした。大雨が降るとよく壊れるも  
のでした。年に何回かミツクリ（※道造りに）出たものです。  
この辺ではオミケンの坂が雨の度にやられました。特にナガシ  
（※梅雨）の時はひどいものでした。部落総出のミツクイで  
した。

昭和六年天神馬場で大火事がありました。菅原神社のそばの  
家から出火しました。その頃はどこの農家でも養蚕をしていま  
したが、養蚕室には暖房の為の小さな囲炉裏が切っており炭を  
焚いておりました。この炭火の上に養蚕のマブシが落ちて燃え  
上がったと言うことでした。火元からお菓子の山元どんの裏辺  
りまで類焼しました。

その頃の消防団は手突きポンプを車力に乗せて走って行くも  
のでした。川の水が近くにあれば良いですが、殆どの場合は井

## 夏祭り生花会

町区 山元 一光

戸の中にホースを突っ込んで汲み上げたものでした。ポンプ格納庫の所には火の見櫓が立っており上のほうに半鐘が釣ってありました。火事ときにはこれを叩いて皆に知らせたものですが、火事状況によって鐘の叩き方がいろいろありました。何れにしてもあれは大変な火事でした。

この辺の人達が作る畑は殆んどトボイ（※外堀）の外側のゴンデバイ（※権現原に）在りました。トボイ（※外堀）から内は城の敷地だったからでしょう。

トボイの堀は深い上にボラ層が厚くズルズル崩れてとてもここを越えられるものではありませんでした。よく考えて造つてあるものです。

トボイの所の一本杉のそばに番小屋がありました。何の番小屋だったかよく覚えませんがここから西の辺りをバンヤンオック（※番屋の奥）と呼んでいました。

昔百姓がゴンデバイで仕事をしている所に大和武尊命が通りました。熊襲が退治された事を聞くと百姓達は大喜びしてそこに有った農具を叩いて踊ったと言います。牛の引き手をなまき禰にしてコエジョケを叩いたり鋤きの金具を叩いたりしたのが現在の踊りのはじまりと聞いています。

今は亡き若い頃の姉、山元（西川）ニチエの写真ですが、オギョンサアに奉納の生花会だと思います。大正十五年七月二十四日の日付が入っています。その頃の娘さん達の髪型や服装等興味深いものがあります。場所はよくわかりませんが、たぶん、町区岩満さん宅ではないかと思えます。昔はテレビもありませんでしたので、夏祭りは子供達の楽しみのひとつで、それはにぎやかで盛んなものでした。

編集部取材。先生は都城市八幡町で生花や茶道教授をしておられた、椎野トミ先生（昭和五十六年没）でした。先生は西区の池田家の出でしたから、西区の夜学校（＝公会堂＝公民館。現在川辺典生さん宅あたりにあった。）や池田さん宅で稽古をしておりました。生花だけでなく、水引の組み方なども習いました。写真①は岩満さん宅の店頭をお借りして飾られたものです。写真②は昔の熊原別荘ではないかと思えますがはっきりしません。当時は髪型などにも凝ったりして若かったのに、今は

元氣に残っている人も少なくなっていました。

以上、現在も健在の目野ミチさん（旧姓白崎）・長倉キミさん（旧姓済陽）のお二人から聞いたことをまとめてみました。

写真①



写真②



# 私の若い頃

川崎 川崎 速雄

(八十九歳)

私の若い頃はただ働くばかりの毎日でした。焼酎を飲んだり夜話に行ったりする若者も中にはおりましたが、大体は皆よく働きました。私は高等科を卒業すると早速わが家の中心となつて農業に従事しました。田圃が一町五反位、畑が一町五反位ありましたのでこれをやつつけるにはとても遊んでなんかおられませんでした。

現在八十九歳、働きづくめの一生でしたが今も大変元気です。川崎では、男で一番の年配者が川崎清次さんで九十四歳、私が二番目です。八十四歳の時運動会で走りましたが一番ビリでした。それから走るのを止めました。諏訪神社の役員は長年やっていたましたが四年位前にやめました。兵隊にはカケメ(※体重)が足らずに行きませんでした。お陰様で長生きさせてもらっています。近ごろは足が弱くなりましたので電動三輪車でウゼケン(※大世間)をさるいて(※さ歩いて)います。

私は大正二年に庄内小学校に入学しました。男が四、五十人



現在の川崎集落

だったと思いますが川崎からは六人でした。もう誰も生きていません。学校には普通の着物にチャンチャンコを着て下駄を履いて行きました。はだしで来る子もたくさんいました。式のあるときは袴を付けて行きました。学校では国語、算術、理科を習いました。教科書を風呂敷にぐるぐる巻きにして腰に巻き付けて行つたものです。川崎橋を渡って西区の有島の下から田圃の縁を東に歩き、出口の清水どんの下に出て、それから上に上がつて庄内バス停の所を上に乗って山下どんの前を右

に折れて現在の公民館の駐車場の所、小林どんの長屋の前を通り、山元木賃宿の所を左に曲がって校門をくぐりました。安永川にかかる川崎橋は小さなもので大雨のたびに流れましたので学校には行けませんでした。橋の近くには外山ガ池があり学校帰りによく水浴びしたものでした。フナやハエンピンがたくさんおりました。都城の外山どんの池と言うことでした。タラノッの溜まりでもよく遊びました。ここにも魚がたくさんおりました。大きな樹が立っていましたが多分これが「たらの木」だったのでしょう。学校の遠足は母智丘が多かったように思います。遠足だからと言って特別な弁当を作ってもらった事は覚えておりません。あぶり握り飯とか、たかなの葉っぱ巻き握り飯に梅干し、味噌漬がおかずでした。母智丘では握り飯がよく転げ落ちるものでした。私も一回落としたが途中の藪に引っ掛かって止まり拾って食べた事がありました。

小学校正門脇のセンダンの木は同級生の野崎俊彦君と二人で六年の卒業記念に植えたものでしたが去年枯れてしまいました。話を聞いて見に行きましたが誠に残念でした。あれには涙が出ました。

高等科になりますともう一人前です。家の仕事で遊ぶ暇はありませんでした。朝は暗い中に起きて草切りに行き、馬一頭、

牛一頭を養ってから学校に行きました。

学校を卒業して二十二歳で結婚しました。その頃の結納金は三四位のもので牛一頭分が相場でした。父親が色々な役目をしており家の仕事がありませんでしたので、あらかの仕事は殆ど私一人でこなしました。朝の草切り、馬牛ヤシネが終わると、はだしのまま土間に腰掛けて朝飯を食いました。麦の飯にみそ汁と漬物をかっ込み直ぐ田圃に出ました。田植えの時等、一町五反も田ヨミをする足と皮は擦り切れて血が出ました。菜種の切り株等を踏み付けると飛び上がるほど痛いものでした。溝さらえの夫役もちよくちよく有りました。用水路も今のようにな立派なものではなく全くの素掘りでしたので大雨のたびに土手が壊れたり、取水口が詰まったりしてその都度皆で修理しました。その頃は、南前用水路や田圃の小さな溝にも魚がたくさんおりました。ブイジョケでガマをすくうとフナ、ハエ、アブラメ、ナマズ、ウナギ等が捕れました。捕った魚はイロリで干ばかして食べておりました。

私の家は養蚕もやっていました。八畳間を四つぶち抜いて養蚕室にしていました。私は田圃や畠仕事が一通り済んでから桑切りに行きました。大概は上ンハイに作っていましたが、足らない分は末吉の深川まで買いに行きました。夕方から二つ羽の

荷馬車を仕立てて、でこぼこ道を深川まで行き桑を切って荷馬車にうせて帰り着くのは夜中になるものでした。女達はそれから葉を摘んでケゴ養いです。夜中に二、三回食わせていましたのでおなごたちは殆ど寝る時間はありませんでした。ケゴが上があると都城の郡司製系の乾繭倉庫に納めました。が難儀した割りには安い値段で引き取られました。

風呂は五衛門風呂、親父が一番風呂で私が二番目、その次が子供達、女は最後と順番が決まっていました。晩飯には時には魚のブエン（※無塩）も渡りました。時たま都城からカタゲウイ（※担ぎ売り）のおばさんが来ておりました。オカベや干物、その他日用品は竹中どんで売っていました。オカベは一丁が二銭だったと思います。私は焼酎を飲みませんでしたので晩飯が終わると直ぐ寝ました。親父は焼酎好きで毎晩遅くまで飲んでいました。焼酎は財部の山元焼酎屋から樽で買って来てそれを壺に小出しして飲んでおりました。

私は寝込むような病気をしたことはありませんが庄内には山下医者どんがありました。その頃は、どこの家でもめったに医者にかかるものではなく殆どの病気は越中薬ですませるものでした。大きな薬の行李（こしり）を背中にかかる越中どんが年に一、二回薬を入れつに廻って来ました。産婆さんは待木どんと北郷ど

んがおられました。

百姓は普段は金はありませんでした。まとまった金が必要する時は米を売るか牛を売るかするものでした。私は南崎常太郎さんに信用があり保証人なしでよく金を貸して貰いました。あの頃は人の保証人になって家屋敷をなくする人が多かった様でした。

忙しい百姓も盆正月とバトカン（※馬頭観音）それに四月二十三日の母智丘の祭りの日は休みでした。特に母智丘の祭りには近郷近在の百姓達が豊作祈願と休養の為に押しかけたのでイモンコヲアルヨナ人出で賑わいました。ザンカン馬や芝居



日本のさくら名所100選（母智丘の桜）

や色々な演劇があり、あの参道には露店がギッシリ並びました。この露店の縄張りはこの前の年の十二月の除夜の鐘を合図に決められていたそうです。庄内の店が一番先に場所を取り、都城の店が二番目、最後に



他所から来たテキ屋の人達に場所があてがわれたと言う事でした。庄内の山元美賀喜さん、山元十兵衛さんとの間口が竿三本、山元末八さん小山田宇太郎さん、亀田亀助さんと畑中どんが竿二本分、後は竿一本ずつの割り当てだったそうです。三島通庸公の関係で庄内が優先されていたのでしよう。

春秋のバトカンも百姓にとって重要な祭りで、そして休養の一日でした。地区地区のバトカンでは終日テコシャンセンで飲み方がありおりました。

近頃は農業は機械化されて人手が要らなくなりましたが昔の百姓は何をするにも人手に頼っていましたので隣近所の付き合いは大切にしました。特に田植え、稲刈り等は時期を延ばすことが出来ませんでしたお互いにユ（※結い）を組んで協力し合いながら楽しくやったものです。勿論苦しかった事もありましたが、今ではもうすべて楽しい思い出の一つになっています。



## 大正の始め頃（その一）

町区 持 永 テル  
(八十六歳)

宇 野 ユキエ  
(八十三歳)

私の過ごした子供時代は大正の初め頃です。

もう八十年位前の事ですから記憶も薄くなりましたが思い出すままにお話します。

### ★通りの様子

その頃は養蚕が盛んで庄内の町にも糸を紡ぐ家が数軒ありました。座繰りと言っていました。南崎どん、瀧山どん、来住どん、有馬どん、がそんな仕事をしていました。お寺の下森どんは座繰り糸の仕上げをするところで揚げ場と言いましたが、福井県から来られた白崎さんが指導しておられました。その後、養蚕はどんどん盛んになり製糸工場もあちこち出来るようになりました。お寺の下で福田さんが銭湯を始めましたが、風呂の無い家は近所の家や親戚の家にもらい風呂に行くものでしたので利用者が少なかったでしょう。長くは続かなかったようです。

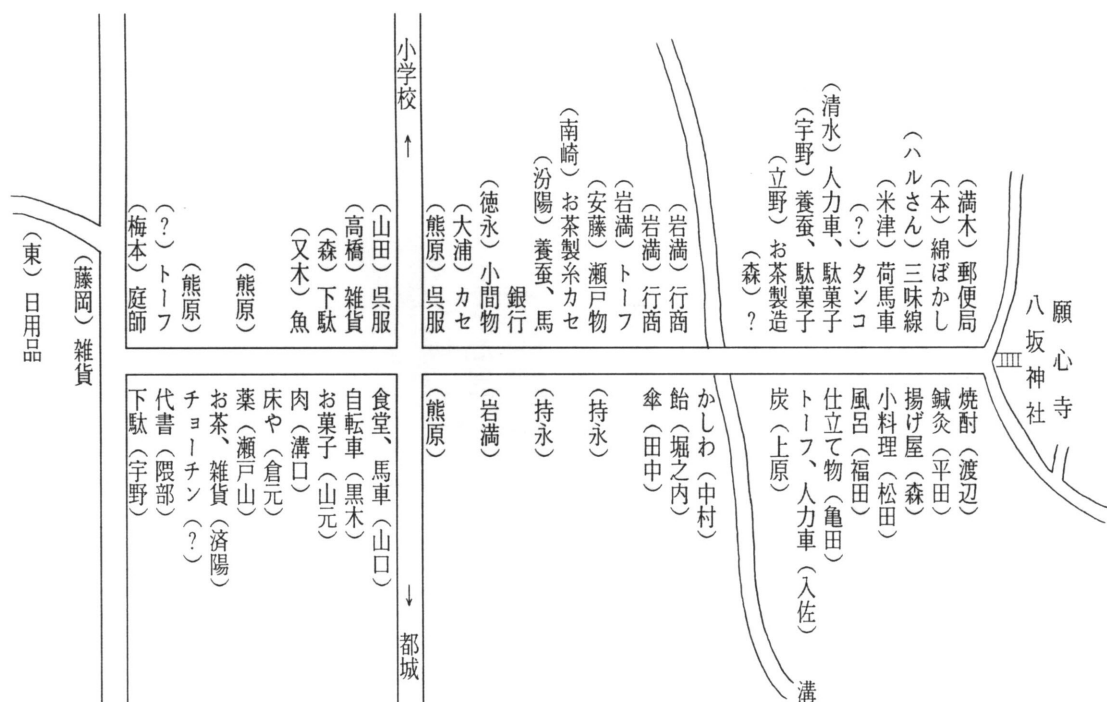
大島どんと入佐どんは人力車屋さんでした。人力車はお金持ちが利用するもので、一般の人達は病氣とか結婚式とか特別の時しか乗りませんでした。南崎どんは昔からお茶を製造販売していました。がそのほかに金釘も売っていました。そしてカセ屋どんと言ひまして座繰りで作られた絹糸を色々な色に染める仕事もしていました。汾陽どんは酢を作っていました。そして馬の商売もしておられたよう。で沢山の馬がいました。

この通りは明治二年に三島通庸公が庄内に來られた時鹿兒



現在の三島通り  
(正面突き当りが願心寺)

島や都城から商人を招いて創られた商店街でお寺の方から向町、中町、先の町と呼んでいました。創立当時は四軒長屋がずーっと軒を連ねて大変賑わったと言うことです。私たちの子供時代もまだあちこちに四軒長屋が残っ



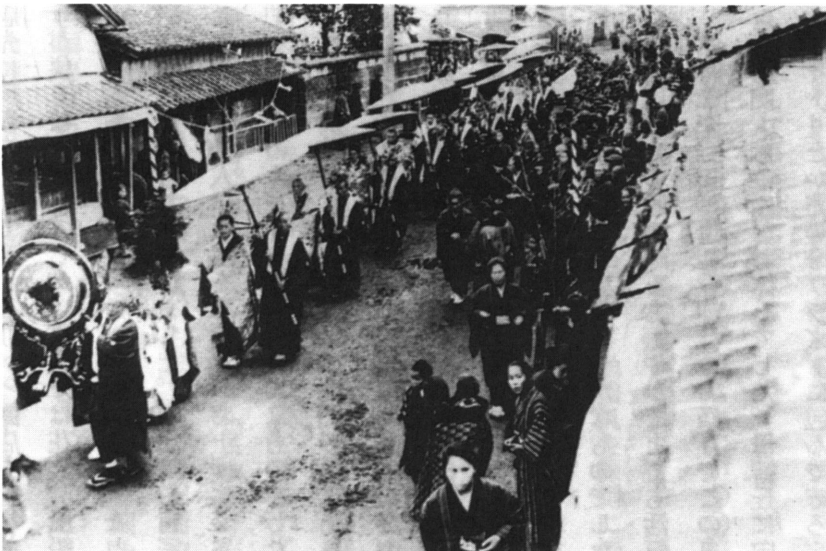
大正初期の三島通り

ておりました。商店街はお寺の所から西のほうに真っすぐ庄内バス停留所の所あたりまででした。現在の宮竹どんから西側はあまり人家はありませんでした。この田圃には時たま芝居小屋が掛かったりしておりました。子虎丸一座が来て一心太助をやったことを覚えています。また映画が掛かることもありました。映画は学校の庭でもありました。現在の霧島街道が出来たのはずーっと後のことです。多少の記憶違いや思い込みもあると思いますがその頃の商店街を思い出してみます。(別図)

#### ★通りのにぎわい

庄内に願心寺が出来たのは明治の十一年で現在の本堂が完成したのが明治四十二年と聞いています。庄内の町はお寺さんのお陰で賑わい発展したと言っても言い過ぎではないと思います。私たちの記憶でもお寺の行事がある毎に、庄内は勿論西岳、財部、山田、志和池、高崎方面から沢山の門徒の人達が泊まりがけで説教聞きに訪れ、通りには露店も出て大変な賑わいでした。山田呉服店や熊原呉服店は店先きを色々な着物で華々しく飾り付けて大変きれいでした。

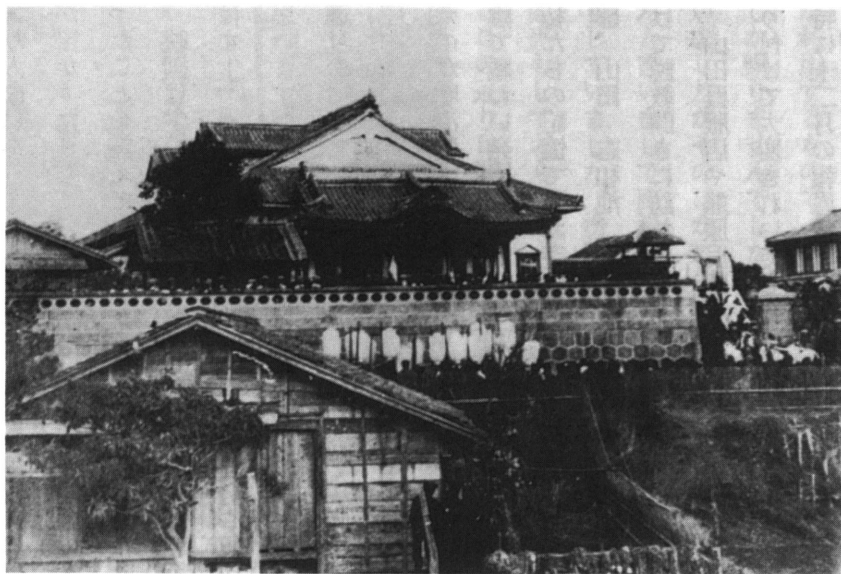
特に十二月の報恩講は五日間も続きお金やお米を布施した門徒のオトキ(仏様から戴くご飯)を戴くための長い行列が出来ました。私たち近くの門徒はお寺の加勢で大わらわでした。加



大正4年12月18日 開基住職、真道院

釈彰然法師の葬列が門を出発するところ。

当時は、本堂正面に石門があった。本堂も屋根の両側に夫々2つの4棟の室が設けられ、四天王と称し、平屋根式寺院建築の単調さを防いでいたが、大正8年撤廃された。



大正9年11月 本門落慶法要のお練り風景。  
当時の町並み、風俗がうかがえる。

(願心寺資料)

勢人たちは重箱をもってオトキを貰って帰るものでした。

春秋の彼岸会、花祭りも賑やかなものでした。通りの商店は店先に戸板を出して商品を並べ、露店も軒を並べましたので通りが狭くなる感じでした。露店では花火、風船、風車、等の子供のおもちゃや飴、オコシゴメ、お菓子、それに日用雑貨、小間物などがぎっしり並びました。報恩講を自宅にする家もありお参りに来た人には餅を二個ずつお上げするものでした。

八坂神社のオギオン祭りも盛んなものでした。八坂神社は私たちの子供時分は現在のお寺の山門の所にありました。大正八年に現在の山門建設が始まり現在地に移転されたものです。

お祭りは町を挙げて盛大に行われ、それぞれの班から踊りや寸劇など競争で出しました。ヤマが三つも出ました。ヤマに乗る子供は水色の着物に顔を真っ白に塗って髪にはかんざしを差してもらい精一杯の装いで華やかなものでした。露店も沢山並びお店屋さんの呼び込みも賑やかでとても活気がありました。

四月二十三日は母智丘神社のお祭りでこの日ばかりはお百姓さんも商人もみんなお休みでした。母智丘に向かう大勢の人達がニワトリとか卵等をワラズトに包んでぞろぞろ通って行きました。町の人達はこの様子を「銀座ンゴツヒトドオイガウカ」と言っていました。

(次号へつづく)

# 懷古

宮崎市 井上 カツ

(東区 旧姓 龜沢)

今は昔、幾十年もの遠い遠い小学校時代。

新入学早々の事でした。算術の時間、数字の十から零<sup>ゼロ</sup>までを逆に言えた者は外に出てもよいことになり、一人寂しい思いをして遊んだ忘れ得ぬ事。

三、四年生の頃の休み時間、私達女の子の足元めがけて、男の子生徒が数人、庭箒を振り廻して邪魔に入るので、キャアキャアハアハア言いながら逃げ廻っておりまして。時々男の先生の「コラーッ」という大声がかかると、今度は男の子が蜘蛛<sup>く</sup>の子を散らすように逃げ去って行きました。それでも誰一人として轉んだりして怪我することも無かったように思います。

鞆、雨傘、下駄かくし、足洗いの水はひっかけるし e・t・c……これも日常茶飯事の憎めない悪戯だったように思います。

学校がえりには、先き廻りされての通せんぼ、ときどきは足元に小石が飛んできたり、ほんとに危ない思いも致しました。母や兄に申しても唯<sup>ただ</sup>笑って取りあげてはくれませんでした。

入学から卒業まで男女学級だったばかりに心身共に鍛え(？)られた様な氣も致します。でも現代のいじめとは違い、ほんとに他愛ないものだったように感じられます。

又こんな思い出も。

全校朝礼での講話でした。或る先生が○○部落を夜通っていると、毎晩のように本を読む声が聞こえてくる、云々……。それからというもの、わざわざ勉強机を縁側に持ち出して、兄妹競って大声で本読みを始めたものでした。たまたま外出先から帰ってきた父に「北郷馬場」まで聞こえていたと言われ、益々声はりあげていたのを懐かしく思いだします。今考えてみると、果たして先生方は各部落を毎晩廻ってらしたのかしら？と人知れず苦笑してしまいます。(これもその時代のメリットある教育の一つだったのかも。)その後、縁あって母校庄内小へ教職として勤務。口さがない先生に「名コンビ!!毎朝仲よく連れ立って」とささやかれながら、二人の姪と通ったあの道、この道、過ぎ去った古き良き時代<sup>◎◎◎◎◎</sup>をしみじみと懐かしんでる今日此の頃ではあります。

いただきし 恩給をもて 細々と

七十の坂を 越えんとぞ思う

# 追憶

鷹尾町 岩佐 フヂ

(千草出身)

庄内小の良さがわかりますか。両側の石垣のある小さな坂に登ったところに高い石の門があり、右手にいちいかしの大木が高く高くたくましく枝を張ってみんなを見守っています。また、記念碑とうまく調和して庄内小の雰囲気盛り上げています。

私たちは、「お軍神」と呼んで、清潔な場として大切にしておりました。今も時々通る度に立ち止まってジーンと見上げますが、永い間の風雪に耐えて、深い歴史を物語る親しみと温かさを感じます。校門とその周辺は、庄内小のある限り、いつまでもいつまでもこのままであって欲しいと願います。

私の母校も庄内小です。昭和二年三月、六年生を卒業しました。九年四月から二十四年三月まで十六年間庄内小に勤めましたので、町内の多くの方々に大変お世話になりました。戦前、戦中、戦後とずーっと学校の近くに住んでいましたから、忘れられない思い出がたくさんあります。

まず、戦前には、先生方が四十一、二名いらっしゃいました。

校舎は東西に長くて、前後、南北にかなり広い敷地にありました。運動場は校舎の北側と南側にあるのを、上の運動場と呼び、現在の農協諸施設のある所一帯が下の運動場といつてかなり広く芝生が一面に張ってありました。

昭和十一年、立派な講堂と、それにつづいて二階建ての校舎と特別室（理科室・作法室・家事実習室）ができました。いずれも木造建築で、講堂の丸い大きな柱は自慢のもので、九州でも珍しい講堂だとか、あの祝典の時、遠来の来賓の方々が賞讃されたのを記憶しております。

昭和十六年、全国に米の配給制が実施されたのは四月からでした。配給日には袋や空缶を持って、配給手帳をもって買いに行きました。農家でも、割当てで供出する量が決まるので良い米は供出して、悪い米は自分の家で使いますから早くなくなって、配給を申し出る人もありました。

次は、木炭が配給制になりました。

日本軍がハワイを奇襲攻撃したので、太平洋に戦線が移ったのです。

昭和十七年には、衣料のキップ制が実施されました。綿糸や綿織物ができなくなったのです。着る物に対して大変きゅうくつな思いを致しました。この頃から男の先生方は、カーキ色の

詰襟を召されるようになり、背広は祝祭日の時に着ておられました。女の先生はモンペを着ました。絶対に新しい布など買えませんので、「これは、おとうさんの着物だったの。」「これは、おばあさんのひとえだったのよ。」といって、小柄な木綿の紺など愛用されていました。

つぎは、塩、みそ、醤油、さとう、肉、魚、マッチ、石鹼など配給制になり、だんだん戦争のひどいことが台所までおしよせて参りました。だんだん後退してしまふ日本軍でした。日本本土の空襲もやってまいりました。

昭和十八年には、配給米が二分つきになって、黒いお米になりました。体の弱い老人と小さな子供をかかえていた私はその配給米を臼の中でキネを使い、コッソ、コッソと長くついたものでした。ヌカがたくさん出るので、ミを左右、上下に動かして取り除かねばなりません。この事に相当時間を費やしてしまうのでした。

ごはんには、いつもおいもを入れたり、あわを入れたり、かぼちゃを入れたりしておかゆにしていました。また、代用食と言って、ごはんの代わりに何かを作らなければ一月分の配給量では足りないことばかりでした。

四月に連合艦隊司令長官「山本五十六大将」が戦死されたこ

と、戦艦大和の轟沈の報せに、今まで張り切っていた国民は、大きなショックを受けました。

この頃から、各家に用意された防空壕を使うことが多くなりました。小さな畑の一隅に自分たちで掘った壕は大人が中腰にできる高さに、畳が一枚だけ敷ける広さ。これを掘るにも相当な労力でした。夕食時に警報があったり、雨の日など全くないやな気持ちでこりごりしてしまいました。

召集令状があの人にもこの人にもと言うので、出征される時は日の丸の小旗を打ち振って牧の原の坂の上（今、南崎茶園）までお見送りしました。海軍の方は谷頭の駅まで見送りでした。こうして働き盛りの人たちがだんだん少なくなっていくのですから留守家庭は大変なことでした。

田植えの頃は五、六年生以上、グループを作って助勢にできました。どろんこになって馴れない労働に終日田植えをして、地区ごとに助勢しなければなりませんでした。

秋の取り入れの時もいろいろな奉仕がありました。脱穀機をゴトンゴトンこぎながら稲落とし、わらこづみの手伝い等、その頃の子供達の勤労ぶりは、分かっていただけなのでしょう。

「欲しがりません。勝つまでは」を合言葉に苦しいことに耐えなければなりませんでした。



昭和十九年には、本土空襲のニュースも多くなり、防空頭巾やモンペも離せませんでした。勤労動員という制度によって働ける人は皆働きました。私は学校の勤めに励みながら、家では不自由をものともせず、日曜日ごとに地域の奉仕作業に出ました。大倉田方面の防空壕掘の作業や、和田原（今の西小地区）や、野々美谷（丸野小周辺）の広野に臨時にできる飛行場の滑走路作りもすべて軍隊の指図によって、モッコ持ちしたり、地ならし作業でくたくたでした。

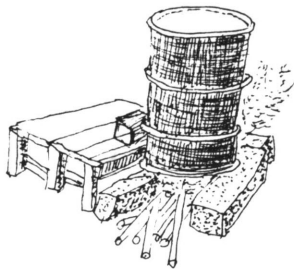
一億一心ノ 戦場や軍需工場で働く人々のことを思い、苦しいことにも自分を鞭打っていました。

とうとう庄内小も全校舎を軍隊に解放されることになり、たちまち兵舎に早変わりしました。子供達は地区ごとに疎開して、公民館が学習の場所になりました。防空頭巾をすっかり肩に負ってそれぞれ出勤して行かれた先生方の後姿が今もなお臉に焼き付いています。だんだん食生活は乏しくなる一方でした。配給米も月ごとに、二十日分とか十五日分とか減らされるのですから…。

空き地の利用と言って、空き地のないように、いもやかぼちゃの植え込みがすすめられますが、労働不足でなかなか大変でした。学校でも北側の運動場を耕してからいもが植え付けられま

したが大した実りもないのです。

昼も夜も緊張緊張の連続です。夜は灯火管制と言って、電灯に黒い布を被せたり、余分な明りを消して光が外部に漏れないようにするのです。警戒警報、空襲警報の合図で防空頭巾をすっぽり被って避難しました。老人や子供の世話が大変でした。戦死者の公報がつぎつぎにはいるようになりました。その度に、喪章をつけて、遺骨迎えを致しました。（次号へつづく）



# 私の子供のころ

宮崎 宮島 忠

(宮島出身)

私の子供の頃は良く遊び回ったし、良く家の手伝いもさせられたし、楽しいことはあまり思い出せない。

私は、昭和六年四月に庄内尋常高等小学校に入学した。春四月新しい紺の着物を着て、母親に連れられて学校にいったことを覚えていいる。なぜそんなことを言えば、余程新しい着物を着たことがうれしかったのだろう。その頃、みんな何を着ていたか定かでないが洋服か着物、はき物はズックか下駄または、草履それに裸足であったと思う。その頃よく雪が降り、その翌朝は真っ白く一面銀世界になっていた。そこを下駄を履いて登校していた。下駄で雪の上を歩くとすぐ下駄の歯の間に雪がつまり、コロコロとこらんで歩けない。それを木ぎれで落としたがら学校にたどり着いた記憶がある。そんな時は宮島から学校まではいっそう遠いなあと感じた。

昭和十年一月都城、宮崎方面で陸軍特別大演習があり、都城中学校は大本営になった。そして、都城飛行場で観兵式が行わ

れた。何年生以上だったか覚えてはいないがわれわれもそれを見学することになり、夜中に学校に集合し夜行軍で都城飛行場に着き、飛行場脇の畑の中で夜明けを待った。その日は晴天で寒い日であった。夜明けの朝は格別に冷え込んでぶるぶる震え、足の冷たさに足踏みしながら早く太陽が昇ることを願って待っていた。明るくなってみると、畑は一面霜柱が立っていた。何時間か経ってラッパの響きと共に観兵式が始まった。天皇陛下が白い馬に乗馬され兵隊が整列している前をゆっくりと閲兵されるのを遠い所から眺めていた。その姿は子供心にも神々しい印象を与えたことを記憶している。

小学校二、三年か三、四年かはつきりしないが、八木先生が担任になられた。八木先生は陸上競技の先生であった。その先生から、「お前も陸上競技の練習をしろ。」と言われて練習することになった。それまで運動会で入賞することもなかったが、五年生頃から入賞するようになり、短距離走(百米)では学校内で一位、二位を争うようになった。それだけに五年、六年の頃の練習は厳しかった。ほとんど毎日放課後から夕方まで跳んだり投げたり、走ったりして最後は目の前が真っ黒になり倒れそうになるまで走った。余り走り方が得意でなかった私が庄内小学校の代表選手になれたのは、その練習のおかげだと思って

いる。

その頃、都城の中学校、商業学校、小林中学校ではその学校の体育祭に合わせて、近郊小学校の対抗陸上競技会を開催していた。それに庄内小学校の陸上競技部も参加した。

都城商業学校では、私は百米走と四百米リレーに出た。そして予選、決勝と四回走った。何位だったか覚えていないが志布志小学校が速かったことを覚えている。

小林中学校では、百米走と四百米リレーであった。私は百米走ではスタートを失敗し入賞できなかったが、四百米リレーでは第三走を走りトップになり、そのまま庄内小チームが優勝した。翌朝全校朝礼で優勝カップを持って優勝の紹介があった。

都城中学校では、四百米か八百米か定かでないがリレーだけであった。庄内小チームは第三走者でトップに立ったがラストを走った私が、大王小学校に抜かれて第二位になっていまだに残念だった事を思い出す。大王小学校の選手たちが神社に優勝旗を持って参拝している姿が目に見えてくる。

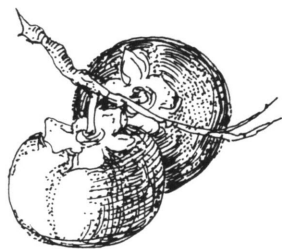
今の宮崎駅近くの県営陸上競技場は確か昭和十年の陸軍特別大演習、天皇陛下の行幸を記念して作られ、昭和十一年に完成したと思う。その競技場開きに合わせて県下市郡対抗の競技会が秋頃開かれた。庄内小学校から郡代表として、私と坂元正勝

君と高等科の有田さんの三人が宮崎まで行くことになった。引率は我々の担任の先生であった。

宮崎駅で降りて見て、道の広さにびっくりした。今の高千穂通りと同じような道幅で真っ直ぐ伸びていて確か青桐の街路樹であったと思う。街もただ広く異国にきたような思いであった。その夜は高千穂通りの旅館に一泊し、翌日陸上競技場に行った。周囲は今の野球場もなく、建物もなく、良く見渡すことができた。宮崎は広い所だなと思った。

私は昭和十二年三月小学校尋常科を卒業した。その後、高等科に入ったが病気をしたりして運動はぶつり止めた。

今、私は宮崎に在住しているがその競技場を見るたびに、ここで俺も走ったんだと懐かしく思っているところである。その競技場の存廃が現在問題になっている。廃止されれば一つの思い出が消え、淋しくなることであろう。



# 関之尾の滝の思い出

平塚町 山 元 正三郎

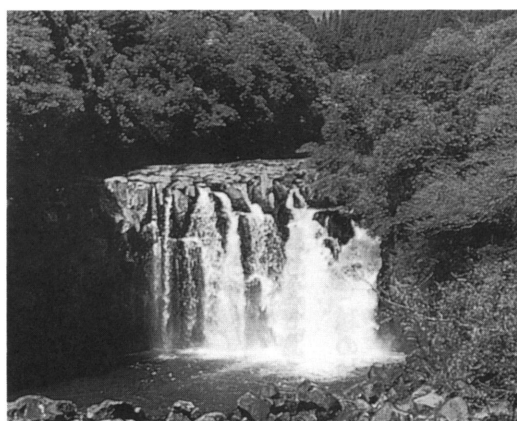
(町区出身)

私の父は（山元来八昭和二十一年没）昭和十七年頃までお菓子や果物などを商っており、関之尾の滝の滝壺の上で茶店も出していた。

私の子供の頃、都城駅から関之尾の滝まで有馬自動車の乗り合いバスが走っており、その名はキコーガン（亀甲岩）で関之尾の滝への唯一の足であった。なぜか私達はキコーガンを自分の家のバスみたいにいづでもどこでも車を止めてもらい都城へ関之尾へ。バスの中は遊び場でもあった。関之尾の滝の思い出は限らないけれど、二、三紹介してみよう。

小学校の頃は学校が終るとキコーガンに飛び乗り関之尾へ。日曜や休日などは朝から関之尾の滝で遊んでいた。その頃関之尾の滝は都城地方で唯一の観光地でもあり、春から初冬まで観光客が多かった。岩から岩へと飛びうつり、中ノ島や滝壺の上に良く店の品物などをお客の所へ運んでいった。

楽しみの一つに、土・日のお客の多い時などのお客の案内が



日本の滝100選（関之尾滝）

あった。二、三人だったり、時には七、八人だったり、上の公園の坂元源兵衛翁の陶像をちよつと降りた所に熊襲穴と言って巾一メートル、高さ一・五メートルぐらいの洞穴があり、下の方へ約七・八メートル位下った所がちよつと広くなっていて、何の変哲もない所であったが熊襲穴に連れて行ってくれと頼まれて、ローソクとマッチを片手に良く案内した。また源兵衛翁のところを奥の方へしばらく行くと右手に直径三・四十メートル、深さ十五メートル位だったろうか、播り鉢状の谷があり、そこにはいくら大雨が降っても底に水が溜まらないので不思議洞と名が付いたと説明する。（前田用水路との関係があったのだそうだ）そこからもつ

と奥の方へ行くと前方がぐつと開けて、真正面に高千穂の峰が一望でき、そこを「拝岳台でございます」と説明していた。お客はそれで満足してか、五銭、時には十銭玉をにぎらせてくれた。つまりが

イド料である。お客の多い時などは、一日に四、五回も案内した事もあった。最近上ってみたけれど不思議洞もなくなり、拝岳台も周囲の木も大きくなり何も見えなかった。

夏の楽しみの一つに「かわらげ」拾いがある。（かわらげとは直径が七センチ位、厚さ三ミリ位の素焼きの皿で当時十銭に五枚だった）そのかわらげを滝の上の方から滝壺めがけて投げ、うまく風に乗ると今のつり橋の向うまで飛んで行って岩に当たって碎けるので、それがおもしろくて我も我もとよく売れた。女性や子供の投げたものは余り飛ばず、割れずに滝壺の水の中に落ちて沈んでしまうのだ。翌日水にもぐってそれを拾い又売るのである。

秋は滝壺の上の雑木の根元にシメジやカッタケなどが良く生えた。小さい芽を見つけると、そおと木の葉をかけて大きくなるまで隠しておくのだ。夜、雨が降ると大きくなるのが楽しみでわくわくして見に行ったものだ。秋にもう一つ、不思議洞のアケビ取り、山芋掘りがあった。その頃は川の水もきれいで濾過して飲水に使っていた。

関之尾の滝の茶店もキコガンも戦争の激化で共に消えてしまったが、私の関之尾の滝の思い出は今も消えずにはっきりと残っている。

## あの頃

祝吉町 宮田 安子

（東区出身）

思いつくままの獨り言である。

前にも書いたけれど、私の故里は勿論庄内であるが、生れ故郷ではない。庄内では、私の赤ちゃん時代を誰も知らない。私が泣き虫だった事も、結構可愛らしかったらしい事も。幼馴染みがない。小学校の、中学校の同窓会も、クラス会もない。いづくしである。と云っても、之れは既成事実、どうにもならない事である。どうにもならないから困るのである。

もう一つに言葉がある。私は戦後五十年、方言とは縁がなかったかの如くである。従弟の田崎直哉（故人）は、外語学校出て語学力抜群であった故か、引揚後一、二ヶ月で羨ましい程上手に方言をつかっていた。私も大いに頑張ってみたが、肝心の所がどうにもならなかった。そんな或日、或人から云われた言葉は正に致命的であった。

「アンタの言葉はヘンだよ。大人に、子供につかう言葉をしゃべったり、アンタはアンタの言葉を使った方がいいよ。」

それ以来、私は私の言葉で五十年経ってしまった。もう故人だから云えるけれど、芽生えを踏んづけられた様な、思えばニガイ言葉であった。

「庄内」で庄内の爆撃の記事を読む。その凄絶さに、その体験のない私は一寸ウシロメタイ様な気さえする。私の戦争体験は、むしろ、その後の引揚の時、またその後のもろもろの事にこそ思っているが、故人となった父母に見れば外地で築いた總てを失った悲しみは、私の想像外であったと思う。完全な形の儘の我が家との訣別を父は只ジーンと無言であった。その時の父母の思いをかみしめる様に、親の年に近づいた今にして、しみじみ思ってみるのである。

私は大家族的生活の経験を二回もった。一つは諏訪原の秋永の叔父叔母、一つは安永馬場の岩佐徳男、藤子叔父叔母に支えられての事だ。秋永家では母屋の炊事係は私であった。秋永家の保有米を頂いたわけであるが、育ち盛りが多かったので大変であった。その上、田崎の叔父の至上命令で、私は十二人分の家計簿ならぬ総理府統計の様な記録を必死でつけた。何しろ、野菜、味噌、正油、すべて換算して書き込むのであるから、大ごとであった。朝食はお米の上に大箸一杯のカライモを入れて炊く。夕食はブカブカの雑炊であった。一杯目は竈から直接に

ついで運んだ。勿論一滴残さずつき分けた。總勢十二人、あけてもくれても、皆一生懸命であった。その中、半数はもう故人である。安永馬場の岩佐家では、モト祖母と徳男叔父の温顔が今も目にやきついている。思えば藤子叔母には大変御世話のかけた。此所では配給生活であったが、オミケンにカライモを植えた。引揚の時のリュックを背負って、国子姉と二人で掘ってかえって、皆でふかして食べた。おいしかった。糠まじりのパンを子供達は楽しそうに食べた。父がかなしそうに涙ぐんだ。配給の黍はピンクの実で、炊きたては小豆の匂いがした。西岳から、いとこの巨さんが来て「赤飯のごたるね。」と云って、持参の大きな握飯を代りにふるまってくれた。子供達には待たれる客であった。子供達と云っても、もう皆五十歳を過ぎたわけである。

家族同志が真剣にぶつかり合ってすごした思い出は鮮烈な程なつかしい。月日が世代を変えて行くのは当り前の事であるが、それ故にこそ、今こそ私の声も残しておきたい。そんな思いにかられる今日此の頃である。

# から芋拾い

宮崎市 牧ノ瀬 正雄

(西区出身)

確か小学五年生のころだったと思う。宮下君の母上が私の家に来られ「秀隆を、から芋拾いに連れて行ってもらえないか」と私への依頼であった。

彼とあまり遊んだことはなかったが、本人に確かめたところ間違いはなかった。土曜日の午後一斗袋を抱えて「かんのん原」の祖父の畑に行き、他の友達三人と一緒にから芋拾いを始めた。運動靴の彼も裸足になり、くまなく採った後の畝をあせりながら拾い集め、二時間余りで袋一杯になった。帰るころは陽も高千穂の峰に傾き、木枯らしも一段と吹きかなり寒かった。

帰りに町区の「吉田精肉店」に持って行き、彼が二銭、私が三銭の収穫であった。帰りが遅くなったので母上は私の家に迎えにきておられた。

彼の両親は、鹿児島出身の方で何一つ不自由のない医者の子に：何かを学ばせたい：という明治の母の気質で、敢えていも拾いを経験させてみたかったのだろう。

彼は父上のあとを継いで医者となり、町民の医療業務に尽力され、私の母も老いて一人暮らしのころ、主治医的存在として大変お世話になった。

医者になって何回か会う機会があったが、から芋拾いが彼の人生にどのように影響したか、聞くよしもなく、若くして彼は他界された。

今ごろ、から芋を拾いに行く子どもがいるだろうか？これも少年の日の懐かしい思い出の一つである。





# スポーツ王国、庄内

町区 徳 永 幸 男

この写真は、大正十一年か十二年頃と思われます。前列中央の方が第十二代庄内村長 池田募さんのようです。末原利夫さん、南崎福一さん、万代千代吉さん、臼杵武盛さん、新穂先生も居られます。当時は庄内はスポーツ王国で牛肉、牛乳、玉子等の差入れが盛んで強化合宿がされて居たと聞いて居ります。この写真は郡大会か県大会か良く判りませんが、何しろ庄内が全種目（トラック、フィールド、短・中・長距離）の優勝をした時の写真であると聞いて居ります。

最上段、左から二番目が私の父 徳永岩男です。当時四〇〇m（五十二秒）の県記録保持者であったそうです。優勝旗を手にして居ります。スタートは下手で出遅れますが、その後のスピードはすばらしく、すぐにトップに出て他を引はなし、応援者を喜ばせていたそうであります。

乙房の丸目親則先生（体操の先生）が指導されていたそうです。



※この写真を見てお気付きの方がありましたら教えてください。

# のぼり太鼓でダルマ行列

西区 有島義武

大正十三年五月、町制施行祝賀大会の当日は、庄内村全地区から手踊り、仮装行列などの競演で終日賑わいました。私たち西区青年団では、のぼり太鼓でダルマ行列をおこない、特異な催し物として喝采を受けたのを憶えています。

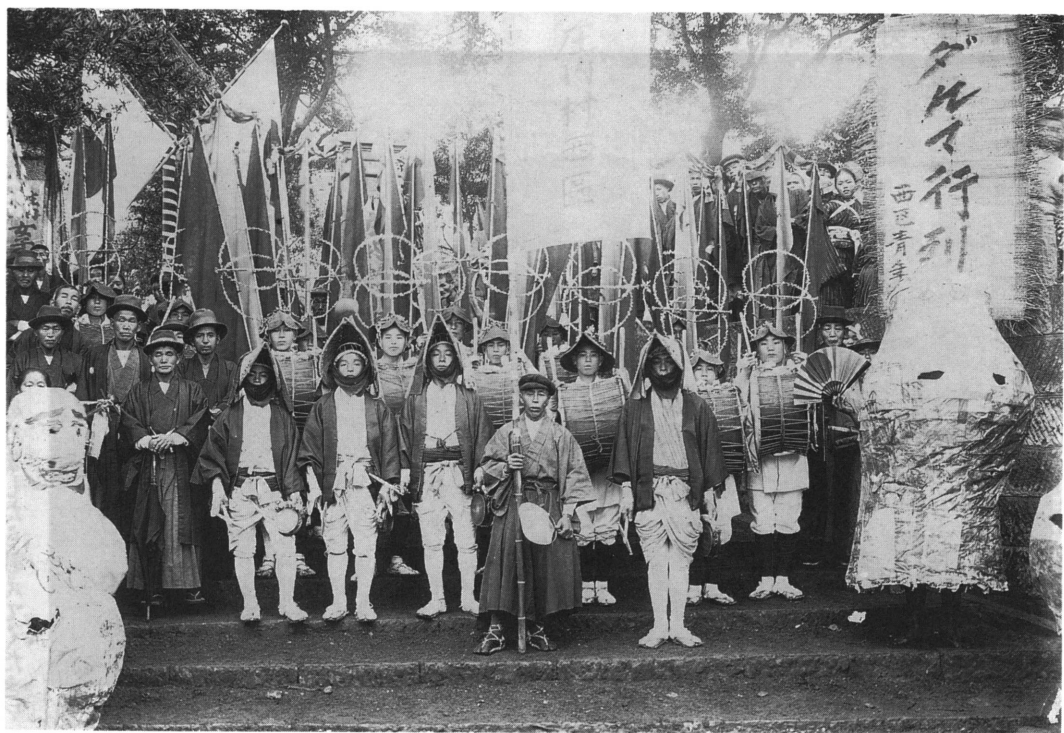
この写真は庄内小学校正門前階段で記念撮影したものです。

鉦うち（四名）前列左から

富田 松二、新留 新助、中村 福哉、

（先導どん）、鶴村 登

のぼり太鼓（十二名）一番右が私（十八才）



町区甚句踊

町区重久正子

大正の初め頃のものではないでしょうか。  
大正八年八月に、願心寺より八坂神社を移遷  
していますので、それを記念して奉納した時  
の写真ではないかと思いますが、はっきりし  
た事は判りません。後の背景は萩原貞矩様宅  
の石垣の門前です。写真の方々は今はもう生  
存されておられません。写真の方々の顔も三、  
四人判っている丈ですが、当時はこの様な行  
事は稀にしかなかったのではないでしょう  
か。  
みんな晴れがましい元気で若々しい婦人の姿  
が印象的でなつかしさを覚えます。



※この写真を見て、お気づきの方がいましたら、教えて下さい。

昭和二十年四月

戦災後庄内小学校

落成記念町区甚句踊り



お軍神東側で写す

背景 右後の屋根はバラック建校舎

左側 2 階建の家は江口ブリキ屋さんの家（現在末原歯科医院）

左側手前の屋根は島田文房具店（現在末原歯科駐車場）

（写真提供 徳永幸男氏・済陽良夫氏）

# 昔の葬式風景

町区 山 元 昭 平

我々人間の生きてゆく間に於いて行われる祭の行事は大別して、出生、成人そして終焉に分けられるかと思えます。よろこびはさること乍ら人間死去については避けて通る事の出来ない厳粛で最も大きい最後の祀りの行事です。

それで、往時の葬儀の風習模様など写真を通じて昔をしのんでみたいと思います。昭和十年前後の頃のものだと思います。

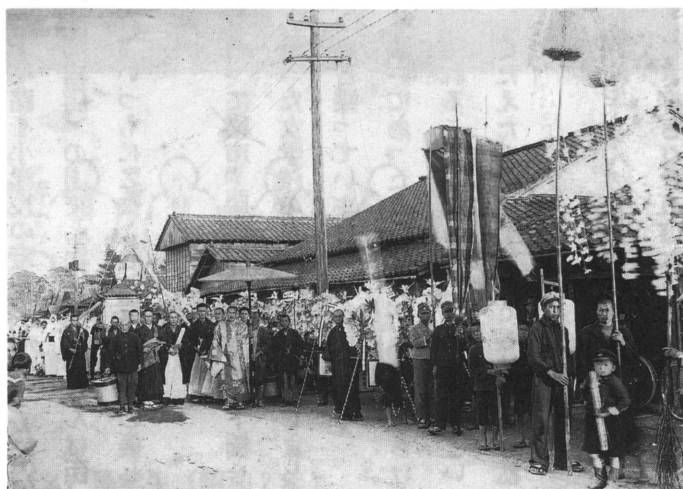
この写真は類家の町区神田、山口徳太郎様の葬式の時の写真だと思えます。背景は山口家の前の風景で、雑穀、食料品等を手広く商賣されていて家の構えも大きく、隣りに見える二階建の家は当時丸宮建設KKの昔の倉庫かと思えます。

葬儀は仏式で上等送りの様で、願心寺の前々御門主、大河内超然師で伴僧に松川様、西嶋様の法衣の姿も見られ、なつかしい風景です。当時は土葬が主で葬儀には、ほうき、花立竿、送り提灯、赤白の葬旗、花輪などにぎにぎしく立並べて盛大に行列をつくり読経を唱えて、家族類家の方々は男は紋付袴をはき、

女は頭に白布をかぶって亡き人を惜しみ乍ら墓所まで行ったものでした。その折の旗持などは、附近の小中学生が受持つ習慣だった様です。墓まで送ってゆくと墓掘の人が先に穴を掘っていて埋葬したものでした。又旗もちの人達はそれぞれ帰ってから係の人から握りめしと賃金を拾銭式拾銭と時の時価で貰っていました。

現在は納骨堂が各部落に建てられ、ほとんどが火葬によって茶毘にされて祀られている様です。又風習として昔は墓所に建てられた赤旗白旗の葬式旗を二、三日してから青年の人たちは持って帰り禪として締めると身がさかしいと言って取りに行くものでした。

これらは皆なつかしい古い時代の風習のひとつです。



# 懐かしい「箱バス」

西区 田崎 ミエ

(旧姓 小林)

それは、昭和二年、私が女学校三年生の時だったと思います。庄内から都城の女学校まで通学専用バスがお目見えしたのです。どなたがどんな経緯でこのビックリする様な事をしてくださったのか知る由もありませんでしたが、あの時の驚きと嬉しさは今でも忘れることはできません。

それまで私たち女学生は何人かの徒歩通学生を除き殆んど寮生活をしていました。たまの日曜日は、わが家で過ごせるものの家族と別れての寮生活は大変寂しいものでした。この様な時に降って沸いたような朗報ですから皆飛び上がって喜んだものでした。

これに関することは、本誌創刊号で東区の秋永(旧姓木下)フミさんが「旧制女学校時代の思い出」として詳しく触れておられますが、今回その時のバスの写真が見つかりましたので再び当時を偲びながら述べてみたいと思います。

バスはジーゼル車でエンジン部を除いてすべて木で出来てい

ました。その頃は体が小さかった故かとても大きく感じたものでした。車内には、両側に一列硬い頑丈な腰掛けが取り付けられてあり後ろの方から乗り降りするようになっていました。大体二十人位腰掛けられたと思います。天井から吊り革も下がっていました。窓は写真で分かるようにちゃんと有りましたがガラスは嵌まっていなかったように思います。

このバスをみなさん「箱バス」と呼んでいました。

朝の集合場所は、町の十字路を小学校の方へ少し上がった所、熊原呉服屋(現在の山元陶器店)の上でした。運転手さんは西岳の川畑と言う人でした。いつもにこにこした三十歳位の優しい人でした。

車は庄内から牧の原を通って横市、聯隊前、そして岳下橋を渡り現在の図書館の所にあった女学校の正門前まで直行しました。途中横市からも四人ほど乗っていました。

あの頃の道路は砂利は敷いてあったようですが穴ぼこだらけでガタンガタン車の揺れること揺れること。それはひどいものでした。はらわたにこたえたあの振動は今でもはっきり私の体に残っています。

牧の原の坂にかかるると運転手さんの号令で皆車から降りて、後ろから横から車に取り付き押さなければなりませんでした。



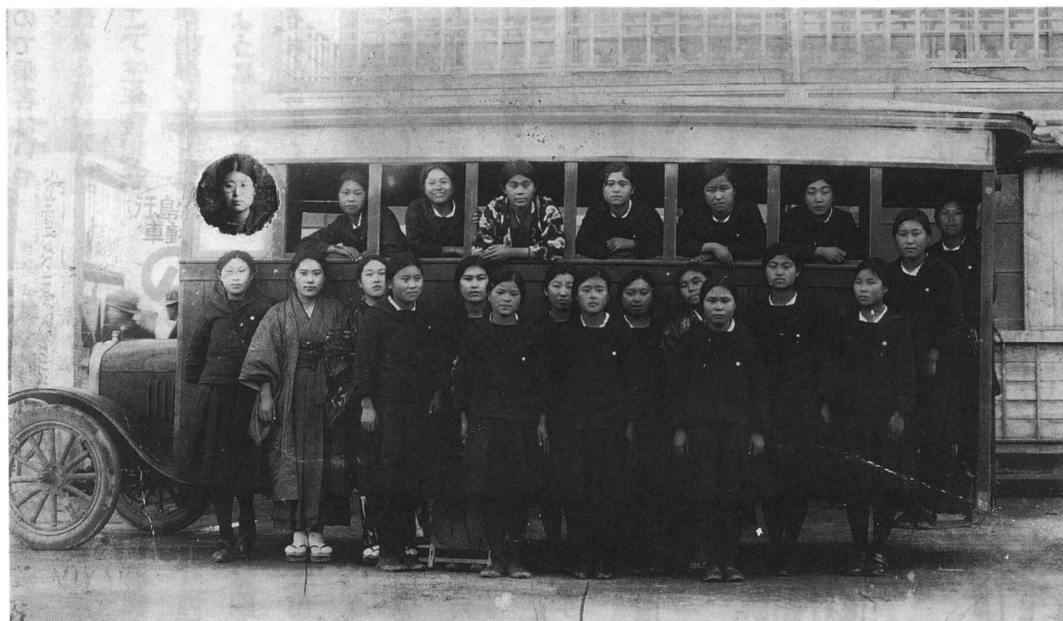
また天気の良い日は濛々と埃を巻き上げながら走りましたが後ろの方から車内に砂埃が容赦なく舞い込み黒い制服や髪は真っ白になったものでした。

帰りの乗り場は上町の小林旅館前のバス停留所でした。現在の広口警察官駐在所の付近でした。この脇にマカランヤと言う雑貨屋さんがあり色々なものが一杯並べてありました。私たちはここで「箱バス」の来るのを待ちました。

この写真撮影の場所は定かではありませんが、写真の左側に「鹿児島行自動車のりば」の標識が読み取れますのでヒョットすると都城の停留所かも知れません。

何れにしても庄内にバスが走ったのは此の私たちの通学専用車が初めてでしたのでわざわざ見物にくる人もありました。こんなとき私たちはチョットシタ優越感に浸りながら車中の人になったものでした。

その頃庄内都城間は乗合馬車が走っていま



箱バスと通学生（昭和2年）



した。馬は走りながらよく「おなら」をするもので乗客はいやが応でもその匂いを嗅がされるものでした。

私たちの「箱バス」が庄内の人々を驚かせて二、三年後現在のタクシーのような四、五人乗りの乗合自動車が出現しました。それからしばらくしてモダンな定期バスが走るようになりましたがこの様な発展の中で私たちの「箱バス」もそれから長く経たないうちに姿を消したように思います。

昔々のことです。から記憶違いもあると思いますが懐かしい「箱バス」や一緒に通学した皆さんの写真に見入りながら書いてみました。

(写真提供 済陽良夫)

## つりん（吊井戸）

平田 和田 盛行

つりん、この言葉は方言として死語となりつつある。現代に於いては、もう聞く事は稀である。ここ上平田地区には、各家庭に一ヶ所ずつの深さ十メートル前後、周り一m二十cm程の穴

状の筒型のつりんが掘られているのであるが、現在は殆んど埋めつくされたり、或いは蓋をして危険を防いでいるかで利用されていない。かつ車に麻縄を垂らし、つるべ或いは木製のタンゴを吊し手操りで十五、六回もして水を汲み上げていたのである。日常使う水としては朝夕の洗い物、洗濯、そして風呂の水汲みである。これが大変な仕事なのである。

幼かった日の記憶として未だ忘れる事の出来ない思い出の一つに、私が小学二年生の頃こんなハブニングがあった。隣りが福留さん、昔の駄賃取り、いわゆる荷馬車挽き家で、山神祭り



## けごのたね屋

東区野崎兼次

のお祝いがあった。すっかりほろ酔い気分で帰路につかれた庄内町西区の猪俣さんと言う人がぎど口の脇にある小生宅の古井戸にあやまって落ちこまれたのである。底に水が溜まっているものだから怪我一つされずにつりんの中で鼻唄を唄っておられる。地上ではびっくりぎょうてん大の騒動である。梯子をつり提げたりロープを垂らしたりしててんやわんやのさわぎである。幸いにも猪俣さんは引き上げられて事無きを得たのであります。終戦後十年位はつりんは現役として、我々の生活に恵の水を與えてくれたのである。その後四、五軒のグループ毎に簡易水道が取り付けられ、つりんは姿を消していった。現在ひねればジャーと水が出てくる有難いご時世であるが、つりんの事を思うと感無量の気がするのである。

薩摩狂句にこんな句がある。

『田舎店すいかをつりんでついあげつ』

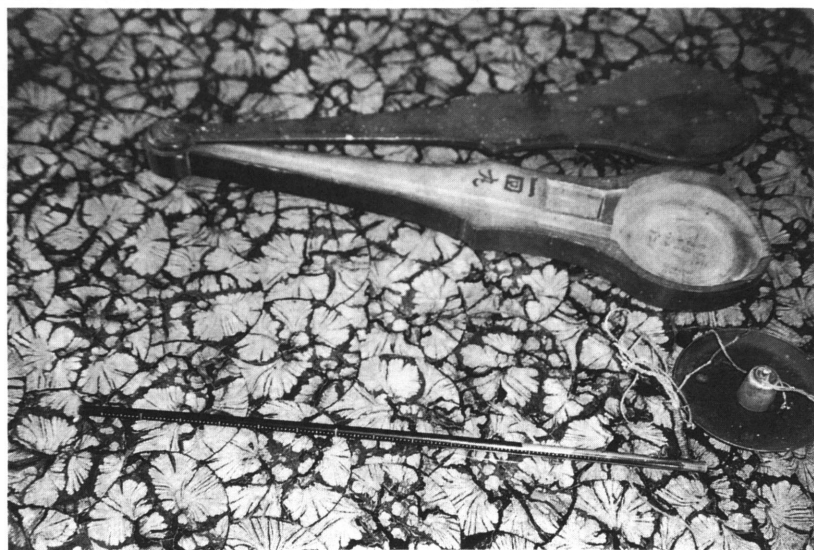
昔の風景を詠み上げた、さすがにのんびりとした風情の一つである。つりん（吊井戸）なんと懐かしいひびきであろう。人間月遊泳にいく時代、方言として無くなろうとしているつりん、私達の良き生活の場としてのつりんの想い出は盡きる事はない。

父甚助は、元治元年（一八六四年）に平田の安藤家に生まれています。私は大正八年（一九一九年）三月十五生まれだから年とってからの子である。父は、兼次（かねじ）と私を命名してくれたのですが、幼児からのあだなが「かねとし」は今も使われており正しく「かねじ」と呼ぶのは同年兵ぐらいのものでしょう。

ところで父は、明治時代盛んだった養蚕業にめをつけ、「けごのたね屋」として主な生計をたてていたようです。

当時養蚕が盛んだったことは、製糸工場を経営しているところとして、来住どん、永田どん、長倉どん、竹山どん、安藤どん、南崎どんがあり従業員を多く使っていたところもありました。まゆは山田村や西岳村からも持ちこんでいたので、当時としては花形産業のひとつであったと思います。けご（かいこ）をおやしている家は、けご棚がたくさん置けるように天井の高さや保温のためのいろいろの作り方にも工夫されていました。

この花形産業に目をつけ、父が「けごのたね屋」を本業としていたこともうなずけますが、今わが家に残されている「けごのたね」を保存するための松製の箱が残っています。原物は松板の厚いものを使いたて・よこ・はばもかなり大きくかかえ上げてもかなりの重さがあります。この箱にけごのたねを入れて暑い夏の間、霧島山中の岩がまのところまで背負って持って行っていました。春蚕（はるご）が生みつけた卵を涼しいところに保存して、秋蚕（あきご）にするための工夫のようでした。霧島山中の岩がまといっても本人だけが知っていたようです。秋蚕の生みつけた卵を冬季節保存するのは、暖房を工夫していたようです。けごのたねを売る仕事ですから、わが家に小さなはかりが残っているところを見ると、重さを基準にして売っていたと思われる。



# 前田どんの「古着行商鑑札」

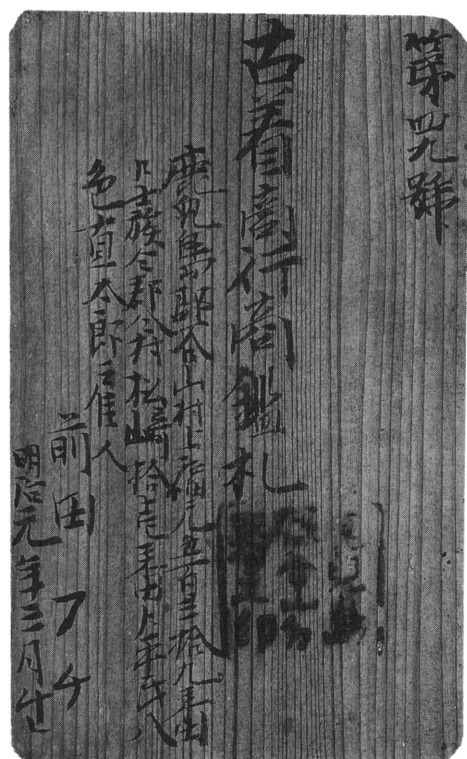
編 集 部

この鑑札は前田正秀氏宅に保存されているもので、祖父久道氏が島津藩直営の金山の鉄工所で働いて居て、退社後、鹿児島県始良郡横川町山ケ野で鍛冶屋を開業され、久道氏の母フチ様が明治三十六年に「古着商行商鑑札」を得られた時のものであり、これは現代の「古物商許可証」の類で行政・商業慣習の上から見て、当時の生活様式を知る上に於いて貴重な資料であります。

庶民生活に於いてこの様な許可証が各職種に発行されていたのではないかと考えられます。この鑑札を見分しますと、「士族」「平民」が区別されていて時代の流れを知る上に於いて参考になります。

前田家は大正十三年に庄内に移って来られ、鍛冶屋を開業されて現在に至っています。

(写真提供 前田正秀氏)



第四九號

古着商行商鑑札

鹿児島縣令山〇之印

士族令郡合村松崎拾壹番地平民

八色直太郎雇人

前田フチ

明治元年三月生

鹿児島縣令山〇之印

裏

明治三十六年一月十日許可

# 昔の遊び

東 区 黒 木 ツ ミ

私は明治四十三年に志和池村に生まれ、現在、八十四才です。今回は、私が小さい子供の頃から小学校を卒業する頃までの遊びを紹介してみたいと思います。記録をたぐりたぐり、そしてできるだけ当時の言葉で書いてみました。

○年代―大正初期

○場所―志和池村

## 一、幼児の頃の遊び

庭先の氏神様が縁側で遊んでいた。氏神様は小型の家で屋根がふいてあり、中は板敷き、中間位の所に棚があり、その上に氏神様が祭ってある。その下が丁度子供の遊び場所だった。

### 1、ままごと遊び

草や花でごちそうを作り、木の葉と花を使っておひな様みたいな形の物を作ってならべて、お客様に仕立てゴレ（挨拶）をする。

## 2、ボトジョ遊び

母が和紙を使って作った人形で、着物を着せたり、寝かせたりの人形遊び。

## 二、小学校下学年の頃の遊び

誰が決めるのでもなく、自然に出会いの場所が決まってしまふ。近所に広い屋敷のブゲン<sup>分限者</sup>シャどん（資産家）があり、たいていは、ここの庭が遊び場所になっていた。ブゲン者どの主人は軍人で、主婦はいつも着物姿である。大きな帯をし、タスキをかけ、「あたし<sup>（わたしの家で遊んで下さい）</sup>げであすつくんやし。」と誘われていた。このブゲン者どもにも子供が五、六人おり、それに、下男、下女、子守と大家族であった。門構えが大きいので少々な兩位では遊ぶことができた。

### 1、はじっこ（おはじき）

・おはじき同数出し合って、はじいて当ると勝ち。―「まこっのっ」といって本当にやりとりする。  
・一人が全部出しておはじきをする。―「わやっのっ」といって仮に貸してもらっている。

### 2、かくれんぼ遊び

門柱を拠点とし、じゃんけんで負けた人が鬼になる。これには唱え文句があった。「ボウヨンココノットヨノスケ、

モウイイカイ」を三回大声で言う、誰かが「もういいよ。」というのでさがし始めるが、さがし終わらないうちに他の者が門柱にさわると負け。鬼は二度でも三度でも大声で唱え文句を言わなければならない遊び。

### 3、自然との遊び

友達の家は広い所で小川が流れ、田圃、山、畠ありで庭は広いし、子供の遊び場所には安全な所だった。春は田圃でレンゲの花を摘んで花束、ネックレス、カンムリ等作った。セリ摘みもした。暑くなるとサコンタロがあつてその下流は浅瀬で巾広い流水で魚をとり、山の下なので影はあるし、遊びには最高。当時、野菜じよ<sup>(ざる)</sup>けでメダカ、エビ、カニ、フナ、ハエ等、存分に採ったものだ。

### 三、小学校上学年の頃の遊び

成長するにつれ、山や野に出かけ、ツバナ、ノビル、キイチゴ等取りに行った。杉の葉拾い等すると親が喜んでくれた。ある日、ノビルを摘んで祖母にあげたらお金を二銭もらった。初めての現金収入だった。今だに忘れられない。

夏になると水泳。監視人はいないのに、子供同志橋の上から飛び込んだり、泳ぎの上手な者がいて背泳ぎ、平泳ぎ、魚泳<sup>うお</sup>ぎ等していた。いつまでも杭につかまって足だけでパチャパチャ

やっていると誰かが手を放してやる。そうされる事によって自分の泳ぎが出来たものだ。

小学校四年生になると家事の手伝いをさせられたようで、子守、お使いを初め、子供に出来る事は何でもしなければならなかった。手伝いをする事によって、色々な生活の知恵が出来たと思う。友達も同じく手伝いをしていた。でも遊びたい気持はいっぱい、学校からの帰り道に家事の手伝いをしたものだ。地域にはどこも湧き水があり、溝になっていた。その溝に鍋やはがまの黒いのがつけてあった。それをみんなでピカピカに磨いて帰ったりしていた。私の仕事は、子守と風呂桶に水を入れる事で、友達同志でやるのは遊びみたいで楽しかった。

小学校五、六年生になると、日曜日毎に他の集落の友達の誘いがあって、二、三人連れだつて出かけるようになった。友達の案内で校区内の地理、地名、公共施設等覚えることが出来た。校内での遊びは、あみもので古いあぜ糸を利用してべんとう袋、おはじき入れを作った。かぎ編みをするかぎは市販などとしていなかったので手作りしていた。小刀で竹をけずって鉤にするまでは大へんだった。漸く出来た鉤はすべりが悪くて、編み物するのに苦労した。今だに忘れられない。

秋には栗拾い。当時は、「ソマ栗」といって、余りのびてい

ない木に沢山ついていたので、子供にもたやすく取ることが出来た。帰りははだしで袋を背負い歌など歌いながら楽しい思い出がある。

十五夜祭り。十五夜は男子だけのもので、女子は仲間に入る事は許されなかった。兄たちが方々の家庭にワラもらいに今日もあしたもと幾日か行き、集めたワラで、いよいよ十五夜の日には村の青年達の手伝いで、大きな綱引きの縄が作られた。その縄をくるくる巻いて山を作り、そのてっぺんにすすき、おみなえし、われもこう等、秋の花を太目に束ねて土俵の中程におき、線香を立てて拝み、それから子供達のすもうが始められた。

お手玉作り。布で袋を縫い、その中にジュズ玉か小豆を入れて布をとじると出来上り。次のような文句を唱えて遊んでいた。

おひとつおとしておおさらい

おふたつおとしておおさらい

おみっつおとしておおさらい

およやのもつげなあんのやくし

おいつつおとしておおさらい

おてんぷしおてんぷしぷうし

これをくり返しながらお手玉を手の背にのせて向うに回して握る遊び。お手玉は親玉一つ小玉四つで遊んだ。

## 昔の子供の遊び

東区 東 幸哉

昔を思い浮べる、懐かしむ、という事は年を取った証と申しますが、時には思い浮かべるのも楽しいものです。そこで、私達の子供の頃の遊びを思い出すまとりあげてみます。

### (一) 金釘立て(カナクッタテ)

五寸釘(約十五cm)を打ち立てて、立ち跡を線で結びながら、三角形、四、五角形と大きくしながら進み後の人は、その間を縫いながら、早く追越して、ルンルン気分になるゲーム。次の様なルールがあった。

1、釘を打込んで倒れた場合は一回パス。

2、線を結んで他人の線に交叉した場合は一回パス。

3、先行者の線の上に打ち込んだ場合は、その時点で外に脱出できる。





## (二) ギッチョン(ギッチョ受け)



日本語か外国語かわからない言葉で、どこ遊びかは知りません。ルールは小さな木切れ(杉など割れ易いから、樫が良い)で作ったコマの頭を叩いて、飛び上ったところを再び叩いて遠くまで飛ばした方が勝ち。飛ばした距離はコマの長さで測った。

## (三) けんかゴマ

直径5cm内外の樫の木切れでコマを作り、棒に結び付けた紐で打ち廻しながら、相手のコマに近づけて倒す。早く倒した方が勝ち。お店で買って来て廻すのもありました。



## (四) タコ上げ

昔はヤッコタコがほとんどで、自分で作って上げること、多かったようです。

## (五) 鉄砲

物騒な物に見えますが小さな竹を切ってきて、自分で作って友達と音の大きさを競った遊び。種類は杉の実を弾丸にする杉鉄砲・松の実を弾丸にする松鉄砲、そして新聞紙などを濡らして丸めたものを弾丸にする紙鉄砲、夏は水鉄砲、今の呼び方は判りませんが、梅<sup>せんだん</sup>檀の実が大きくなった頃、モミジの木の枝で作ってよく飛ばしたギョウタンでもよく遊びました。



(六) 何という遊びか忘れましたが、梅<sup>せんだん</sup>檀の葉の柄も秋になると落ちますが、その茎を三本、三角にして落し、三角形を大きくして、その中に拾い集めた茎を入れて、入れた数だけ相手から貰う。(ジガウと言った)

## (七) カヤの穂飛ばし

稲刈りの済んだ田圃に行き、カヤの枯れ穂<sup>おもり</sup>に錘をつけて、より高く、より遠く飛ばす遊び。

(八) 冬休みは、ハマ受けをやりました。数名ずつふた手に分かれ、ハマ(直径10cmぐらいの樫の丸太を厚さ3cmぐらいに切った輪)をころがして受ける遊び。受ける棒はゴルフのクラブミ

たいなもので、二三名で山に行き、適当な木の枝を見つけて作りました。

(九) 飛行機カッタ、カッタ（パッチン）

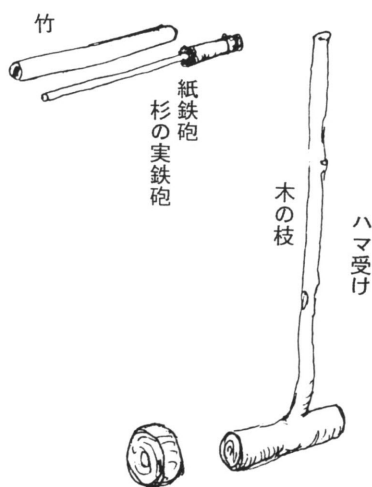
拇指と人差し指でうまくはさみ、飛ばして壁などに当て、はねかえった距離で勝ち負けをきめる。飛行機カッタの前にはやったのがカッタ打ち（パッチン）だったと思います。学校に持って行って、よく先生に叱られたものです。

この様な遊びがあったなあと、思い出し考え出しながら的確ではないが冬の遊びを挙げてみました。その他に竹を材料とした竹トンボ、機関銃、刀などを作っては遊んだものです。夏は今と同じ水遊びでした。当時は農薬の使用がなかったので、田圃の用排水路にもフナ・コイ・ナマズ・ドジョウなどがいっぱいいて、フナみぞとかナマツみぞなどと呼ばれた小川もあり、魚釣り、魚掬い、カセバイかけなどによく行ったものです。

水泳は、地区毎に泳ぐ場所が大体きまっていたようで、下級生も上級生も一緒になって泳いでいました。泳げない人がいると、早く泳げるように手助けをしてやり、溺れる人がいると上級生が助けてやるというように、今ではほとんど見られない光景になったようです。学校が指定した場所でもなく、又PTAが監視に来るわけでもなかったのですが、泳ぎ場での事故など

聞いたことはありませんでした。

当時の子供の遊びでは、季節に合った遊びで、遊び道具は、できるだけ自分達で作るといのが主体だったように思います。



# 読者よりの便り

編集部

宮崎市 山口 保明

前畧、調査、研究、原稿化、印刷と、手間のかかること、重ねて第六号になりました由、心より敬服申し上げます。民俗史や庶民史からみますと、貴重な報告もあり、大変うれしく拝読いたしました。皆さまのご精進に衷心より御礼を申し上げます。

宮崎市 松岡 優

前畧、「庄内」を毎号楽しく拝見。特集「昔の食生活を探る」は子供の頃の食生活を懐かしく思い出します。江口高見委員さんの御努力で他県在住の方も喜ばれました。道行けば皆顔見知り、ものいえば皆国なまりなつかしふるさとして、知らない土地へ行って自分の生れた土地、育ったところは懐かしいものです。編集部の皆さまのご健勝とご活躍をお祈りいたします。会員の皆さまへもよろしく申し上げてください。

室屋 勝一

前畧、原稿送付申し上げます。庄内の史談誌に掲載できるような内容でないことは十二分にわかっておりますが、庄内在校時のことなと思って筆をすすめました。自分史のようになつて、申し訳ありません。編集部の皆さん、ご苦労さまです。

横浜市 吉村 史朗

前畧、久し振りに故郷に帰り、伯父（花盛林）宅で「庄内」を見て感激しました。子供の頃見聞いた何気ない話も故郷を離れ、わが子が大きくなってくるにつれ貴重なものに思えて来る今日この頃です。編集部の皆様の御健闘を祈ります。

## 御寄附の謝礼

編集部

長岡孝徳様、去る九月十三日、御母堂様の十七年忌に帰省の由、お会いできず失礼しました。その節、坂元徳郎さんを通して多額の御寄付頂き、勝手元不如意のこの会にとって感謝、感激の至りです。早速会員に紹介し、有効な使途を考慮中です。紙上をもって厚くお礼申し上げます。

# 編集後記

# 編集部

「うれしい悲鳴」、古くから引用される言葉ですが、本号の

原稿の集まりには驚きました。およそ文章を書くと言うことは億劫であり、抵抗なしにすらすらいかないものなのです。

そこで、乏しい知恵をしぼり、考え出したのが昔の古い写真

を通して当時の事を語り伝えようとの着想でした。「仏壇の下

や納戸（物置き）の奥に眠っている写真を再び蘇らせよう。」

の編集部員の呼びかけに、会員、地区民の関心が寄せられたものでしょう。

珍しい行事風景や当時の風俗習慣が伺われる貴重な写真を寄

せて頂いた方々、その取材に奔走してくれた編集部員に対し深

く感謝申しあげます。

この試みは次号にも引継ぎますので、宣伝旁々この輪を拡げ

て頂きます様お願いして編集後記とします。

お詫び 原稿を寄せて頂いた宮崎の牧ノ瀬様初め多くの方々の原稿を

掲載できず、次号廻しにしましたことをお詫びします。

編集長

臼杵徳光

坂元徳郎

副編集長

木幡敏正

清水省三

山元昭平

片ノ坂 登

和田盛行

菓子野 美和子

山元一信

馬籠 英男

江口高見

大川原 紀美生

帖佐ミヤ

# 庄内 第六号

平成六年十一月一日 印刷

平成六年十一月三日 刊行

刊行  
編集

庄内の昔を語る会

都城市庄内町庄内地区公民館  
電話（〇九八六）三七〇八八八番

印刷 株式会社 文昌堂

都城市東町十八街区一号  
電話（〇九八六）三二一一二二番

